西都市埋蔵文化財発掘調査報告書

第　8　集

平田・童子丸線道路新設工事に伴う酒元
遺跡の埋蔵文化財調査報告

1989・3

宮崎県西都市教育委員会

序

豊かな自然と歴史的な景観が、内陸都市の西都市には数多く残されています。しかし、近年の諸開発によって失われていく遺跡も少なくはありません。

このような現状の中で、西都市教育委員会は開発行為の事前に発掘調査を実施し、記録保存の措置を積極的にすすめ、あわせて史跡の保存にも努力いたしております。

ここに刊行しました西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第８集は、本年度に、西都市都市建築課の委託を受けて実施した、平田・童子丸線道路新設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書であります。

調査結果は本書に記載したとおりですが、古墳時代の初期から中・近世にかけての貴重な遺跡や遺物が多く検出されました。

この報告書が、市民各位の埋蔵文化財に対するご理解を深めていただく資料として、また社会教育・学校教育の教材・研究等に、広く活用していただくならばまことに幸いであります。

なお、発掘調査から資料整理にいたるまでの関係者をはじめ、西都市都市建築課の担当者、地域住民の方たちの積極的なご協力に対しまして、心から厚く御礼を申し上げます。

平成元年３月３０日

西都市教育委員会
教育長　　篠　原　利　信

例　　言

1. 本書は、平田・童子丸線道路新設工事に伴い、西都市都市建築課の調査委託を受けて、西都市教育委員会が実施した酒元遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和６３年１１月１６日から平成元年１月３０日までの間に実施した。
3. 調査関係者は次のとおりである。

都市建築課長　長友堯正
同　補佐　原田治雄
同　係長　高橋芳徳
同　主事　井上　功
教育委員会
教育長　篠原利信
社会教育課長　伊藤政実
文化財係長　黒川忠男
調査員、西都原古墳研究所長　日高正晴
同　嘱託　緒方吉信
同　主事　蓑方政幾
遺物整理協力　関谷憲子
調査作業協力　篠原　時江・緒方タケ子・黒木トシ子
久保田要子・長谷川クミエ・藤原秋子

4. 本書に使用した図の作成、本文の執筆並びに編集は緒方吉信が行った。また、本文末尾まとめの執筆は日高正晴が行った。
5. 本書の遺物実測は緒方が行ない、遺物の分類は日高が行なった。
6. 本書に使用した遺構等の一部に略記号を付した、次のとおりである。
T－トレンチ。P－柱穴（ピット）
7. 本報告の方位は磁北である。
8. 本調査によって出土した遺物は、西都市歴史民俗資料館に保存し展示される。

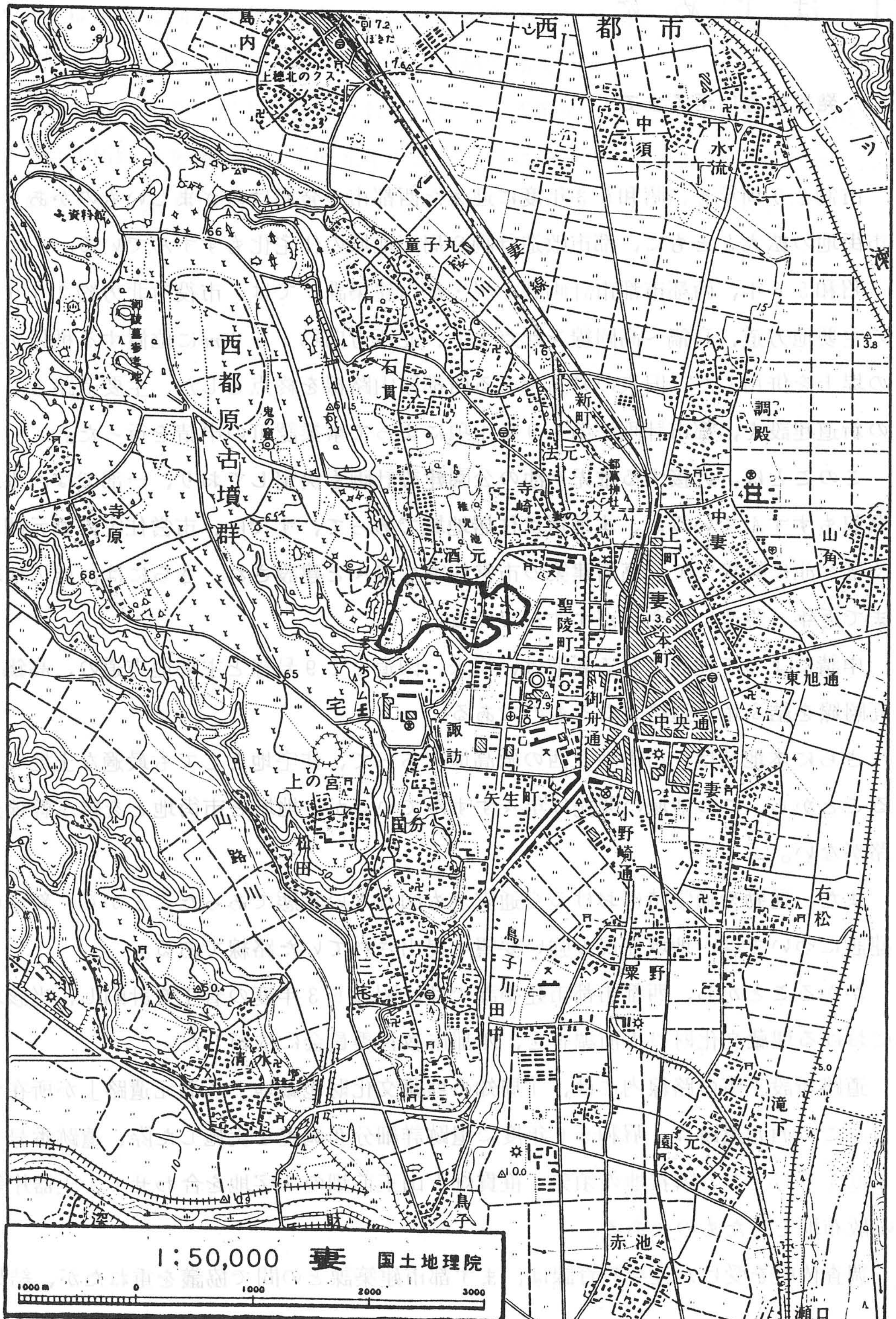
目　　次

Ⅰ　はじめに
1. 発掘調査に至るまで …… 2
2. 遺跡の位置と歴史的環境 …… 5
3. 発掘調査の概要 …… 11
Ⅱ　遺構と遺物
1. 遺　構 …… 17
2. 遺　物 …… 42
Ⅲ　ま　と　め …… 77

挿　図　目　次

第1図　酒元遺跡位置図 …… 1
第2図　酒元遺跡発掘調査周辺図 …… 4
第3図　周辺遺跡分布図 …… 7
第4図　遺構実測図 …… 15
第5図　土層断面図 …… 26
第6図　1号住居跡実測図 …… 30
第7図　2号住居跡実測図 …… 31
第8図　3号住居跡実測図 …… 32
第9図　4号住居跡実測図 …… 33
第10図　5号住居跡実測図 …… 34
第11図　6号住居跡（推定）実測図 …… 35
第12図　遺構実測図1 …… 36
第13図　遺構実測図2 …… 37
第14図　遺構実測図3 …… 38
第15図　遺構実測図4 …… 39
第16図　楕円形状遺構実測図 …… 40
第17図　遺構実測図（A区柱穴） …… 41
第18図　出土遺物実測図（縄文土器・土錘・土師器） …… 50
第19図　須恵器実測図 …… 59
第20図　瓦実測図 …… 60
第21図　青磁・白磁・陶器実測図 …… 61
第22図　磁器・染付実測図 …… 62
図　版 …… 81

第１図　酒元遺跡位置図



西都市
島内
上穂北のクス
資料館
童子丸
妻線
中須
下水流
西都原古墳群
石貫
鬼の窟
新町
調殿
寺原
寺崎
稚児池
都萬神社
妻のクス
中妻
酒元
上町
山角
聖陵町
妻
本町
東旭通
宅
御舟通
中央通
諏訪
上の宮
矢生町
下妻
国分
山路川
松田
小野崎通
右松
鳥子川田
栗野
清水
滝下
園元
鳥子
赤池
瀬口
1:50,000 妻 国土地理院

Ⅰ　はじめに

1　発掘調査に至るまで

市制２０周年を、昭和６３年度に迎えた西都市の発展はめざましいものがあり、市街地の拡大とともに、都市改造計画や周辺地域の住宅化もすすんでいる。

昭和５６年、西都市都市計画課（現・都市建築課）では、市役所北方約２００ｍの主要地方道、高鍋～高岡線を起点とし、北西方向約４５０ｍに位置する稚児ヶ池の堤上を併用した、旧来の県道である西都原山路線を終点とした、主要道路としての新道建設を、都市計画法第５９条１項によって事業認可の申請を行った。

このことは、近接する稚児ヶ池の公園建設計画も決定しており、一部では、用地買収もすすんでいるが、本地域は住居地域であって、すでに、市営住宅の酒元団地や稚ヶ池に隣接して、高層建築の市営住宅も着々と建設され、さらには、周辺地域まで近年・急速に住宅化がすすんでいる。

申請によって建設される新道は、将来、国道２１９号線と主要地方道の、高鍋～高岡線を結ぶ産業道路となるものである。

さらに本地域は、市街地北西の微高地であって、住宅地としても最適な土地であることから、この地域の開発は年々すすんでいるが、地域と市街地とを結ぶ幹線道路がない。

また、通勤や通学時における交通安全も図れない状態であったことから、新道の建設については、地域住民の強い要望も提出されていた路線である。

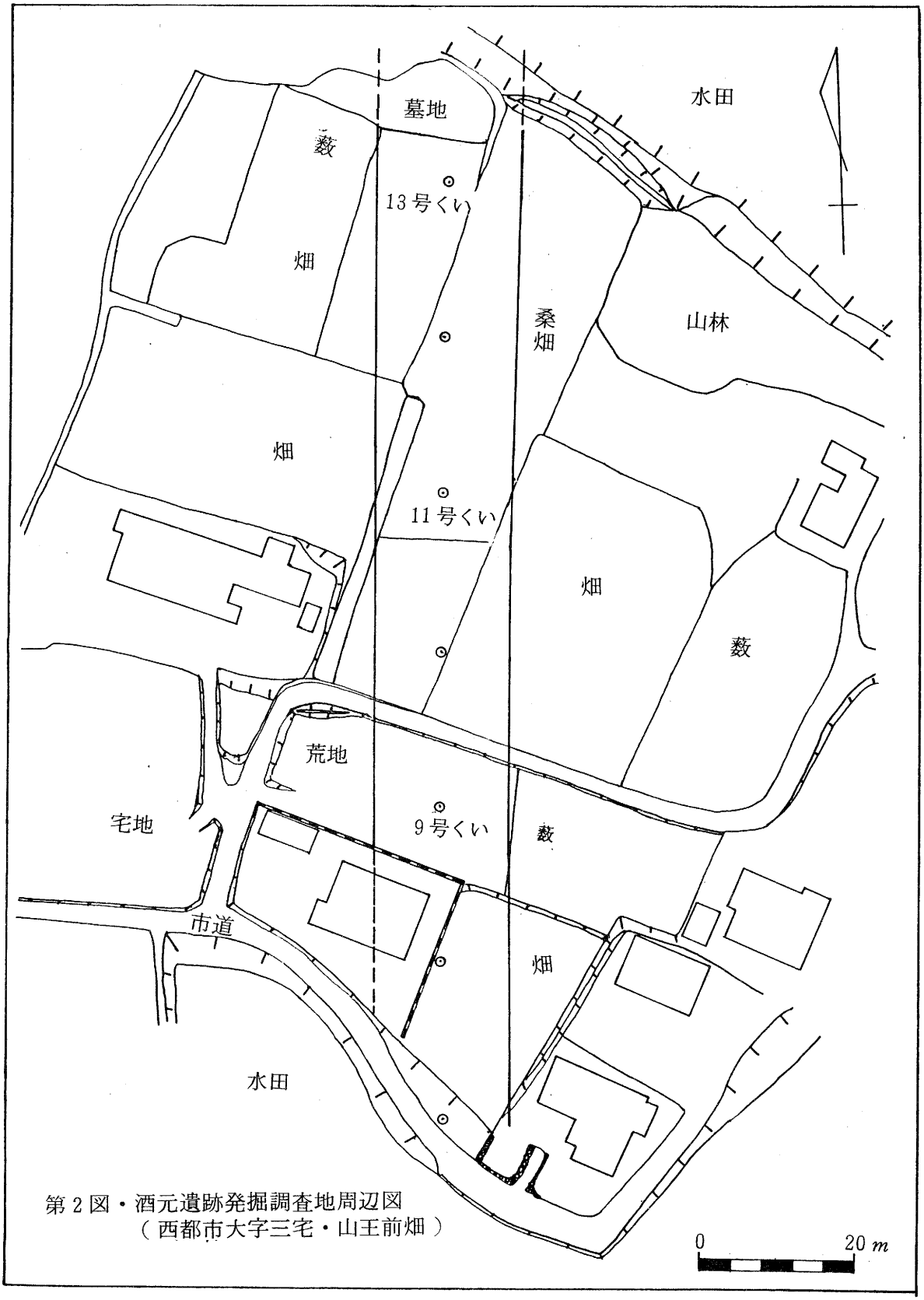
かかることから、西都市都市建築課では、昭和６３年度の着工を計画し、当該地における埋蔵文化財の事前調査を、西都市教育委員会に依頼した。

道路新設工事の路線内には、「周知の埋蔵文化財包蔵地」「酒元遺路」が所在する。この酒元遺跡は、昭和６０年度に遺跡詳細分布調査を実施した際、遺跡番号１０１５号とし、隣接地の須先・笹貫畑と山王前畑の３字地を合わせて、土器片等の散布地としたものである。

調査依頼を受けた社会教育課は、まず都市建築課との間で協議を重ねたが、結果

としては工事計画の変更が困難であるため、着工前に発掘調査を実施し、記録保存の措置をとるため、調査主体を西都原古墳研究所とした。

調査は、昭和６３年１１月１６日に開始し、季節的にも天候に恵まれ、古墳時代早期の住居跡等を検出し、平成元年１月３０日に発掘地の埋戻し作業をもって、すべての調査を完了した。



第2図・酒元遺跡発掘調査地周辺図
（西都市大字三宅・山王前畑）

2　遺跡の位置と歴史的環境

西都市の中央市街を包含した穂北平野は、西方に九州山地を背景とした、豊かな水田農耕地帯であって、その東端を流れる一ツ瀬川は、山地内に湧出する泉を集めて流れる、西都市の母なる川である。

一ツ瀬川の流域にはまた、海抜５０～８０ｍ程の丘陵が九州山地から岬様に、南東へ東方へと大小幾条も延びている。

中央市街地の西方に位置する西都原台地もその一つであり、他丘陵と同じく起伏のはげしい陵線を枝状に張り出している。

この西都原台地は、３００余基の古墳が台地の縁辺部を主として築造されているが、穂北平野に面した裾部には、微高地が台地を取り巻くように連続的に広がり、古代から人の住める最も良好な条件を備えていた。

山王前畑を中心とする周辺地域を概観するとき、西都原古墳群の古墳が密集した地域はすでに風土記の丘として整備されているが、酒元遺跡のすぐ上に位置する第１古墳群内には、昭和３１年９月に縄文前期の原口遺跡が確認されている。

発掘調査例の少ない西都市ではあるが、西都原からは、昭和５８年９月に弥生時代後期の方６ｍを計測する竪穴式住居跡２基が検出されている。

また、穂北平野の東方対岸上に位置する茶臼原台地からも、同時代の遺跡が検出されているが、この両台地上からは、古くから打製・磨製の石器等が表面採取されていた。

遺跡詳細分布調査による散布地、いわゆる遺跡の所在が推定できる地域は、市内平担地のほぼ全域に拡がりを見せているが、本調査に関係する道路新設地の延長線地域も、弥生・古墳時代等の集落跡が埋蔵されると推定されていた。

この地域周辺では、すでに昭和２３年、日向考古調査団によって発掘調査が実施され、古墳時代後期から、平安時代に至るまでの間、長期に繰り返し経営された寺崎住居跡も検出されている。

出土遺物については、土師器・須恵器・土錘・石錘・和鏡・硯石等と多彩なものであるが、中には鉢形の物やカマド形の土器も加わっていた。

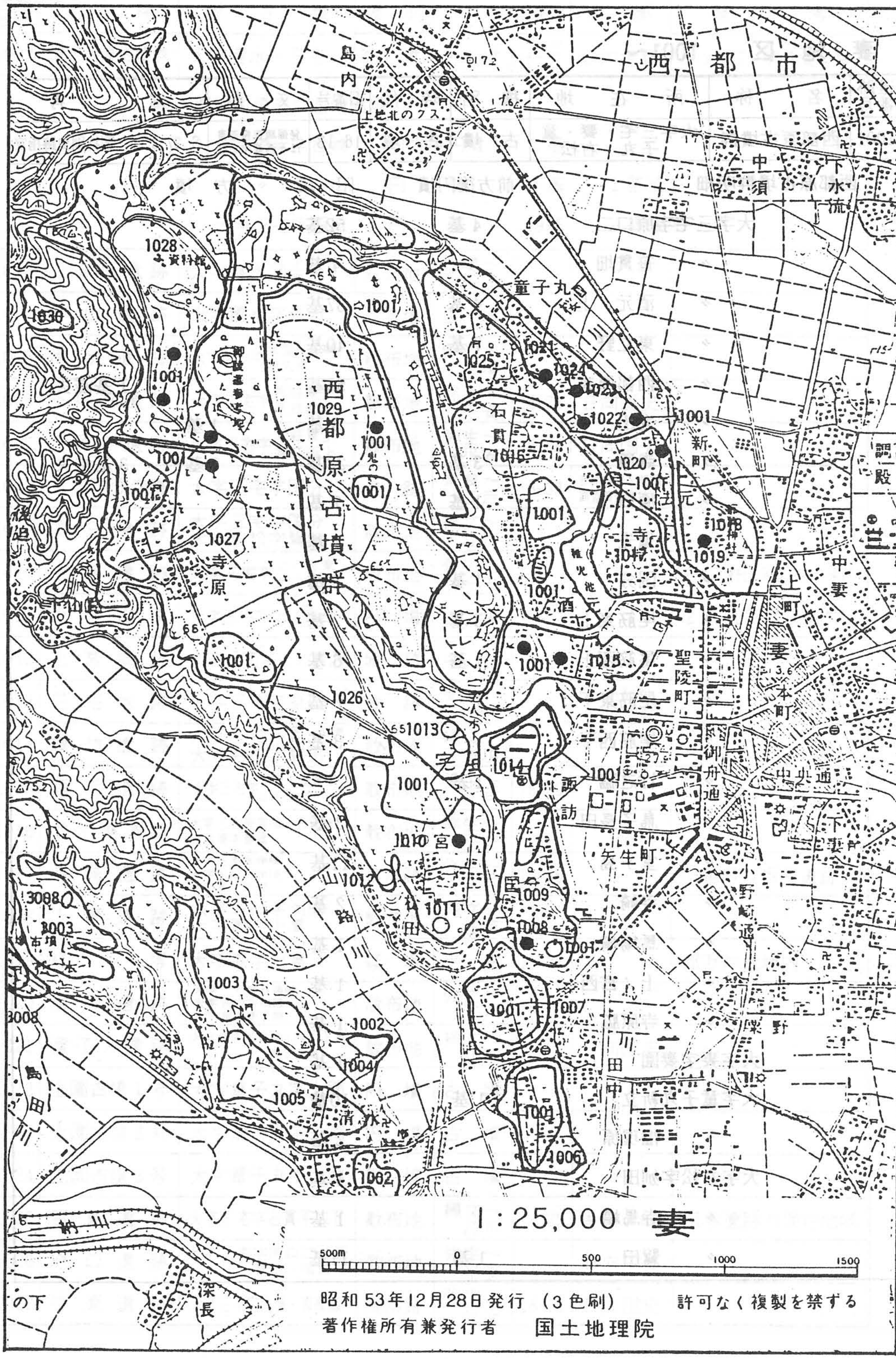
さらに、酒元遺跡の西南に隣接した、同遺跡より一段と高い西都原との中間地には、国衙時代の国分尼寺跡があるが、この地は、現在県立妻高等学校用地内であり、ここからさらに約３００ｍ南の位置に、一国一寺の日向国分寺跡が保存されている。

これらの遺跡は、古墳時代に入る頃から、急速な生産活動の発展を示すものであり、生活環境に最も適した穂北平野と、西都原台地間の裾部に当る微高地は大集落が形成され、国衙・郡衙の公的施設も形成されたと思考される。

西都原のみならず周辺の台地には、前方後円墳を主とする古墳群が所在するが、歴史時代に於いてもこの地方は、古代日向国の中心的な役割を果たしてきた地域である。

本調査地の中央部に接して１戸の古い民家がある。昭和３０年２月２日付・重要美術工芸品として国の指定を受けた「銅印・児湯郡印」は、この民家に代々伝承されたものである。

第３図　周辺遺跡分布図



西　都　市
島内
上江北のフス
中須
下水流
童子丸
1028
資料館
1030
1001
1025
1021
1024
1023
1022
1029
西都原古墳群
石貫
1016
1020
新町
調殿
1027
寺原
1018
1019
法元寺
1017
酒元
中妻
上町
妻
1015
聖陵町
本町
1026
1013
1014
諏訪
御舟通
中央通
下妻
1010
宮
1012
1011
1009
1008
矢生町
小野崎通
3088
3003
3008
1003
1002
1004
1005
1006
1007
1062
清水
栗野
島田川
三納川
の下
長
1:25,000 妻
500m
0
500
1000
1500
昭和53年12月28日発行 (3色刷)
許可なく複製を禁ずる
著作権所有兼発行者　国土地理院

遺跡分布図明細（第３図）

妻　地　区　　1001～

遺跡番号	名　　称	所　在　地	種　別	時　代	旧番号	文　献	備　　考
1001	西都原古墳群	大字三宅・妻・童子丸・右松	古　墳	古　墳	16-13	発掘調査報告書ほか西都市史等	S.27.3.29. 国特別史跡指定

西都原古墳群明細	前方後円墳	円　墳	方　墳	
大字三宅字原口二	4基	52基		
〃　笹貫畑		4基		
〃　酒元ノ上	4基	37基		
〃　東立野	7基	40基		
〃　西都原東		53基		1基滅失
〃　丸山		3基	1基	
〃　寺原	3基	22基	1基	3基滅失
〃　原口	1基	7基		
〃　須先		1基		
〃　国分	1基	2基		
〃　尾筋東上	3基	2基		
〃　尾筋西上	1基	6基		
〃　尾筋東下	1	2基		
〃　尾筋西下		3基		
〃　竹之脇	1基			
〃　鳥子長田		3基		
〃　堂ヶ島		11基		
〃　寺崎		2基		
〃　馬場崎		1基		
〃　上ノ宮西		1基		
〃　寺原脇		1基		
大字妻字妻園		1基		
大字童子丸新立	1基	10基		
〃　権現原		2基		
大字右松字刎田		1基		
〃　寺馬場		1基		
〃　鷺田	1基	11基		

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	旧番号	文献	備考
1002	清水西原古墳群	大字清水・三宅	古墳	古墳	16-30 16-31 16-32	日向地誌	S.9.417. 県指定史跡
		清水西原古墳群所在地明細 大字清水字松崎　前方後円墳　2基 〃　寺山　円墳　4基　1基滅失 大字三宅字西原　円墳　19基　1基滅失					
1003	上ノ原遺跡	大字清水字上ノ原・寺山	散布地	古墳～平安			
1004	寺山遺跡	大字清水字寺山	散布地	古墳			
1005	清水遺跡	大字清水字大薗・松崎・慶久原	散布地	弥生～古墳			
1006	下尾筋遺跡	大字三宅字尾筋東下・尾筋西下	散布地	弥生～平安	16-28	日向国史	
1007	上尾筋遺跡	大字三宅字尾筋東上・尾筋西上	散布地	弥生～平安	16-28	日向国史	
1008	日向国分寺跡	大字三宅字国分	寺跡	奈良～江戸	16-33	日向地誌・発掘調査報告書ほか	
1009	国分遺跡	大字三宅字国分 大字右松字鵜田	散布地	縄文～江戸			
1010	上宮遺跡	大字三宅字上ノ宮東・上ノ宮西	散布地	弥生～平安			丹裳小野伝承地を含む遺跡
1011	上宮古墳	大字三宅字上ノ宮西	円墳	古墳			2基(1基は寸滅失)
1012	上宮城跡	大字三宅字上ノ宮西	城跡	中世			
1013	三宅城跡	大字三宅字原口	城跡	室町～安土桃山		日向記・日向地誌	
1014	諏訪遺跡	大字三宅字毘沙門 大字右松字鵜田	散布地	縄文～古墳			
1015	酒元遺跡	大字三宅字須先・笹貫畑・山王前畑	散布地	弥生～江戸	16-29		
1016	堂ヶ島遺跡	大字三宅笹貫畑・石貫畑 大字妻字妻園	散布地	弥生～平安			
1017	寺崎遺跡	大字三宅字寺崎 大字右松字刎田 大字妻字上妻	集落跡	弥生～江戸	16-26		旧番号は坂元遺跡
1018	上妻遺跡	大字右松字刎田 大字妻字上妻	散布地	縄文～江戸			
1019	経塚	大字妻字上妻	経塚	平安	16-27		都万神社境内
1020	法元遺跡	大字三宅字馬場崎 大字右松字刎田 大字妻字壱丁畑	散布地	弥生～江戸			
1021	童子丸遺跡	大字童子丸字横ノ内・上園・寺ノ馬場	散布地	縄文～江戸		日向国史	
1022	上園古墳1号	大字童子丸字上園	円墳	古墳			
1023	上園古墳2号	大字童子丸字上園	円墳	古墳			
1024	上園古墳3号	大字童子丸字上園	円墳	古墳			
1025	石貫遺跡	大字三宅字石貫平ノ下	散布地	縄文～江戸	16-25	佐土原藩史稿	伝承遺跡の保存地域
1026	原口遺跡	大字三宅字原口二ノ西・原口・原口二	散布地	弥生～平安		日向国史	
1027	寺原遺跡	大字三宅字寺原・寺原脇	集落跡	弥生～平安	16-24	日向国史	

遺跡番号	名　称	所　在　地	種　別	時　代	旧番号	文　献	備　考
1028	丸山遺跡	大字三宅字丸山・西都原東西都原西	散布地	弥生～平安		日向国史	
1029	西都原遺跡	大字三宅字東立野・酒元ノ上原口二	散布地	縄文～古墳		西都市史	
1030	伝・山路城跡	大字三宅字上田津ヶ丸	城　跡	中　世		日向地史	
1031	四日市遺跡	大字岡富字四日市	散布地	奈良～平安			
1032	有峯城跡	大字岡富字有峯	城　跡	室町～		日向地史	
1033	祇園原遺跡	大字右松字祇園ノ上	散布地	縄文～古墳	16-34	西都市史・日向国史佐土原藩史稿	旧番号は大口川遺跡
1034	新田原古墳群	大字右松字祇園ノ上	古　墳	古　墳	16-31	県史跡調査報告(4)	

新田原古墳群明細（西都市関係分）

大字右松字祇園ノ上　　前方後円墳　3基　1基前方部滅失

円　墳　22基

3　発掘調査の概要

酒元遺跡は、西都市役所の北方を概略東西へ直線に延びる県道高鍋～高岡線が、南へ曲折する交又点を、そのまま約１５０ｍ西進すると、特別史跡西都原古墳群台地の裾部に達する、この附近の微高地が酒元遺跡である。

この西進した約１５０ｍ間の北方に、水田を間に置いた約１２０ｍの位置に、西都原台地の裾部から半円状に、穂北平野・妻市街へ向って突出した微高地の段丘がある。この地域が調査対象地となった字地の「山王前畑」である。

今回調査対象地となったのは、この段丘を概略南北に縦断する新市道の建設に伴うもので、全長約１３０ｍ・横幅約１８ｍの土地である。

調査は前述の如く、昭和６３年１１月１６日に着手し、平成元年１月３０日に天候にも恵まれて終了したが、調査の結果南辺約５０ｍは、上層位の削平と住居跡地の整地による、大攪乱層であった事が認められた。

また調査地は、北辺から中央部付近まではほぼ平担地形であるが、中央部から南辺にかけては徐々にゆるく傾斜し、南辺に従って傾斜が強くなり、最南端は急傾斜して水田につながっている。

これを総体的に見ると、南辺の低い３階段状となっているが、本来の姿は自然なゆるやかな傾斜を持った平面地形で、畑作営農・もしくは宅地化によって現段層が形成されたと見ることができる。

調査区の設定については、道路建設用の精密な基本ぐいが、調査地の中央線を20ｍ間隔に、№７～№１３と７ケ所に打ち込まれていた事から、このくいを基準として南辺から順次に発掘したが、地形や農作物等の関係上、第４図に示した如く、広狭の差は生じたがＡ区～Ｅ区と５区分して調査区の設定を行った。

発掘の経過は、当初各調査区ごとに幅1.5ｍの試掘トレンチを1.5～２ｍ間隔に入れて遺跡・遺構等の所在を確認し、検出された遺構を拡大して調査をすすめた。

Ａ区は、表土がすでに約１ｍ下まで削平され、第Ⅲ層まで失していた。しかし、削平された時期が早期だったと思考され、中世以降のものと思われる柱穴１９個・集石遺構１基・さらに土師器等の出土が確認された。

B区は、元・西都営林署官舎の2棟が所在した所で、跡地整地の際遺構遺物の包含層以下まで深く掘り下げ、コンクリート塀の残片等・ガレキの山が埋め込まれて調査は難行した。

しかし東辺には、わずかに遺構の包含層が残され、古墳時代の住居跡とも推定できる。攪乱された土坑の2基（内1基は住居跡とした）、及び同遺構に伴う土師器が出土した。

B区はまた、北辺に幅2～2.5mの市道が横断しているが、この市道は地域住民の生活道・通学道路となっている事から、建設工事の時期に合せて調査を実施する事とし、本年度は割愛して調査をすすめた。

C区は、地表面の削平は僅少であったが、早期より桑園として継続活用された事により、幾度となく桑根が掘り返され、かなりの攪乱を受けている事が判明した。

検出した遺構等については、土坑6基・溝状遺構1基・住居跡1基・住居跡に伴うものか・柱穴21個、さらに、遺構に伴う土師器等の出土を確認した。

D区は、C区と大差のない桑園地で、地表下にはかなりの攪乱を受けていた。検出した遺構等については、住居跡2基、土坑1基・溝状遺構1基・集石遺構1基・楕円形状遺構1基と、これらに伴った土師器等が多量に出土した。

E区は、調査地の最北端に位置するが、対象地の北辺には、現在墓石は徹去されているものの、近年まで墓地として使用された所である事から調査を除外した。

出土遺構等については、住居跡2基及び、住居跡に伴った土師器が多量に出土している。

検出された遺跡遺物の概略は以上のようであるが、第1～2層に散乱した遺物や、トレンチ内出土の遺物も多く、これらを総体的に述べると、主流となるものは第1表のとおり土師器であり、縄文土器片1点、須恵器片及び陶磁器片と瓦片の少量が出土しているが、完形もしくは完形に近い遺物が少なく、攪乱された層位であることを知る事ができる。

発掘調査の概要は以上であるが、土層については層位の基本を、包含層等の確認のできる中央C区におき、縦断面実測線内に下部層の砂利層まで掘り込んで確認した。

第Ⅰ層　黒褐色土　耕作土

第Ⅱ層　同　上　第Ⅰ層と同質

第Ⅲ層　明黄褐色土　赤ホヤ層

第Ⅳ層　黒褐色土

第Ⅴ層　暗褐色土

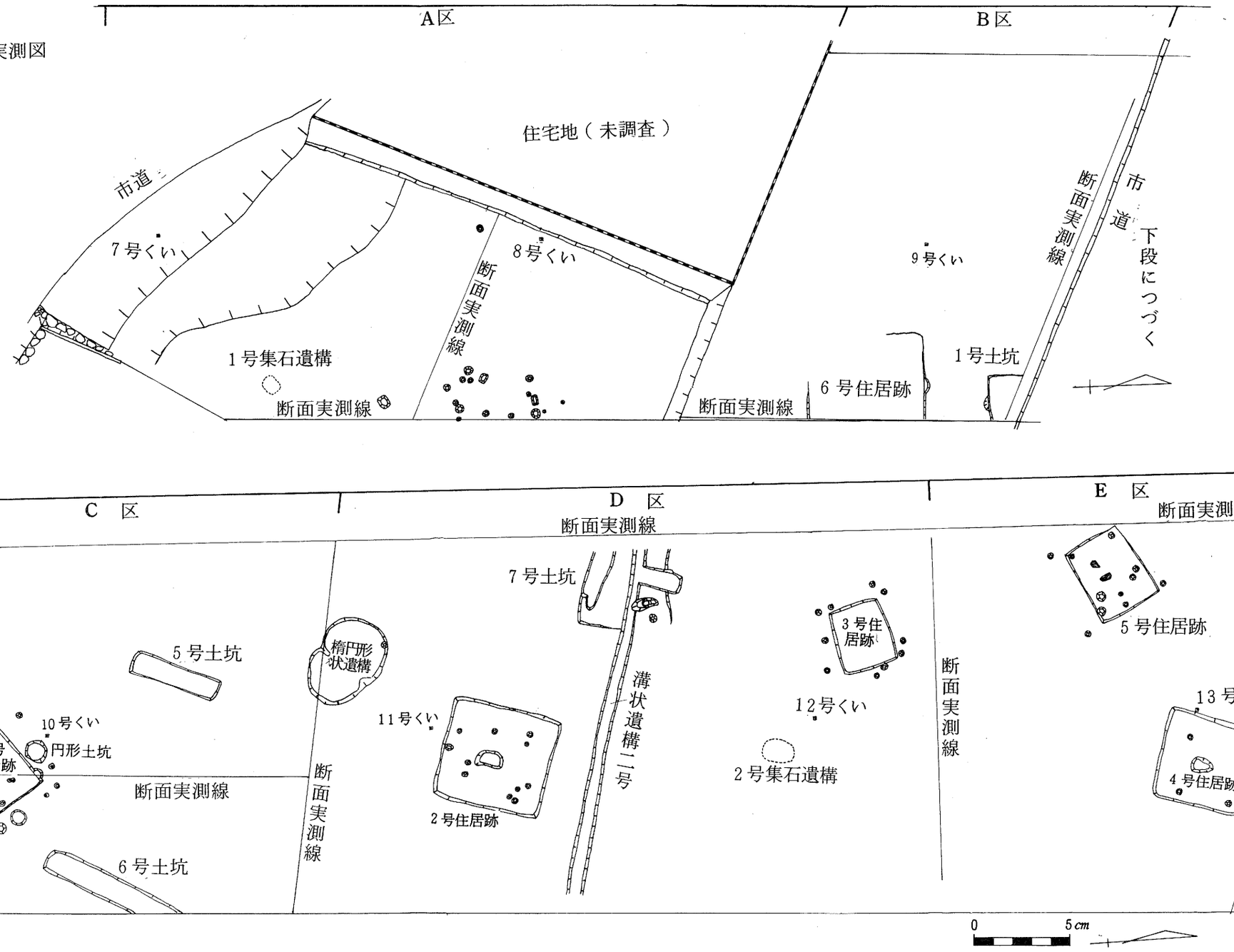
第Ⅵ層　褐 色 土　小砂粒等混入

第Ⅶ層　暗褐色土　第Ⅴ層よりやや明るい

第Ⅷ層　黄褐色土　粘土質・砂利及び石の混入する砂利層

遺物は、第Ⅲ層の上部より出土しているが、それ以下の層位からは検出されていない。

第４図　遺構実測図


A区
B区
住宅地（未調査）
市道
7号くい
8号くい
9号くい
断面実測線
1号集石遺構
断面実測線
断面実測線
6号住居跡
1号土坑
断面実測線
市道
下段につづく
C区
D区
E区
断面実測線
5号土坑
楕円形状遺構
7号土坑
3号住居跡
5号住居跡
市道
10号くい
1号住居跡
円形土坑
断面実測線
11号くい
溝状遺構二号
12号くい
断面実測線
13号くい
墓地
3号土坑
4号土坑
P—20
2号土坑
溝状遺構1号
6号土坑
2号住居跡
2号集石遺構
4号住居跡
0
5cm

Ⅱ　遺構と遺物

1　遺　　構

1号住居跡（第6図）

1号住居跡は、調査地のほぼ中央に位置するC区の、10号くいに接して検出された。規模は、略東西径の中央部が3.74m、南北径3.77mと方形状を呈している。

その東辺壁は3.72m、西辺壁3.71m、南辺壁3.78m、北辺壁3.79mを計測し、床面からの遺存壁高は約30センチを測る。

遺構の内外には、内部に5個・外部に15個の柱穴を検出したが、主柱穴は対峙するものとして、P26とP27、P32とP40の4本主柱か、もしくはP37の1本主柱で、柱穴規模は径25～35センチ、深さ約25センチと比較的に浅い。

他の柱穴については、本住居跡に伴うものか定かではない。特にP25は柱穴か否かも明確にすることができない。出土遺物は土師器が主体で第1表のとおり。

2号住居跡（第7図）

2号住居跡は、D区中心部よりやや南寄りに検出された遺構で、本調査地における最大規模の住居跡である。中央部径は、略東西が5.35m・南北5.67mと、わずかな長方形状を呈している。

規模は、東側壁5.50m・西側壁5.56m・南側壁5.10m・北側壁5.13mを計測し、床面からの遺存壁高は約33センチを測る。

主柱穴は、P44～50の2本柱と想定されたが、両方とも約10センチの深さで主柱穴としては浅すぎる。対峙する柱穴にはP42と46・P49と52の4本があり、深さは約30～50センチと適当であるが、径が約20～23センチとやや細い感じもするが、主柱は4本と考察したい。

住居跡内にはまた、ほぼ中央位置に焼土の一辺約1.55m×0.85m・深さ13センチと、断面が皿状をした楕円形状の土坑が検出された、炉跡と考えられる。

出土遺物は、高杯11点を含む土師器を主体とし、表1に示すとおりである。な

お土錘3点及び流れ込みと想定される須恵器片・陶磁器片少量も同遺構から出土している。

3号住居跡（第8図）

3号住居跡は、2号住居跡と同じD区の北西隅近くに検出された。中央部径は、略東西3.50m・南北3.02mと長方形状を呈している。

規模は、東側壁2.80m・西側壁2.55m・南側壁3.29m・北側壁3.35m、床面からの遺存壁高は約40センチを計測し、多少ひずみのある長方形状を呈する。隅は南東隅だけが隅丸で、他は方形状をなしている。

主柱穴は、P56～58～61～62の4本で、径は約30センチ、深さは約40センチを測る。

遺構の排土作業中、遺存遺構内の上部からは、径5～10センチの小石が全面に散乱していた、これらは投流入と思われるが、小砂利等に混入した土師器片106点、須恵器片12点、陶磁器片2点、瓦片2点が出土し、床面からの出土はわずかに土師器片7点である。

床の中央には、径30×40センチの川石が1個出土しているが、住居跡に関係するか否かは釈然としていない。遺構の内部は上層位とともに大攪乱を受けていた。

4号住居跡（第9図）

4号住居跡は、調査地最北のE区に検出された、中央の略東西径4.73m・南北4.88mとほぼ方形状を呈する。

規模は、東側壁4.67m・西側壁4.62m・南側壁4.67m・北側壁4.52m、床面からの遺存壁高約45センチを計測する。

床の中央には焼土が確認された。この焼土層は卵形状を呈し、中央部で1.13×0.72m・皿状の底面をもつ断面高は6～8センチを測り、焼土からして炉跡と考えられる。

主柱穴は4本で内部に確認された、径は25～35センチ、深さは42～48センチを測る。またP81は、深さが15センチと他に比して非常に浅く、柱穴とす

るにも難があった。

出土遺物は、１１点の高杯を含む土師器片が主体で、表１に示すとおり６７５点と多量であるが、内陶磁器片５点が含まれている。これは流れ込みと想定されるし、遺構の上層部も相当に攪乱されていた。

５号住居跡（第１０図）

５号住居跡は、４号住居跡の西方に約５ｍの間を置いて検出された。略東西の中央径は4.２６ｍ・南北の中央径3.２７ｍの長方形状を呈している。

規模は、東側壁3.３２ｍ・西側壁3.０３ｍ・南側壁4.２０ｍ・北側壁4.００ｍと多少のひずみがあり、床面からの遺存壁高にも大きな乱れがあり、東側壁中央で0.０８ｍ・西側壁中央で0.１０ｍ・南側壁中央で0.１２ｍ、北側壁中央で0.０５ｍと非常に浅い。

特に西北隅の遺存壁高は消滅し、わずかに痕跡を残すだけであり、また遺物の散乱等からみても、多大の攪乱を受けた遺構と推定することができる。

主柱穴は、外部の４本と想定されるが、内北西隅の１本は調査地外に位置する事から、確認されていない。３本の柱穴は、径約２５センチ・深さ約３０センチと共通して検出された。

このうち、南側の東方Ｐ７５は、住居跡東側壁の線上約0.８０ｍ離れた位置に在り、西方のＰ７４もＰ７５とほぼ対峙する位置に在る。

北側の柱穴Ｐ７６は、住居跡東側壁線からわずか内部に在り住居跡壁面から0.２０ｍしか離れていない。

住居跡床面の中央部近くには、長径0.６５ｍ、幅0.２０ｍの黒く炭化した木材片が検出され、さらに西へ約６０センチ離れた位置にも、同様に炭化した木材片が確認された。

住居跡内部の南東隅に検出されたＰ６６～６７は、小さな貯蔵穴の可能性もある。

出土遺物は、高杯７点を含む土師器主体のもので、表１に示すとおり1,０００点と多量に出土しているが、大半は小さな片である。

このように、遺存壁高の低い遺構と小片になった土器からみても、この遺構が想

像以上に攪乱されている事を示している。また床面に密着しては、縄文早期の押型文土器片１点が他に混入して出土した。

６号住居跡（第１１図）

６号住居跡は、調査地を横断する市道の南側・Ｂ区の東端中程に検出された。Ｂ区については前述の如く、遺跡遺物の包含層以下まで攪乱を受けた住宅跡地で、わずかに住居跡の一部痕跡が検出されただけである。

規模は、南北径5.65ｍ、床面からの遺存壁高として約１５センチを計測するが、東西の遺構径は、東端が調査地外の為確認する事ができなかった。しかし、概略的な見解から方形状を呈した遺跡と推定することはできる。

検出した残存北側壁は、東側境界から西へ4.30ｍで、隅丸方形状の隅を有して曲折し、約1.35ｍで消滅し、南側壁は、同じく東側境界から西へ約２ｍ延びて消滅する。

さらに北側壁は、境界地から1.25ｍ内行した位置に、長約１ｍ、奥行約２０センチの円形張り出しが確認されたが、炉跡等住居跡に関係した遺構か否かは解明されていない。

また、内部床面の残存はほとんどなく、床面と想定される位置よりさらに、攪乱された下層に遺物の大半が小片となって出土した。

これらの出土遺物は、他の住居跡同様２個の高杯を含む土師器片主体で、他に須恵器片１点、陶磁器片２点が伴出している。

総点数は３３４点と表１に示すとおりであるが、床面からの出土ではなく攪乱層よりのものであり、その他の柱穴等住居跡に関係した遺構は検出されていない。

１号土坑（第１５図）

１号土坑は、調査地Ｂ区の北東隅に検出された遺構であるが、東側は調査地外・北側は市道横断の為、遺構の全容を確認するには至らなかった。

検出した遺構部分の南側壁長は、略東西に2.35ｍ、西側壁長は南北に1.70ｍであるが、壁面は約４０センチ長しか残っていない。床面からの遺存壁高は、南面

で約３０センチである。

床面の南側端には、南西隅から1.１０ｍの長さに、幅１０～１５センチ、深さ2～5センチの溝が検出された。西端にも南北と同様の溝が検出されている。

遺構内からは、高杯1点・坩1点の完形を含む土師器片７６点、及び流れ込みと想定される須恵器片１点・陶器片１点（表１）が出土している。

これらの出土遺物は、一隅にしか検出されていないが、遺構等の規模から見て住居跡とも想定されるが、市道撤去時の調査まで結論は避けたい。また周囲が攪乱層でもあり、遺構の内外から柱穴等は検出されていない。

２号土坑（第１２図）

２号土坑は、調査地Ｃ区の南東端に検出され、東側は調査地外、南側は市道と狭小した三角地に位置している。検出壁も両端が東・南の地で切り離され、壁長も約1.４０ｍしか検出されていない。

検出した壁面は、略東端が溝状遺構１号と切合し、床面は、中央部で三角点までの約1.６５ｍしか検出されない。床面からの遺存壁高は約５０センチである。

出土遺物は、土師器主体で（表１）のとおりであるが、いづれも極小片である。遺構名については遺構の一部検出であり、壁面が、ゆるやかに立ち上がった住居跡とも想定されるが決しがたく、市道工事中の調査時まで延期したい。市道下ではまた、１号土坑と切合していると想定することもできる。

３号土坑（第１２図）

３号土坑は、２号土坑の西約1.８０ｍ程の位置に検出したＰ字形の土坑である。長軸は2.３８ｍ、横幅1.３８ｍ、狭小部横幅0.６６ｍと、変形した特殊遺構である。

遺存壁高は約２５センチ、遺構名は詳らかでなく、遺物も伴っていない。たゞこの地域が中近世に寺院が建立されていたとする説から見て、寺院に関係した遺構かとも考察されるが、決するには難が多い。

4号土坑（第12図）

4号土坑は、3号土坑の北に約70センチ離れ、近接して検出された。長軸2.01m、短軸1.30mと長方形の土坑である。遺存壁高は約50センチである。

この遺構からも遺物は伴なっていない事から、時代の推定・遺構名も決し難く、3号土坑と同様中近世寺院に関係した遺構かとも考察される。

この土坑の東約90センチの位置に、P20が検出された。この柱穴は記録として柱穴としたが、径70センチ・深さ27センチの規模ではあるが、他に一連的な柱穴も検出されていなく、土坑として取り上げるべきだったとも思考される。遺物も伴ってはいなかった。

これらの2号・3号・4号土坑及びP20は、9m×4mの区域に、間に溝状遺構1号を狭んで検出されている。

5号土坑（第13図）

5号土坑は、調査地C区の中心部からやや北西寄りに検出され、長軸4.81m・短軸1.19m（中心部）と、細長の長方形状をした遺構である。

遺存壁高は約25センチで、遺物は伴っていない。中近世寺院に関係した遺構か否かも詳らかでなく、今後の調査を期待したい。

6号土坑（第13図）

6号土坑は、C区の東端に検出され、1号住居跡の北東約3.2mの位置まで、6号土坑の先端が延びている。

この1号住居跡に接した位置から、北北東の調査地境まで、長軸約6.40m、短軸の横幅は1.30mを計測する。床面からの遺存壁高は約30センチである。

遺物は、土師器97点（完形14点）、須恵器片7点、瓦1点が出土した。土師器完形14点は器高の低い皿であり、底部はすべてヘラ切り痕を残す。瓦は布目瓦の片である。

遺構名・時代等については、遺物が遺構内の出土ではあるが、投入も考えられ、まとまって上層部に出土しているし、遺構も東方の調査地外まで延びている事から、

遺構と遺物の関係も詳らかでなく、決するには難がある。

7号土坑（第14図）

7号土坑は、調査地D区の中央部西端に検出された複合する土坑である。第Ⅲ層に切り込まれたこの遺構は、西方の調査地境界から東方へ約4m、南北長約5m内に不整形に入り組んでいる。

中央には、横幅約70センチ・深さ約25センチの溝状遺構2号が東西に横断している。また複合することから第14図に示す如く、部分的に、A～Eまでの符号を付して注釈した。

南辺のBは、遺存壁高が南東隅で約10センチと浅く、内部には、溝状に切り込まれたAが西方の調査地外まで延びている。Aの既存長軸は中央部で3.10m・横幅1m・深さ0.15mである。

Bは、Aの南側壁を同一線とし、内湾して東に約1.4m延び、さらに曲折して北方に向い、2.05mすすんで溝状遺構に接する。

溝状遺構の北面は、C・Eが連続した遺構と考察され、さらにはBとも接すると思われるが、横断する溝状遺構で両断され、C・E間にはDが床面を溝状遺構と同一にして北方に延び、CとEを分断する。

C・Eの北側壁の遺存壁高は約10センチ程で、東方に外反して延び、約4mすすんで消滅している。

このC・E間のD遺構は長方形状の遺構であって、溝状遺構を除いて長軸が約2.05m、幅1.05m、深さは約43センチを計測し、C・D壁面を切断してさらに北方へ約75センチ突出する。

C・Eの北辺遺存壁高は約15センチであるが、E区の床面に掘り込まれた柱穴状の遺構は、ともに樹木根痕跡であり柱穴と認める事はできなかった。

出土遺物は、A・Cに土師器（皿）片40点、Eに須恵器片3点、陶磁器片8点であるが、いづれも流れ込みと想定される出土状況であった。

遺構名は決しがたく、中近世寺院に関係した遺構か否かが思考される。

溝状遺構（第４～１２～１４図）

溝状遺構は、調査地Ｃ区に１号・Ｄ区に２号が検出された。１号は、前項の土坑４号から南東に延びて調査地外まで延びている。規模は、現存する全長約4.5ｍ、幅0.93ｍ、深さ0.20ｍを計測する。

本遺構の南東端は、前項2号土坑でも述べたとおり、同遺構と切合し調査地外に延びる事が考察され、北西端は４号土坑の壁部と切合して終る。

この溝状遺構と4号土坑とは、一連の遺跡と考慮すべきか判断はむつかしい。なお出土遺物は、流れ込みによる土師器小片６点が出土している。

溝状遺構２号は、７号土坑の中央部を横断して、東方の調査地境まで延びて検出され、さらに延びている事が予想される。

検出した遺構の全長は約１８ｍ、中央部で幅約７５センチ、深さ約２５センチ。東端で幅約８５センチ、深さ約２５センチと、東方部がやや広い。排水路と想定されるが遺物は伴出していない。

円形土坑（第１５図）

円形土坑は、１号住居跡の北側壁に接して検出された遺構である。規模は、径1.01ｍ×0.95ｍ、床面は0.90ｍ×0.87ｍを計測する。

深さは２３センチと浅く、遺物も伴出していない。使用目的等は解明されていない。

楕円形状遺構（第１６図）

この遺構は、調査地Ｄ区の南端部に、一部Ｃ区へまたがって検出された。概略の遺構は、円形土坑の南東部に、別個の小円形土坑が切合する８の字型を成している。

規模は、長軸4.86ｍ、短軸径3.00ｍ・3.57ｍ、中間位置には両極に張り出しがあり、北端部の張り出しは、わずかに突出して消滅するが、南端部は約３０センチの幅を有し、５０センチ程直に突出する。

この両極突出部は直線的で、直結するか他方の土坑が切り込まれた遺構か、判断については埋土の変色等からも種々の検討を加えたが、詳らかにするに至らなかっ

た。

遺存壁高は、約２７センチ・２０センチと第１６図に示す如く、両円形土坑にはやや差があるが、床面は連続的につながっている。

当初は楕円形状の住居跡とも想定されたが、遺構内外に柱穴の検出はなく、北西端の床に径２６センチ、深さ１６センチの柱穴が１個検出されたが、遺構に関係するか、柱穴とするにも難がある。

出土遺物は、土師器片３点、陶磁器片８点、内土師器片３点は、底面ヘラ切り痕を残す皿の片であり、いづれも床に密着せず、流れ込みとも想定される出土状況であった。

集石遺構（第１５図）

集石遺構は、調査地南端部のA区に１号、調査地北辺のD区に２号と２基が検出されている。

A区は、前述の如く上層位が第Ⅲ層まで約１ｍ程削平された調査区であり、１号遺構の出土地は、特に畑作も不可能な荒地であった。

表面草土を、約２０センチ削ぎ取ると検出され、８０×７５センチの方形状に検出し、長径１０センチ以内の極小割り石による遺構であった。

焼石はなく、遺物も伴出していない。床面は、中央で約７センチの皿状をした凹みを有する。

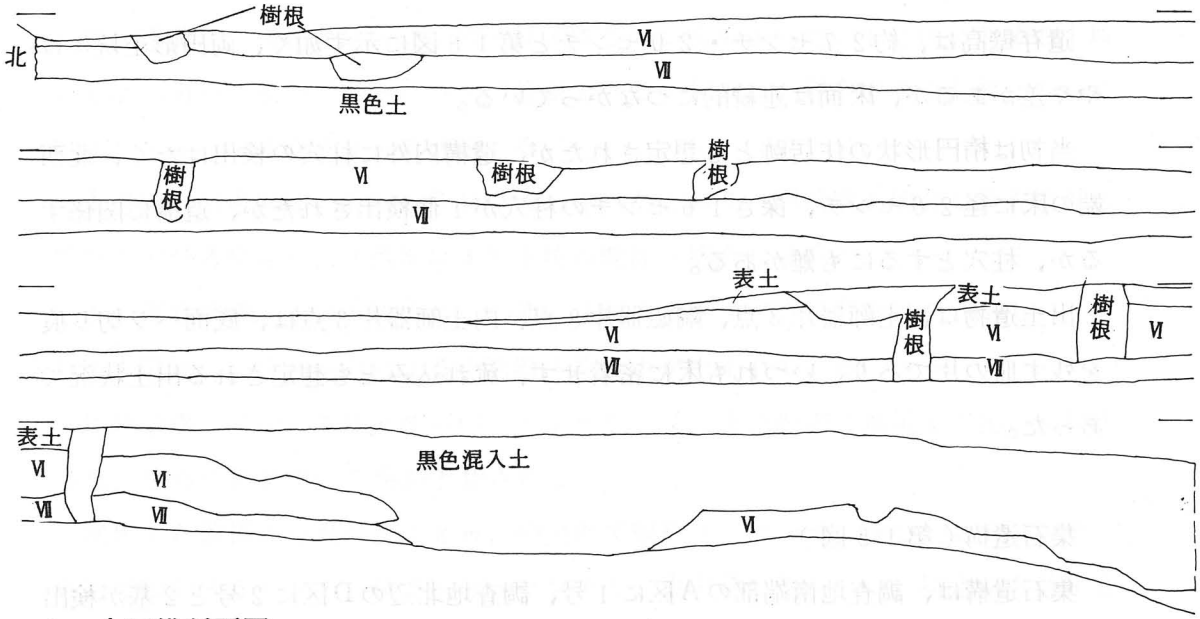
２号遺構は、前述３号住居跡の南東約５ｍの位置に、第Ⅲ層に密着して検出された。径は1.６０ｍ×1.２５ｍの楕円形状で、床面は約１０センチ深さの皿状を呈している。

材質は川石で、法量は長径５～３０センチと等一していない。焼石は含まれず、遺物は土師器片１９点・須恵器片４点が出土している。内１９点の土師器片は、底部がヘラ切り痕を残す皿片等である。

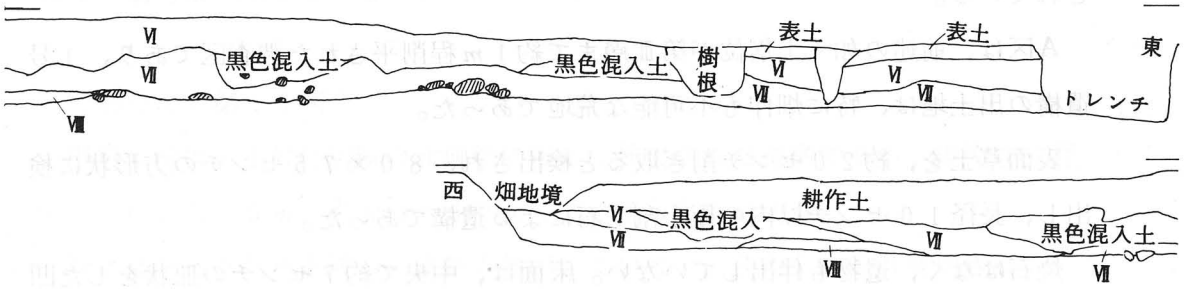
元来この地方の農耕は、畑地内に石が発見されると、耕作の不都合上・塚状に集石するか、地中深くに埋め込む等の処置が成されてきた。石の不均等・伴出遺物からして、後者の埋納石とも推定され、遺物も当時に流入したと考察される。１号・２号の集石遺構とも、記録として保存し、今後の調査研究を期待したい。

第5図　土層断面図

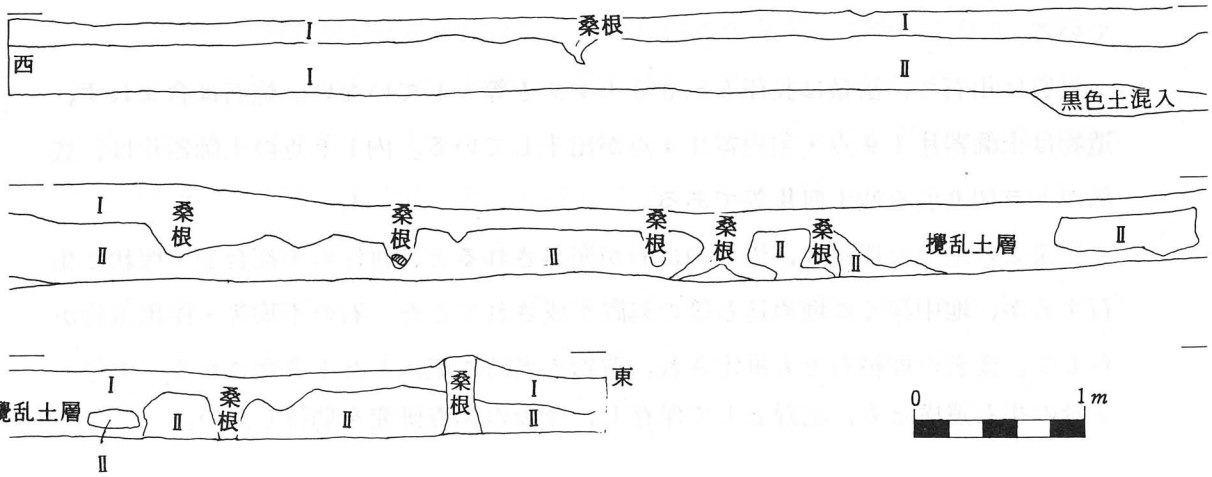
1.　A区縦断面図



2.　A区横断面図

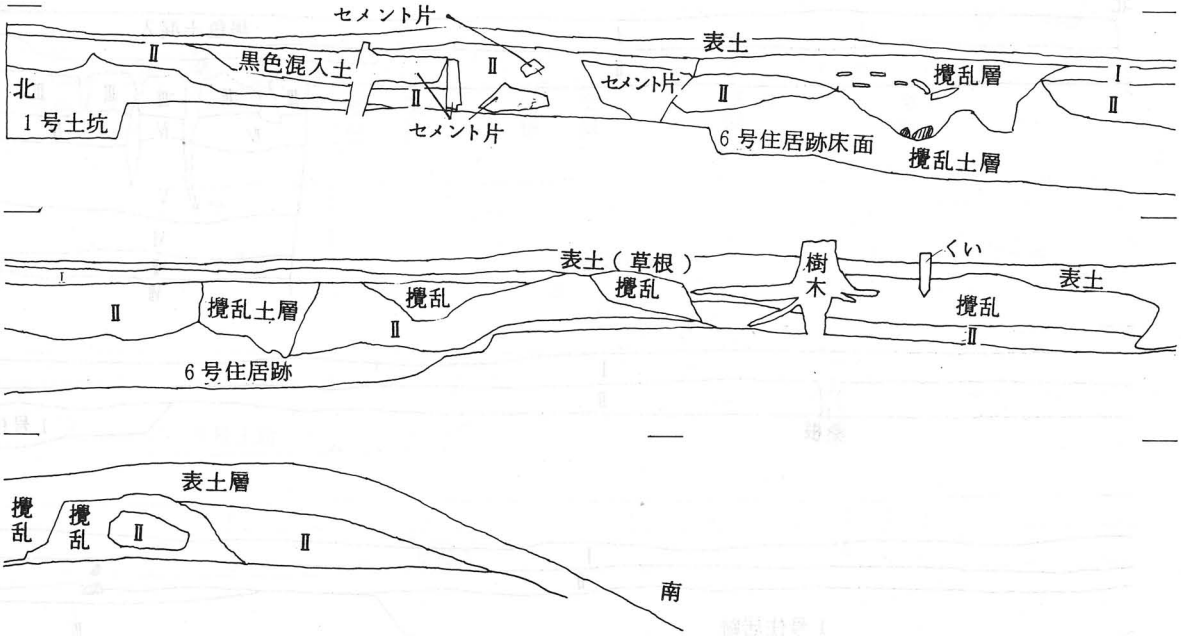


3.　D・E区境・横断面図

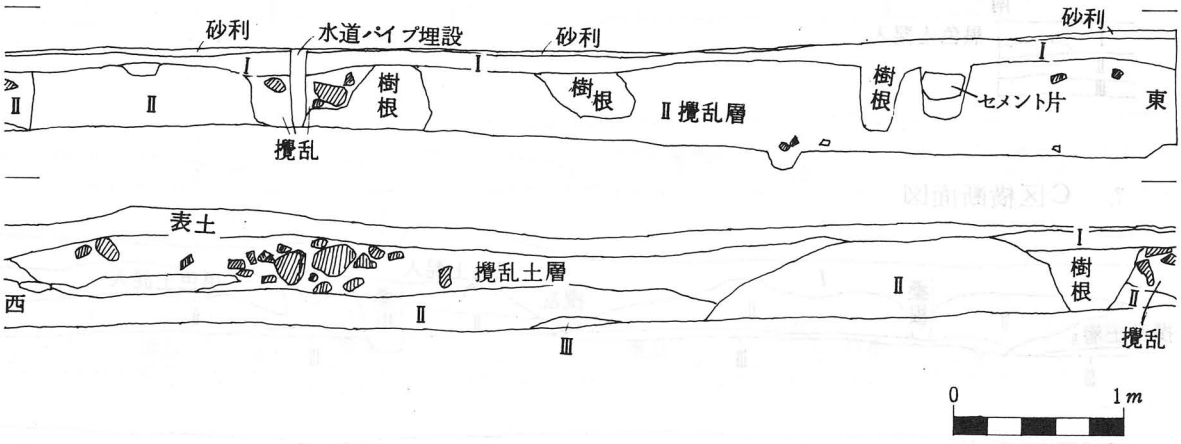


土層断面図 2

4. B区縦断面図

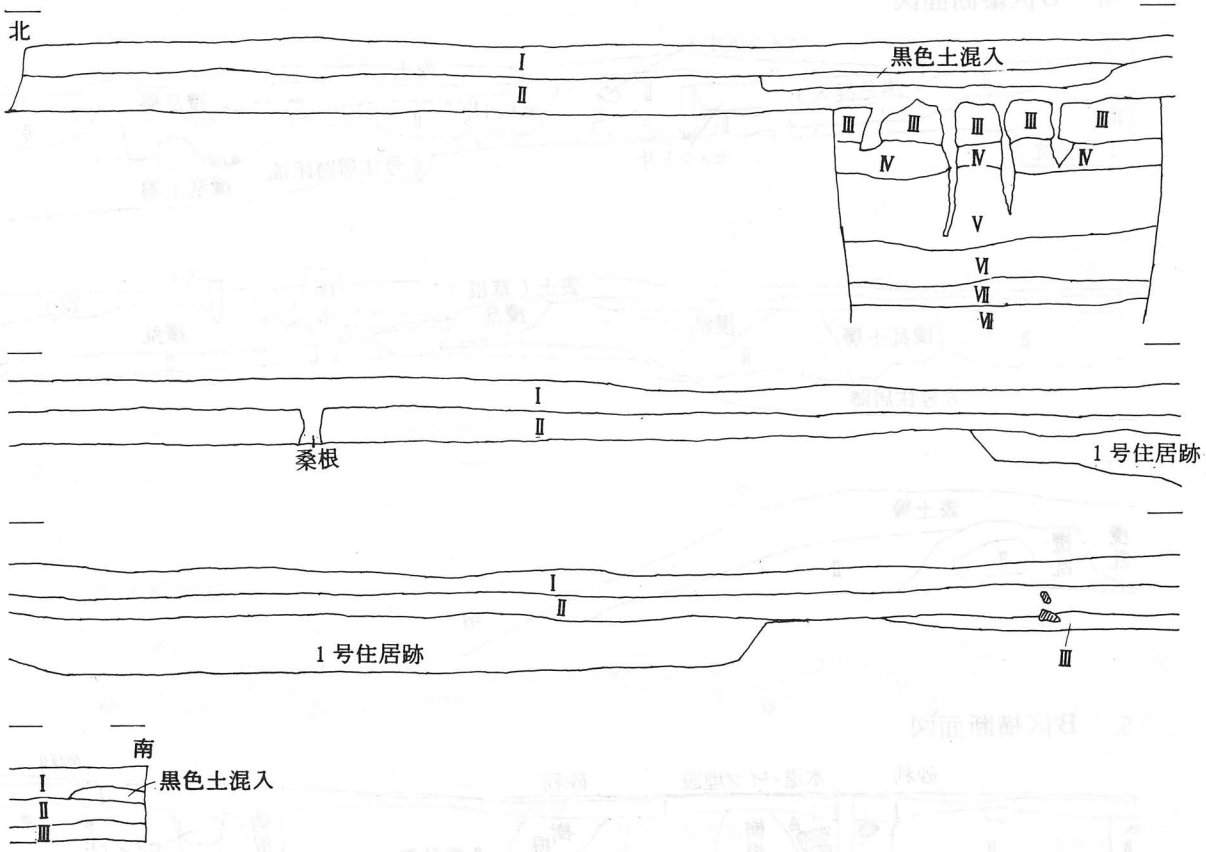


5. B区横断面図

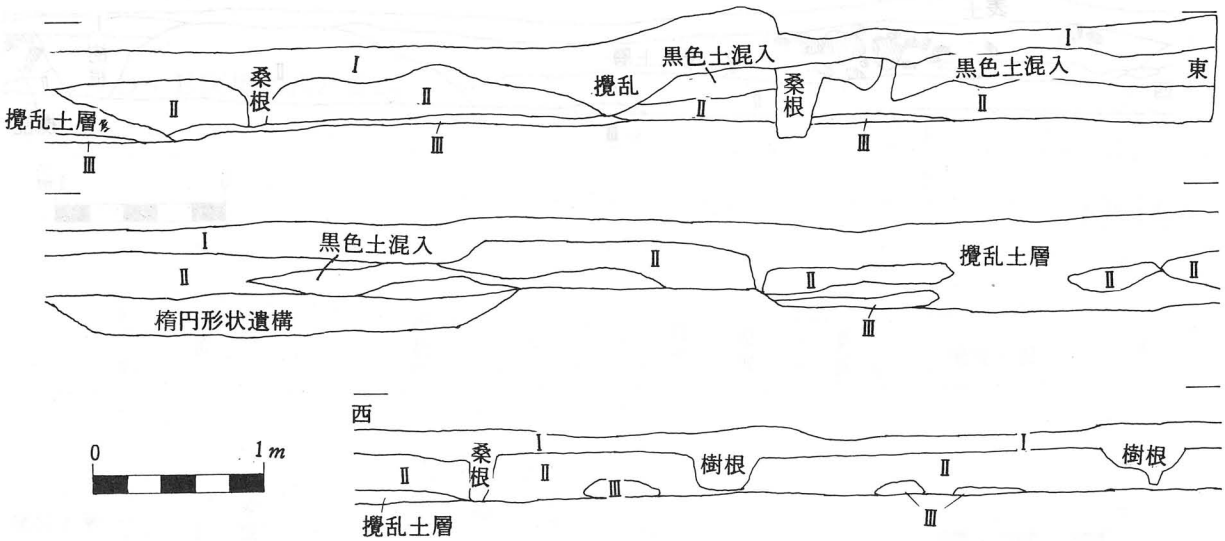


土層断面図 3.

6. C区縦断面図

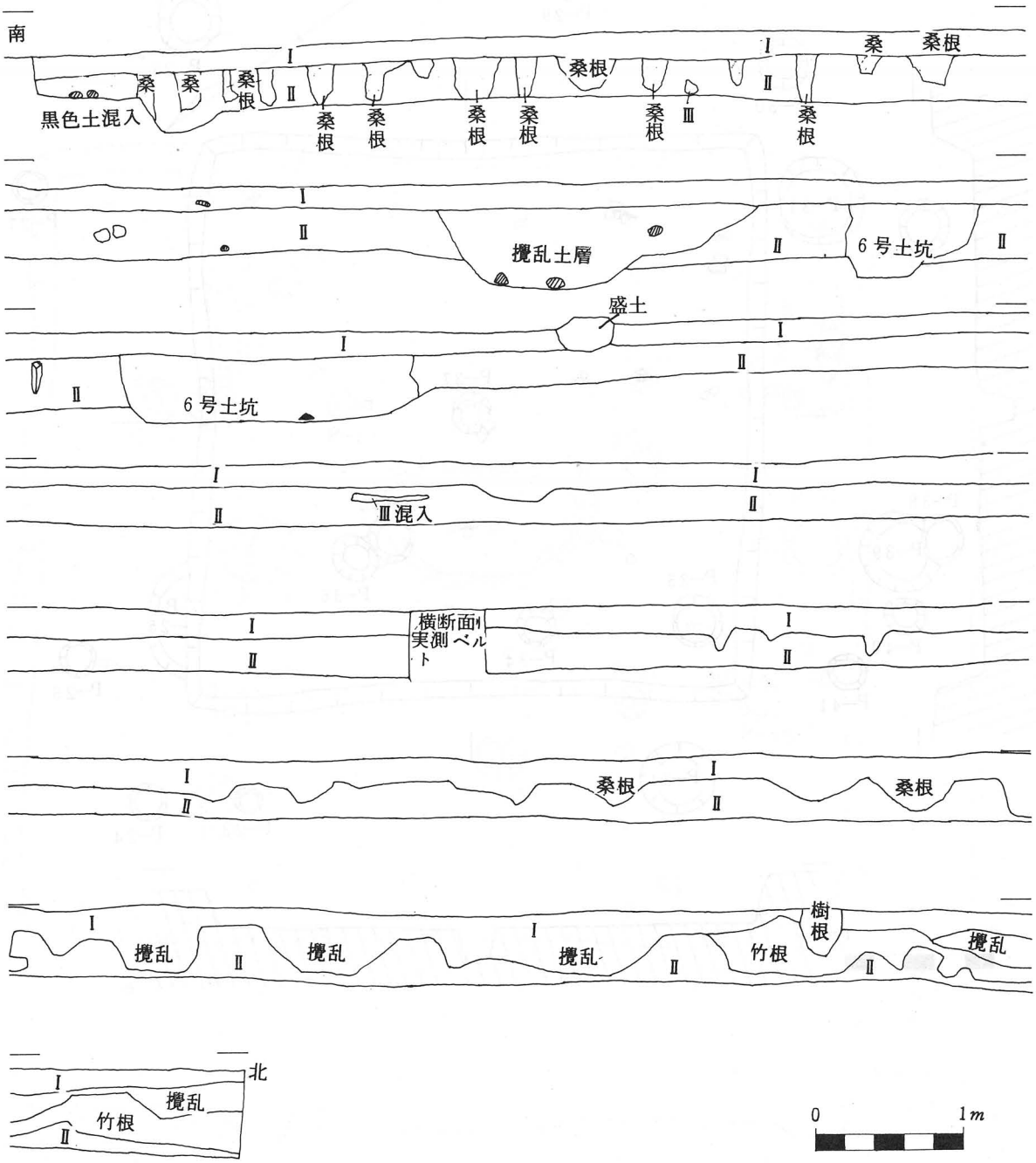


7. C区横断面図

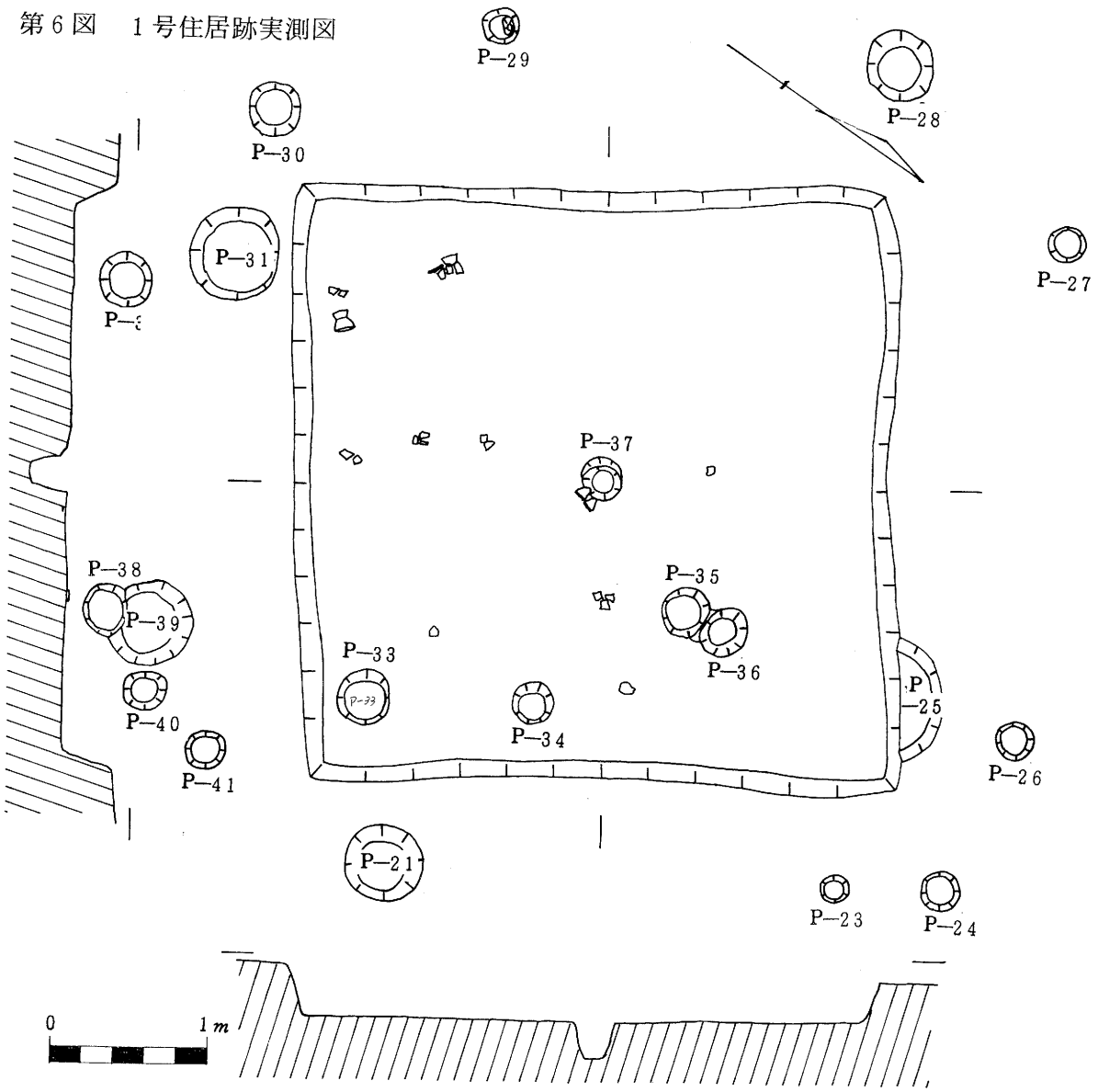


土層断面図 4

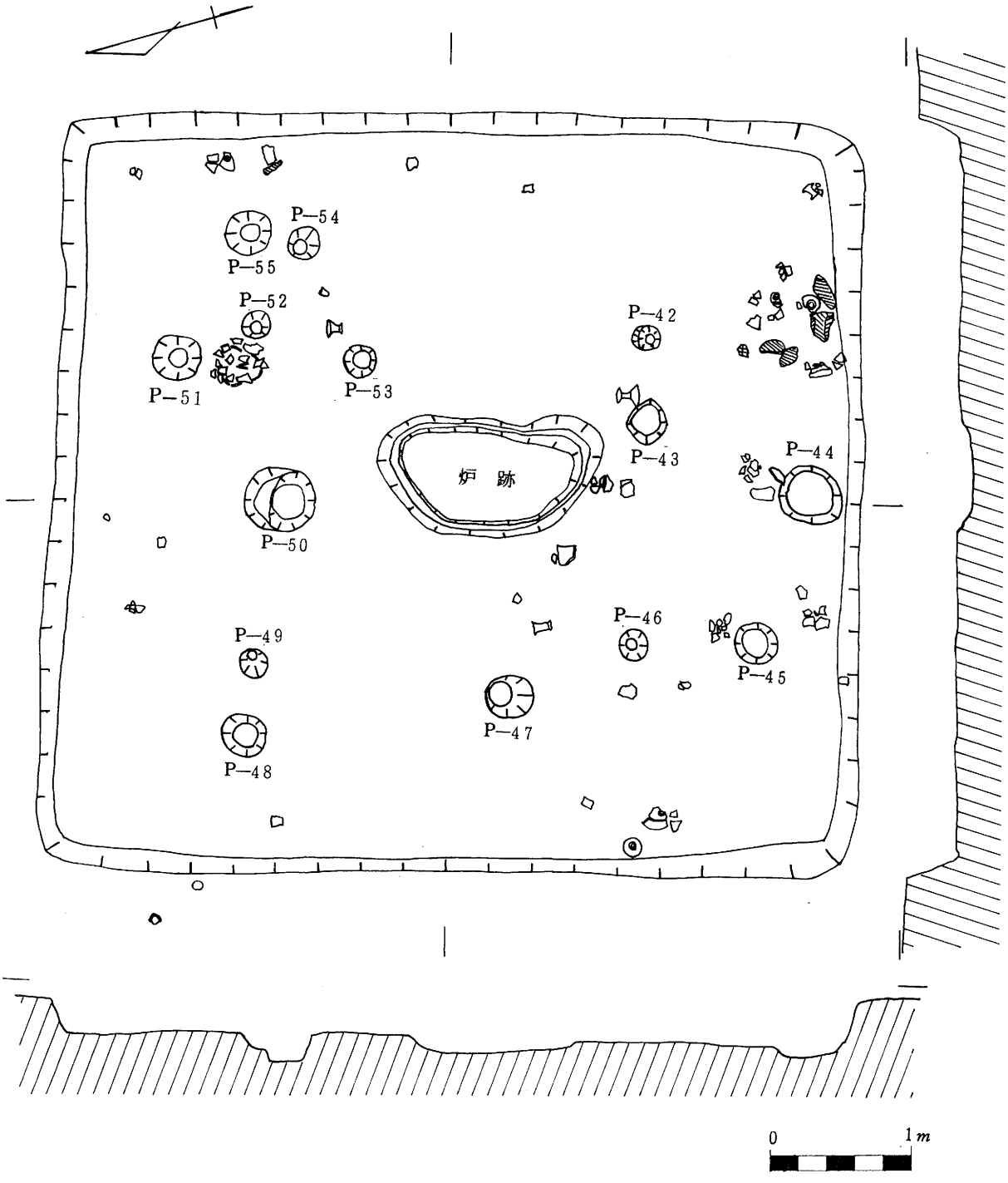
8. D・E 区縦断面図 4



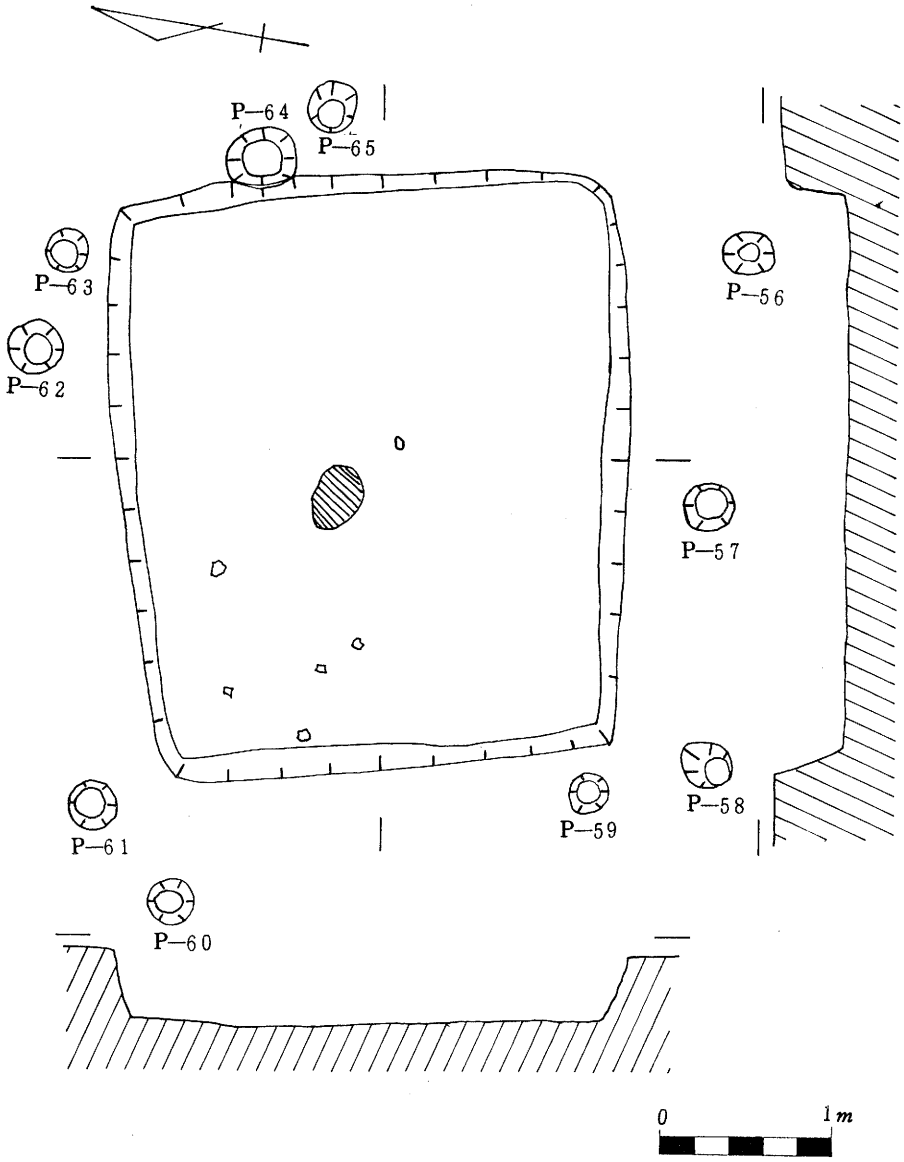
第6図　1号住居跡実測図



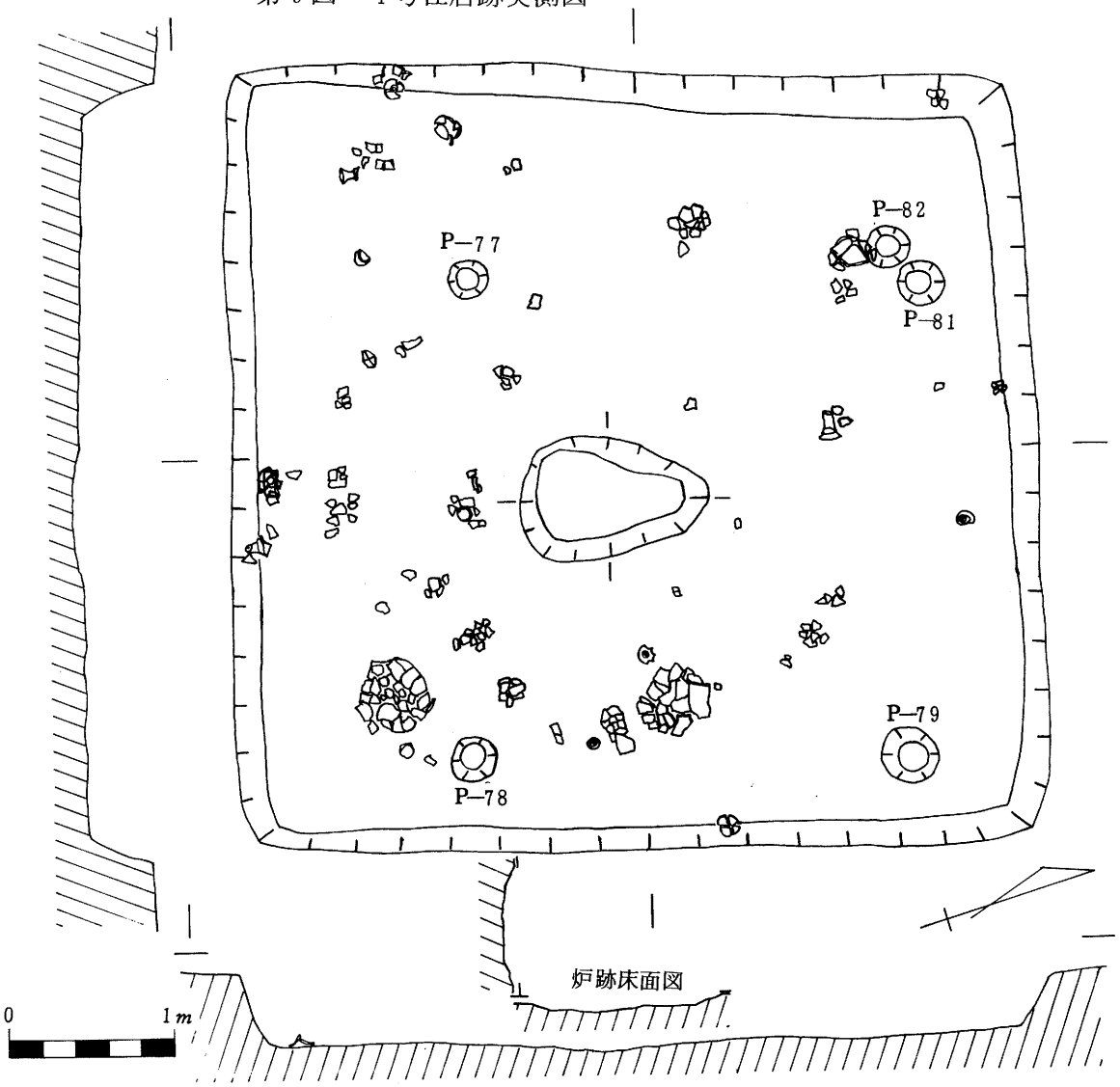
第7図　2号住居跡実測図



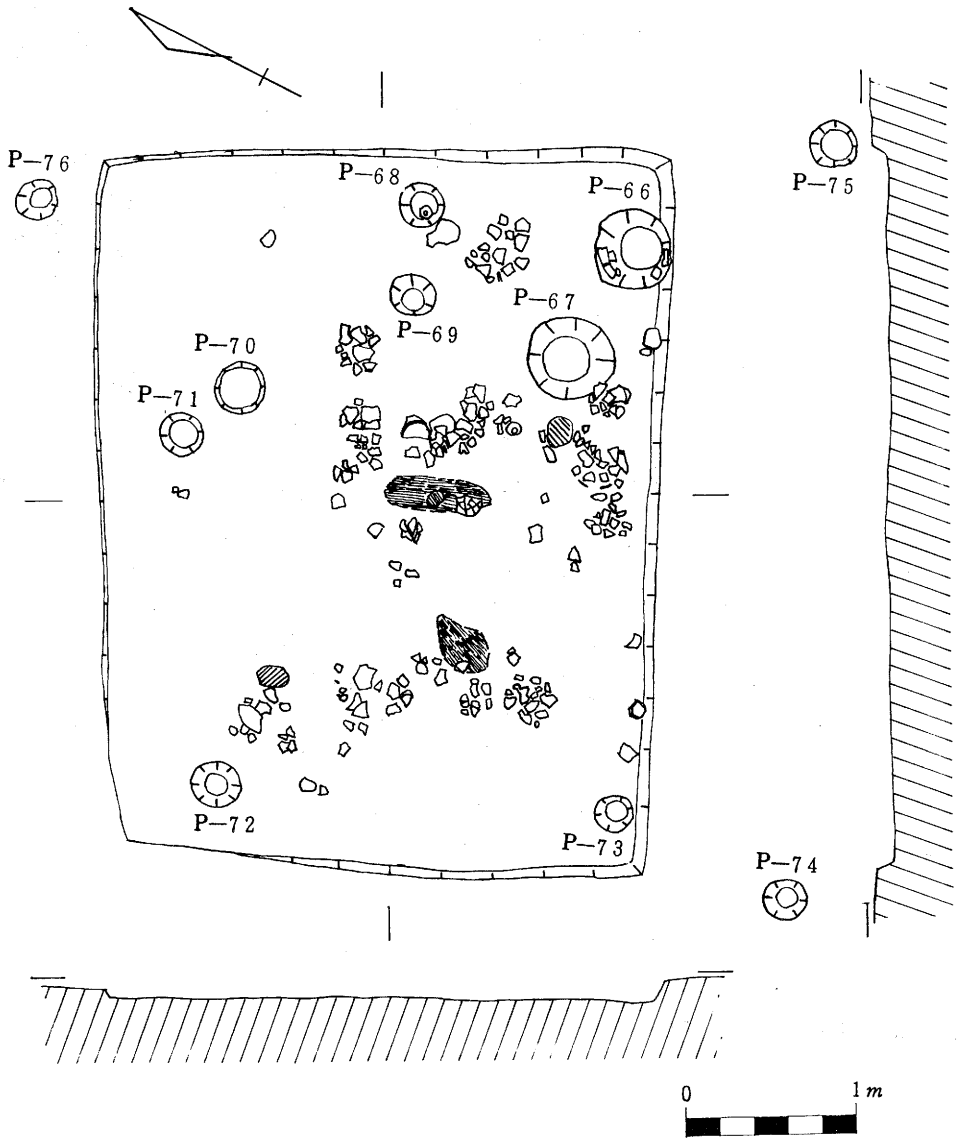
第８図　３号住居跡実測図



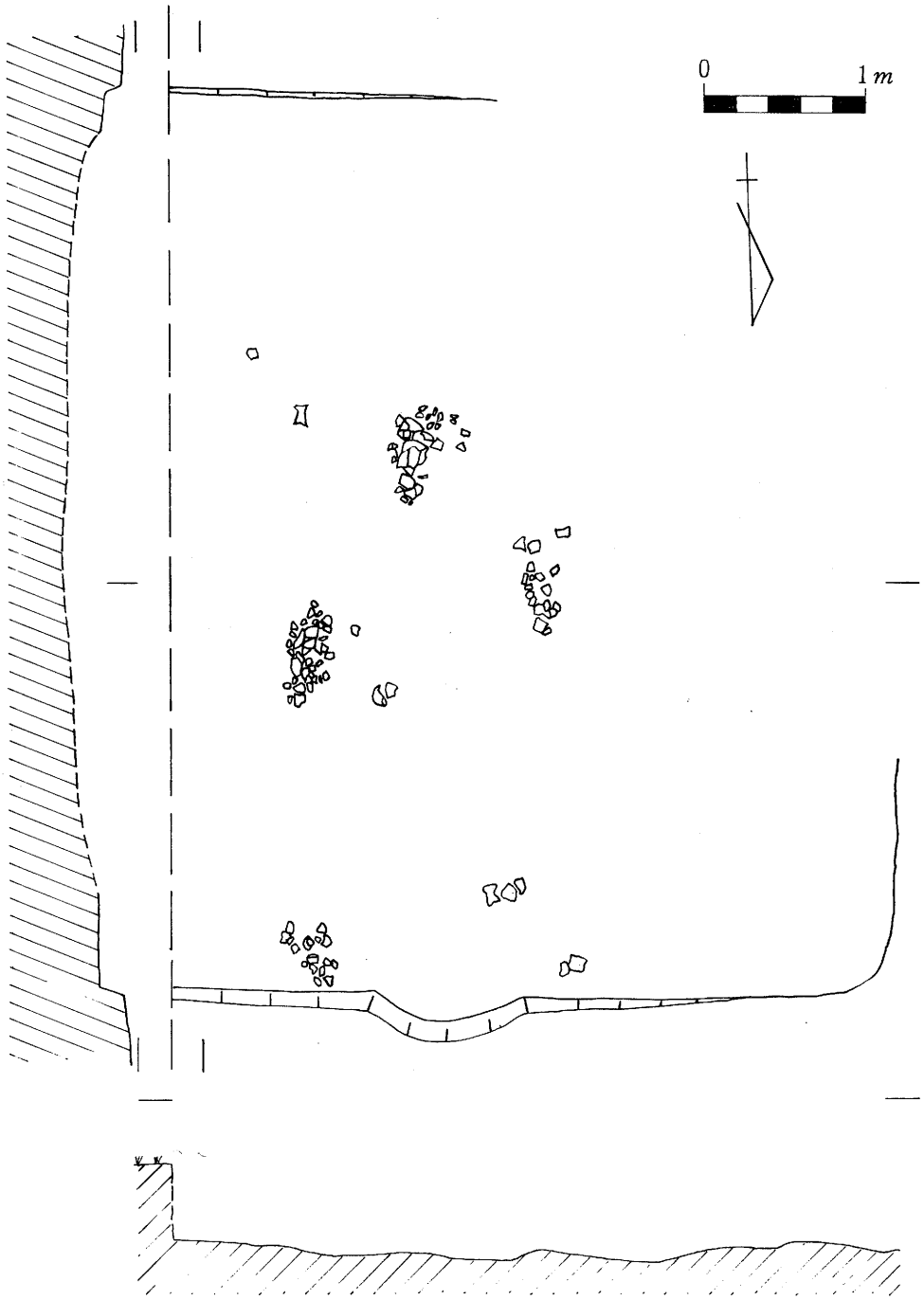
第９図　４号住居跡実測図



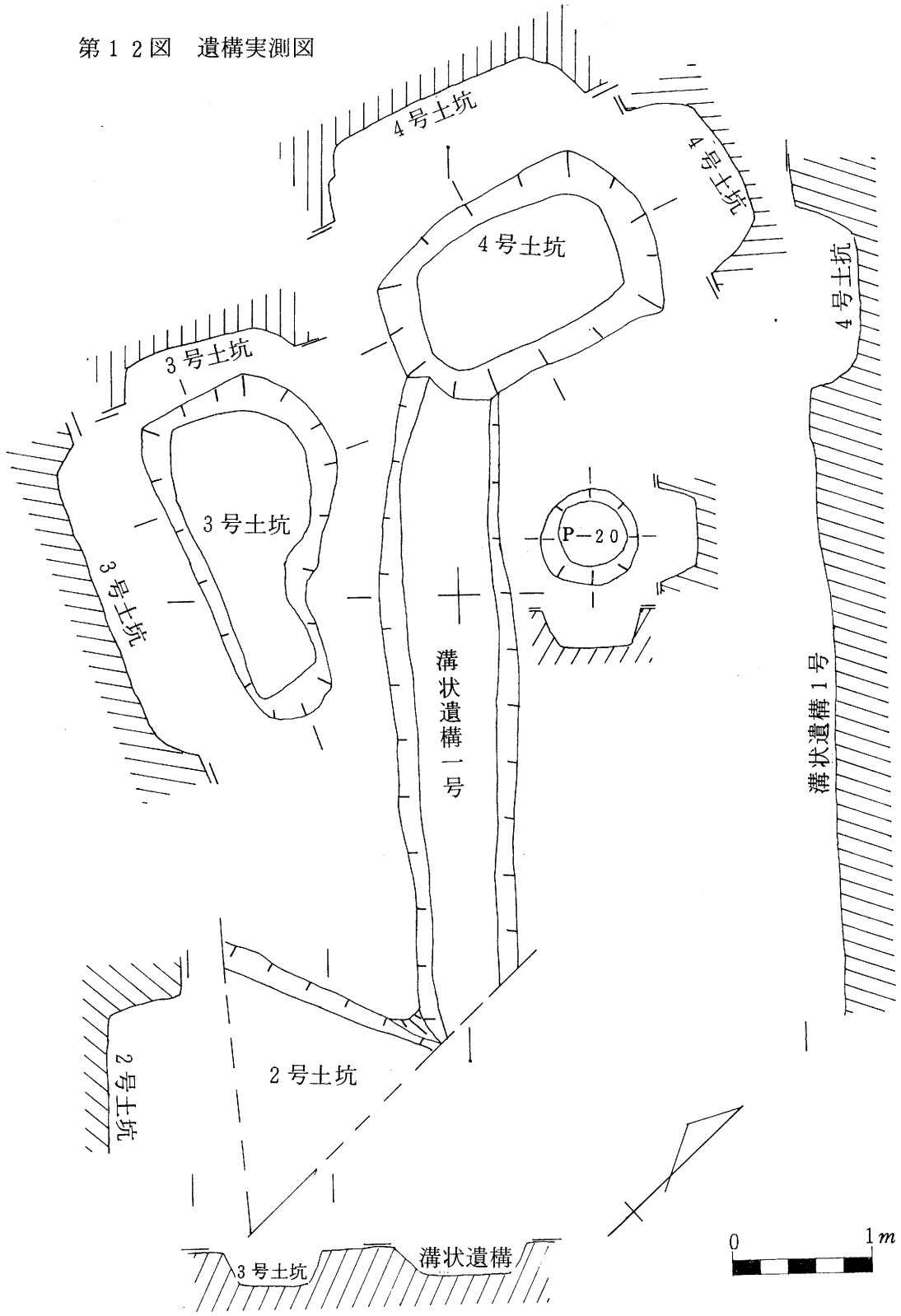
第１０図　５号住居跡実測図

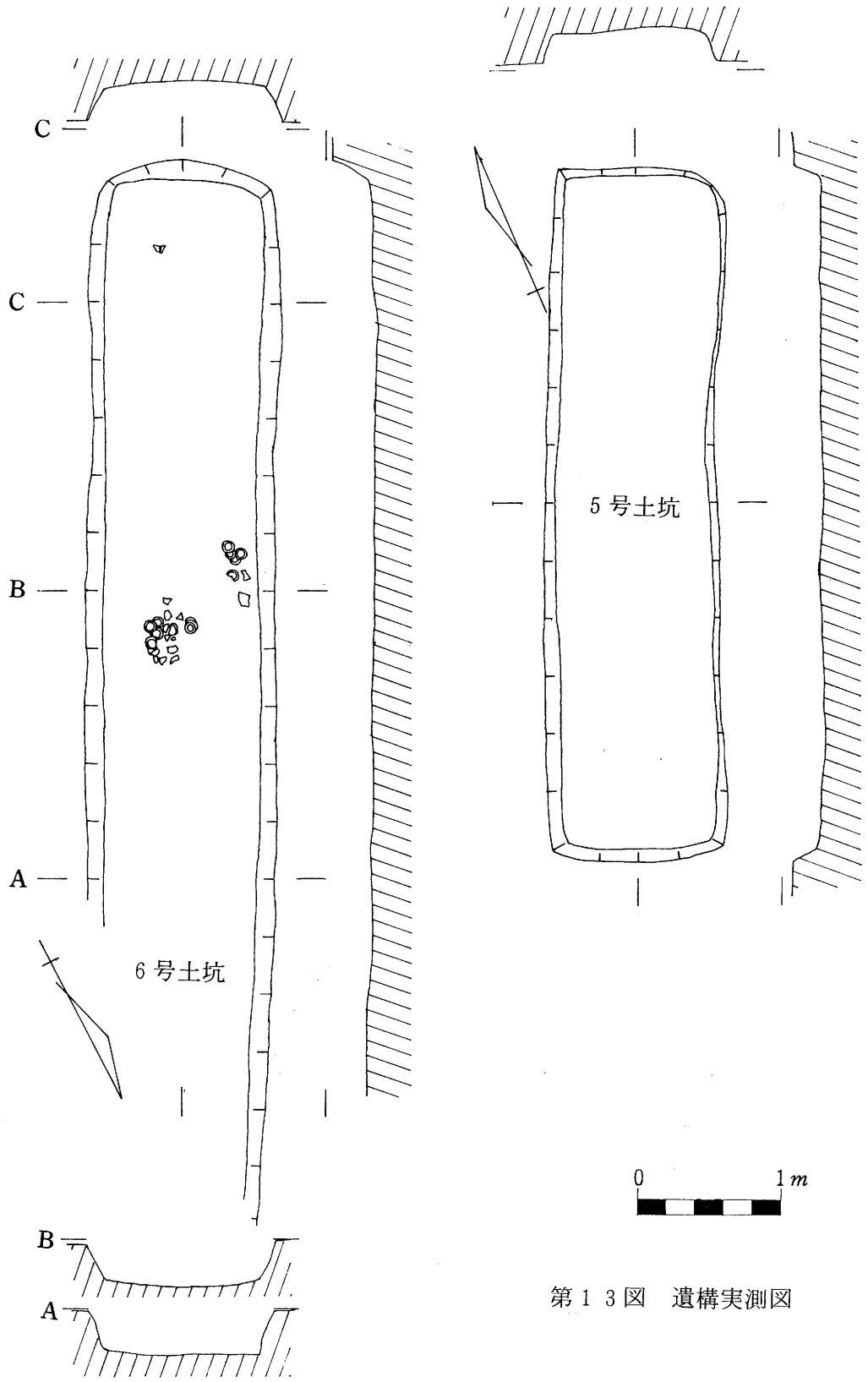


第１１図　６号住居跡（推定）実測図



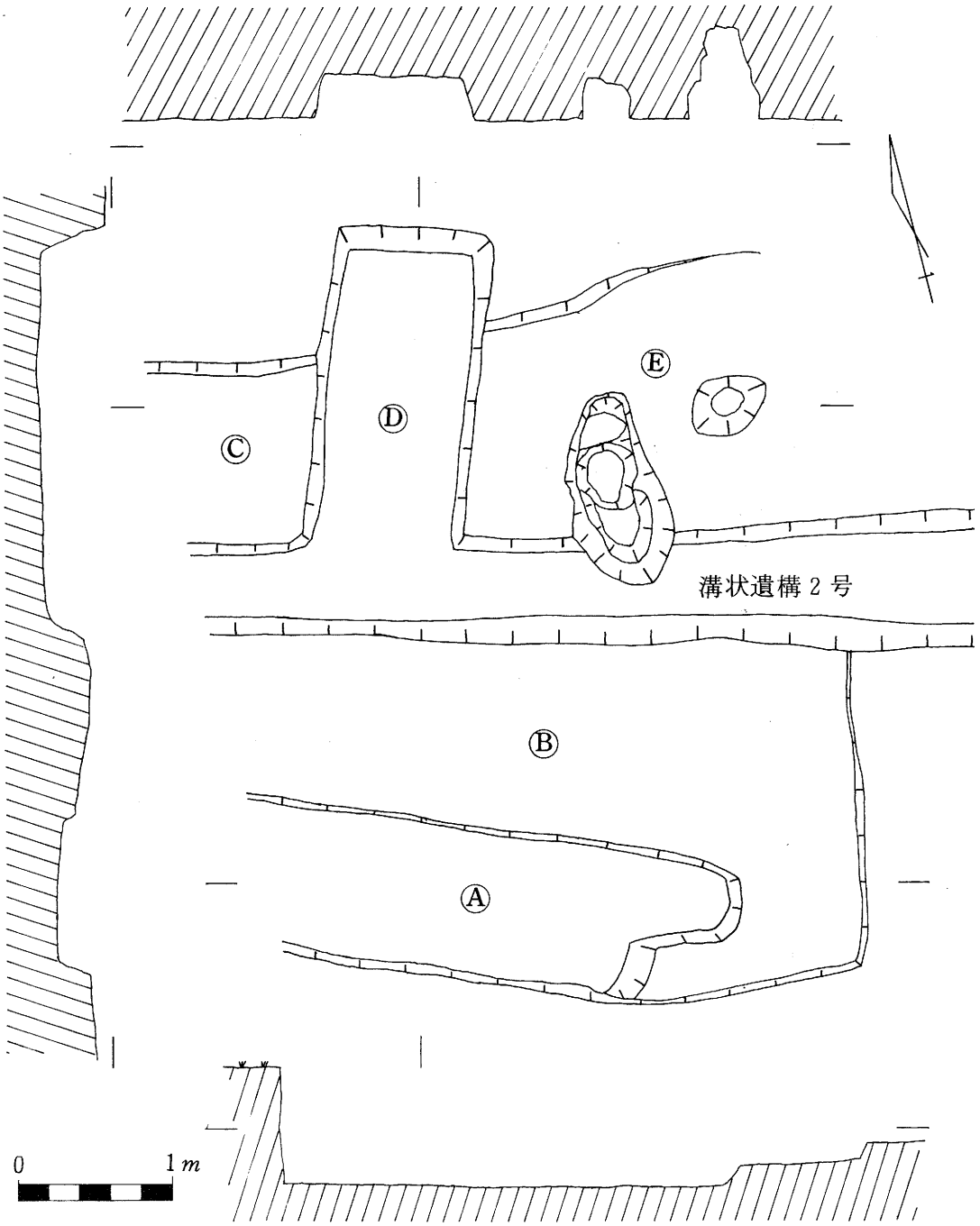
第１２図　遺構実測図


4号土坑
4号土坑
4号土坑
4号土坑
3号土坑
3号土坑
3号土坑
P－20
溝状遺構一号
溝状遺構１号
2号土坑
2号土坑
3号土坑
溝状遺構
0
1m



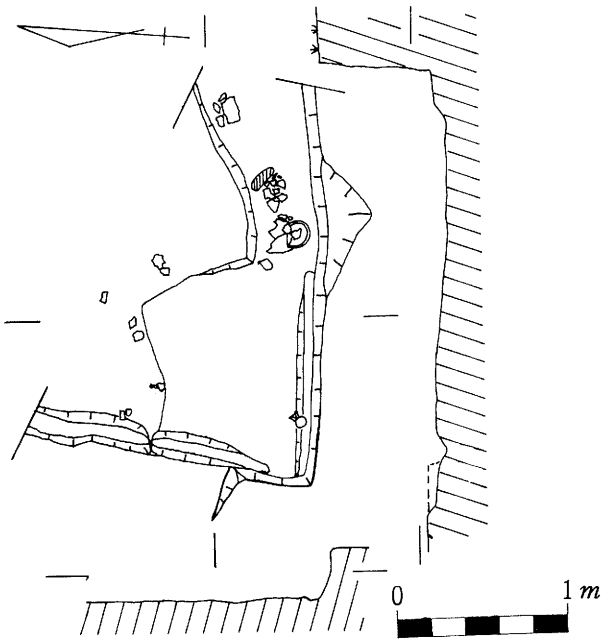
第１３図　遺構実測図

第１４図　遺構実測図3.

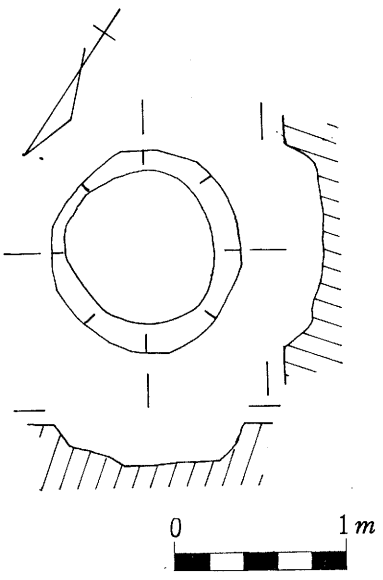


第１５図　遺構実測図４

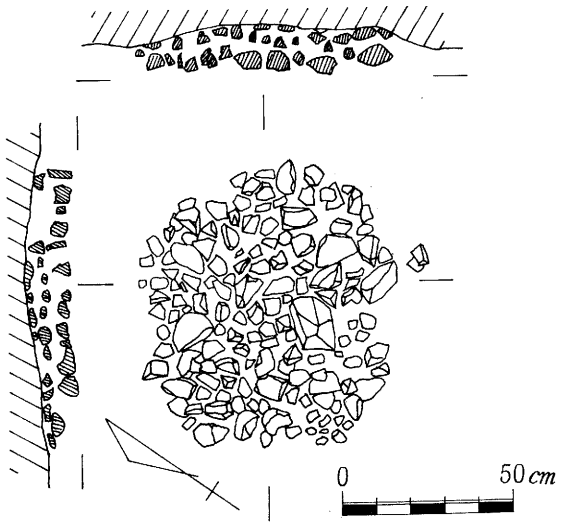
１号土坑



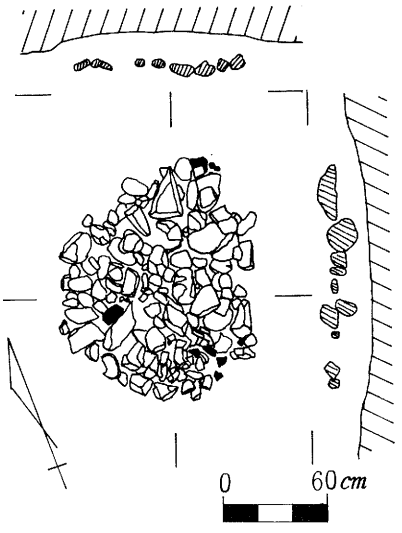
円形土坑



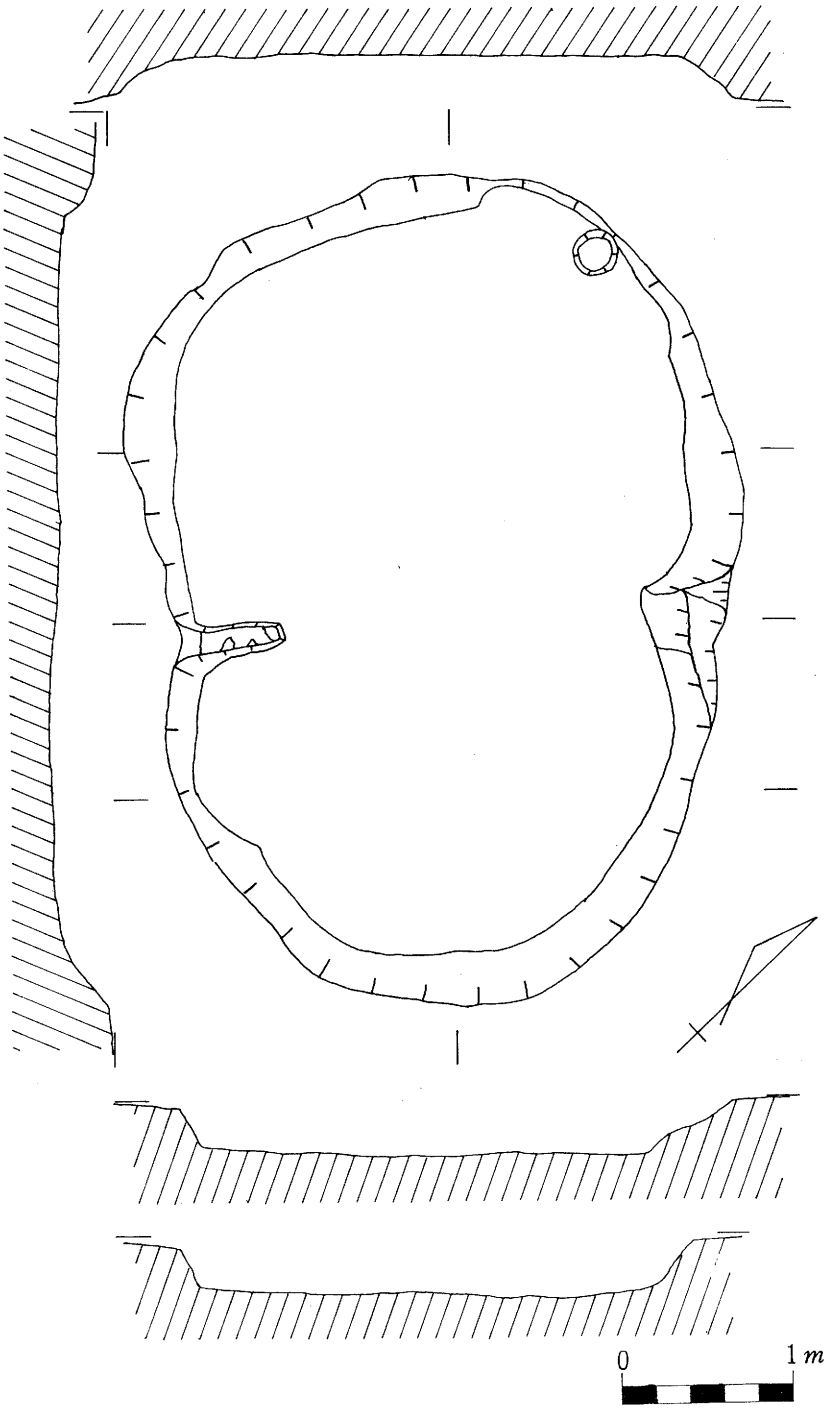
１号集石遺構



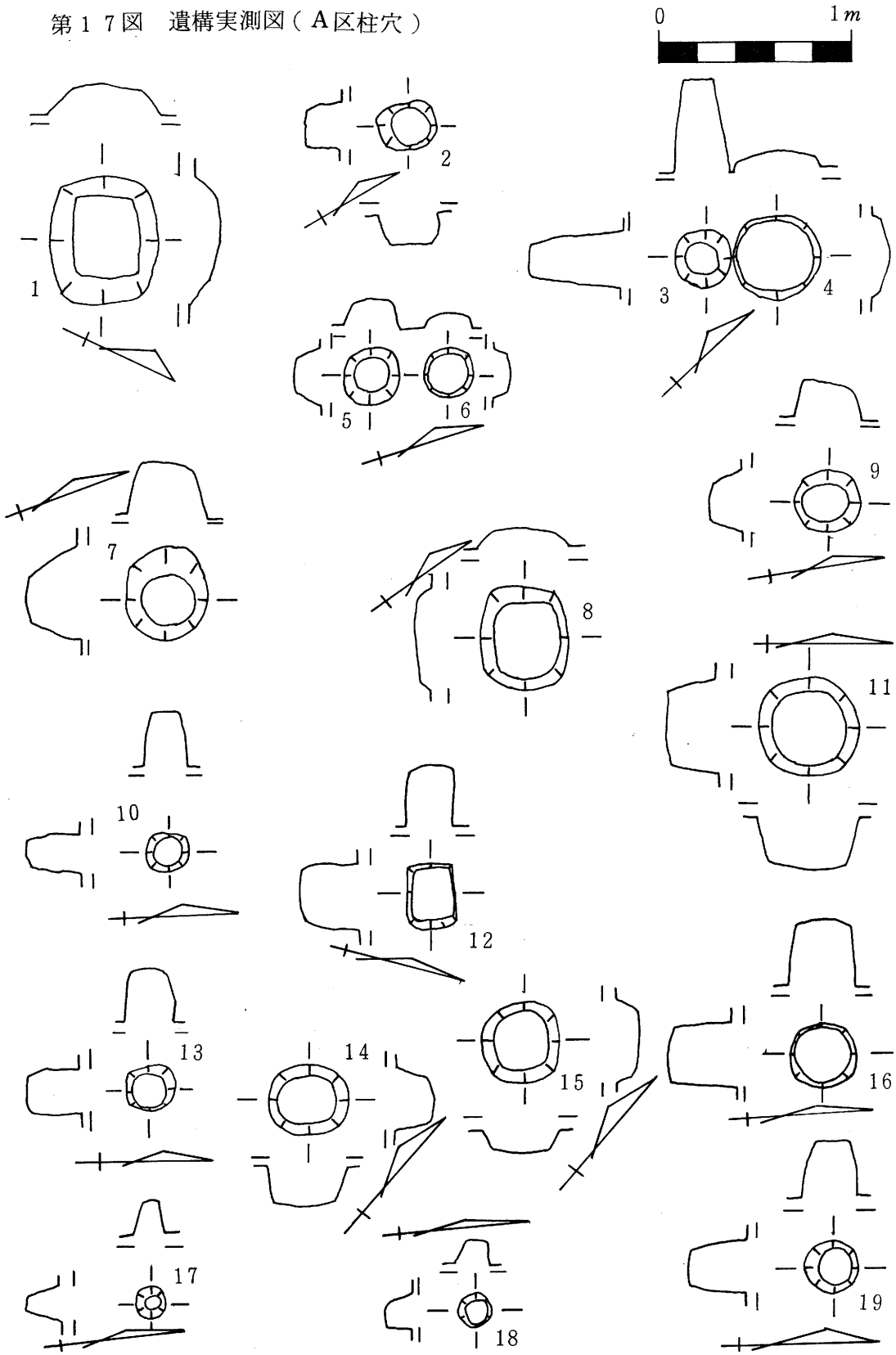
２号集石遺構



第１６図　楕円形状遺構



第１７図　遺構実測図（Ａ区柱穴）



2　遺　　物

出土遺物は、表１に示すとおり調査地全域から、総数4,３９２点出土しているが、土師器主体であり、器種には広口壺・壺・高杯・土錘等で、内４８点の高杯が占める比率は大である。

これらは、大半が小片で出土し、投入・流れ込みのものが多く、しかも完形・完形に近い遺物は極めて少なく、調査地が、諸事情の影響によって相当の攪乱を受けている事を示している。

また、遺構に伴出した遺物の中には、５号住居跡床面から出土した縄文土器片１点があるが、他に古墳時代以前の遺物は出土していない。

出土遺物は土師器が主体で4.163点、土錘６点、須恵器片１０３点、陶磁器片１１８点、他に鉄片３点、瓦片４点が加わっている。

現在も、出土遺物は整理の途中であり、詳細な報告は今後の機会に譲るとし、本文では、抽出して分類したものである。

⑴　縄文土器（第１８図１）

図番号１は、本調査に於ける唯一の縄文土器片で、５号住居跡内から出土した。遺跡の性格からして床面から検出されたことは、上層が攪乱層である事から流れ込みの遺物と考察される。

残片は、９×５センチの深鉢胴部片と推察されるが、表面は、山形の文様をした押型文で、縄文早期の遺物である。

内面は、ナデ調整・胎土は良好で雲母を含み、１～２ミリの粒子。色調は、外面がにぶい橙色、内面が明褐色をなし焼成は良好である。

器種については、一応深鉢と記しているが、小片であることと、わずか１点の出土という事からして決しがたい、

⑵　土　　錘（第１８図１）

図番号２～７の６点は、１号住居跡１点、２号住居跡３点、D区・T７に２点が出土した。法量等については表２の土錘計測表のとおりである。

時代区分については、本調査によって出土した主体となる土師器と同一時代の遺物と考察される。

(3) 土師器（第１８図１～９）

図番号８～５５の４８点は高杯で、法量等は表３土師器計測表（高杯）によるが、大半の住居跡から出土している。完形は８・１０、完形に近い遺物は９・１１・１２と極めて少ない。

８・９は、杯の底部近くで小さく屈曲して立ち上がり、わずかに内湾しながら大きく開く。脚柱部は、裾部にかけてやや内湾気味に開くが、脚裾部と端部の境は曲折して陵をなし、外反しながら大きく開いた端部となる。

なお、脚柱部にはナデ調整後のヘラによるタテの調整痕が残される。頸部の径は８が３センチ、９が3.1センチである。他に類似する遺物は２６の片が想定される。

１０は、器高１6.6センチ、口径２２.３センチ、頸部径5.3センチ、脚端部径１５.３センチと、高杯４８点中最大のものである。

底部近くの胴には、鮮明な曲折する陵が認められ、ここからほぼ直線に立ち上がり、口縁近くでやや外反する。

頸部からの脚柱部は大きく開いて下向し、さらに曲折の陵を成して外反気味に大きく開く。

１１は、１０と同様杯の胴部に鮮明な曲折した陵が認められ、外反して立ち上がり大きく開く。法量は表３のとおり。

脚部は、頸部からほぼ等法量で下向し、曲折する陵を成してさらに外反し端部にいたる。

１３は、脚端部及び口縁部を欠いているが、本調査に於ける遺物では他に類のない高杯である。杯は、底部が段皿状になって横に開き、急角度に屈曲して立ち上がる。胴部には、丸味を帯びた３条の凹みがめぐらされている。

口縁部近くの立ち上がりは欠いている為不明であるが、脚部は、頸部径が4.5センチで、開き気味に下向し、端部境の屈曲をなす部の径は7.4センチと大差があり、さらに脚端部は大きく開くと想定されるが、欠損の為詳らかではない。

２０は、脚部を欠いだ高杯で、杯の胴部は鮮明に屈曲し外反して立ち上がり大きく開き、未発達な鋤先口縁を呈する。口縁径１７.９センチ、類似する遺物に２２・２３・２５が想定される。

３５は、杯部と脚端部を欠くが、頸部に山型の凹み２条がめぐらされ、脚柱は内湾気味に下向して端部近くが屈曲し、大きく開いて端部にいたる。端部は欠いている。

３６は、杯と脚端部を欠くが、脚柱部が低く形成されており、裾部にかけてはやや直線に下向して大きく開く。さらに裾部は、外反気味で端部に至る。

３７は、杯と脚端部を欠くが、頸部から裾部にかけてはやや外反気味で、頸部径2.７センチ、裾曲部径６センチと径に大差がある。さらに裾部は、屈曲して大きく開く。

全体的な高杯の器面調整は、表３に示しているが風化の為内外面とも不鮮明な遺物もあるが、大半はナデ調整後のヘラ調整が認められ、脚柱部等にヘラ痕を残す遺物も少なくはない。

本稿では、土師器の高杯を主に述べてきたが、土師器としては高杯のほか、広口壺・壺・坩・鉢等が多量に出土している。以降、これらの遺物図番号５６～１１２までの土師器について、表４に示してはいるが順次抽出し述べることにする。

５６は、２号住居跡伴出の遺物で、底部と胴部の一部を欠いた広口壺で、復元口径は１８.７センチ、器高２９.５センチ、胴部最大径は２１.８センチを計測する。

体部は、やゝ楕円形状に内湾して立ち上がり、長目の口縁部をもつ細丸底の広口壺で、口縁部は中程で肥厚し、外反気味に開いて立ち上がる。

口縁端部は、細くなりやや尖頭型にまとめられている。体部を含む外面は叩き目によって調整され、内面はナデている。内外面とも炭が付着するが焼成は良好である。

５７は、住居跡とも推定される１号土坑から出土し、器高１０.５センチ、口径8.4センチ、最大胴部径７.９センチ、頸部径5.８センチの長くのびた口縁部をもつ平底の坩である。

口縁部は、ほぼ直線に立ち上って開き、口縁近くはやや内湾気味となる。調整は、

回転によるナデ痕が口縁部に残り、胴部はナデ・下半にはナデの後のヘラ痕が認められる。内面は、上半が回転によるナデで他はナデている。

５８は、楕円形の胴部に長くのびる口縁部が存すると思われるが、口縁部は欠けている。器高は、口縁部が欠けるが現存高で７センチ、口径も現存で7.2センチ、頸部径６センチ、最大胴部径8.6センチを計測する。胴部の広い丸底の坩である。

口縁部は、やや内湾気味に立ち上がり、開いているが、口縁は欠損する為端部が詳らかではない。

外面は、胴部下半にハケ目調整痕を残し、上半はナデている。口縁部は内外面とも回転によるナデで、胴部下半の内面はナデている。

６０は、４号住居跡に伴出した広口壺で、わずかに外反した単純な口縁部をもち、復元器高２７センチ、口径２1.2センチ、頸部径１8.6センチを計測する。

器面調整は、風化のため鮮明ではないが内外面ともナデで、底部は細丸底と推定される。胴部は、ゆるく内湾して立ち上がり、頸部からの立ち上がりはわずかに外反し、口縁近くで陵をもち、内行して端部にいたり丸くおさめられている。

胎土は細かく、１～３ミリの砂粒を多く含み、全体に肉薄で仕上げは荒い感触を与える。焼成はやや良好であるが、外面下半には炭が付着している。

６１は、２号住居跡に伴出した浅鉢で、器高8.6センチ、口径１4.2センチを計測する。底部はヘラで切った径5.1センチの平底である。

容姿は、底部が1.3センチ高の等一した立ち上がりを見せ、その後に大きく開く。胴部は内湾気味の立ち上がりをみせ、胎土は少し荒く長砂粒を含む２～４ミリの粒子を多く含んでいる。

器面調整は、ハケ目調整で内面は横にナデ、外面の上半はヨコ、下半はタテ・ヨコにナデ、下部にはタテのヘラ痕を残している。仕上げは必ずしも良好ではないが、焼成は良好で美しさも感ずる。

６７は、４号住居跡伴出の、やや長目の口縁部を持つ丸底の壺である。器高１５センチ、口径9.5センチ、胴部最大径１3.4センチ、頸部径は8.3センチを計測する。

胴部は、全体的な丸型で肉薄に仕上げられ、口縁部は外反して立ち上がり、再度

内湾する。口縁は、端部が丸くおさめられている。

器面調整は風化の為鮮明でないが、外面は胴部上半をハケでヨコに調整し、下半はナデであり、内面も外面同様ナデている。

胴の約三分の一、さらに口縁部から底部まで炭が付着し、内面にも一部炭が付着する。胎土は細かく、1～4ミリの砂粒を含み仕上げ・焼成は良好である。

92～97の6点は高台付土器の片で、いづれも底部だけ他は欠損している。器種は不明である。

92は、高台が外反して下向し、高台際の径5センチ、座付径8.4センチを計測し、八の字型に開いている。

内面の底部は、尖頭形の落ち込みをみせ、肉薄の底部となっている。33も同様である。94も92と同様に、高台際から座付にかけて八の字に開いている。

図面では鮮明でないが、特に92は、高台際から約1センチ立ち上がった位置に、鮮明な突起の陵が認められ、高台と胴部とを区分する形容を示している。

以上、6点の高台付土器の底部片は、器面調整もロクロ使用による痕跡が鮮明であり、1～3ミリ、一部に4ミリの粒子を含んだ胎土で、仕上げも良好であり、97を省いてはすべて焼成も良好である。

98は、A区に検出した1号集石遺構の南、約50センチの位置に近接して1点だけ、他と離れて出土した浅鉢である。焼成時期は、前項高台付土器と同一時代と推定される。

底部は平底で、器高6.9センチ、口径16.3センチ、底面径11.5センチを計測する。胴部は、内湾気味に立ち上がり、口縁は丸くおさめられている。

器面調整は、内外面ともナデているが風化の為鮮明ではない。胎土は荒く、1～2ミリの砂粒をわずかに含み、仕上げ焼成とも良好とはいえない。

99～112の14点は、土坑6号から出土した小皿の土器である。法量等は表4土師器計測表（2）に示している。

土坑6号については前述しているが、土師器97点が出土し、内・完形14点を抽出した。この14点は、いづれも器高が浅く、底面底部にはすべてヘラ切り痕が鮮明に残されている。

これらの遺物は、他片とともに律令時代の遺物であり、今後とも注目しなければならない。

(4) 須恵器（第１９図）

須恵器は、表１に示すとおり大半の遺構等から、１０３点と少量ではあるが出土した。すべてが片で法量計測のできる物は皆無である。

器種は、甕・壺・蓋・杯等で、大半が格子目の紋様をした叩き文で、詳細には第１９図・表５に示している。

編年については、本調査地出土の土師器の編年から大きく後退するが、第１９図表５には抽出して、図番号１１３～１２８の１６点を登載した。

図番号１１３～１２０の９点は、甕の胴部片で表面が叩き目の格子目文、内面は１１５・１１６・１２０・１２１が青海波文である。

１１８は、ヘラ先による半円の刻目で仕上げ、他はヘラ調整。１２２は、壺の胴部片で無文、器面調整は外面がヨコ、内面は回転させたハケメ調整痕が残される。

１２３は、蓋の中心部から外縁にかけて三角形状に残す破片で、外縁高は0.6センチ、表面は、外縁から0.5センチ内行して後外反し0.8センチ高くなる。

内面も表面と同行し、外縁から0.3センチ内行して約1.5センチ立ち上がる。この位置から外面に沿って内行する。中心部の厚は0.6センチと肉厚となる。

１２４は、高台付の杯底部片。１２５は壺の胴部片で、一部に頸部が残される。外面は無文で、ヘラ調整痕の陵３条が認められる。釉が施こされている。内面はヘラ調整痕の突起した陵３条程が認められる。

１２６は、壺の底部と胴部の一部を残す片で、表面は無文・ナデ調整、内面はヘラ痕数条が横に陵をなして残される。

１２７は、高台付の盤とも推定される。ロクロ回転による調整痕が内外面ともに残される。１２８も同じである。

(5) 瓦 （第２０図）

瓦の出土については、調査前から律令期の官衙遺構や中近世寺院跡等も検出され

るのではないかと期待した。しかし、これらに関する遺構の検出は確認されなかった。

同時代の遺物として、僅少ではあるが瓦片の出土をみた事は、今後とも同地域には注目し、調査地周辺の探究もすすめなければならないと思う。出土品4点は表6に示している。

瓦は、図番号129～132の4点で、129は焼成のあまい、表裏面とも布目文の平瓦片である。130は、焼成良好で表面は無文、内面は細目の格子目文で棟ののし瓦片である。

131は、表裏面とも無文の棟瓦片で硬目に焼成されている。132は、やや硬目ではあるが、表面が布目・裏面が細目の格子目文で、中央が分厚くのし瓦片と推定される。

(6) 陶磁器（第21～22図）

本調査地は、古代遺跡の埋蔵とともに、中近世寺院跡とも想定されていた。しかし律令期以後の遺物は極く少量で、出土状況も検出された遺構に密着したものでなく、出土層も表土あるいは第Ⅱ層と比較的浅い地層から出土し、遺構への投入・流れ込みのものであった。

青磁は6点出土しているが、いづれも小片で記録できる遺物はなく、図番号133～138を第21図・表7に図示している。17～18世紀以降の遺物と考察される。

白磁は、青磁同様6点の出土であるが、鉢・碗等の小片で、図番号139～142の4点を抽出し、第21図・表8にまとめている。17～18世紀以降の遺物と考察される。

陶器は、全域から33点が出土した。出土地層は表土及び第Ⅱ層と比較的地表面に近い層から出土している。

大半が小片で完形はなく、暗茶褐色をなすものが多い。記録する遺物は少なく図番号143～149の7点を抽出し、第21図・表9に図示している。いづれも18世紀以降の遺物である。

磁器は２６点が出土している。図番号１５０～１５４の５点を抽出し、第２１図表９に図示している。出土地層も他と同様比較的に浅い層位から出土している。18世紀以降の遺物である。

染付は、出土した陶磁器中もっとも多い４１点である。この中から図番号１５５～１６４の１０点を抽出し、第２２図・表１１に図示した。

１８世紀代の肥前染付も加わり、他に図示しない遺物は大半が小片で、模様等も共通している事から図示しなかった。

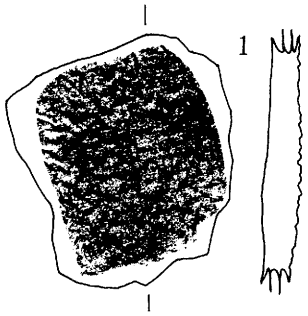
以上、遺構と遺物について簡略に述べてきたが、全調査区から住居跡・土坑・柱穴等が検出され、特に伴出した遺物が土師器主体であり、その中で、信仰儀礼用の高杯が各住居跡に伴って約５０点程も出土した事は、特筆すべき特徴的なものとすべきである。

しかし、中近世遺物が少なく、遺構の確認もなされなかった事は心残りもするが、極少の布目瓦や、関係した土師器（皿）の出土は、何等かの官衙や寺院等・律令時代の遺跡が埋蔵される事を意味し、今後に期待するものが大である。

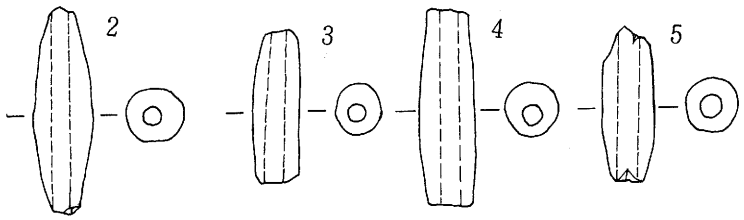
出土遺物の編年については、日高正晴氏による次項のまとめに譲るが、古式土師系統の遺物が主体であった事は、調査地西辺の高台に築造された、西都原古墳群と関係する集落形成の究明からも、今後の資料として提供され貢献するであろう。

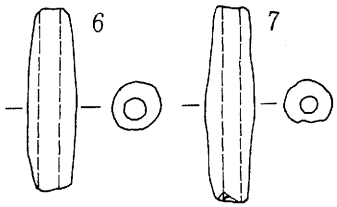
また、調査区域が、横幅約１８ｍの新道路建設地と制約があり、住居跡に伴うムラの構成等、遺跡の全貌を明らかにする事はできなかったが、今後、周辺地域にも及ぶ調査時には、貴重な参考資料となる遺構と遺物であったという事ができる。

第１８図　出土遺物実測図（縄文土器・土錘・土師器）

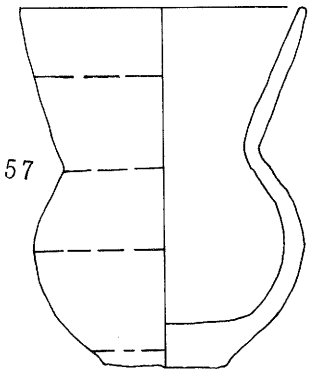


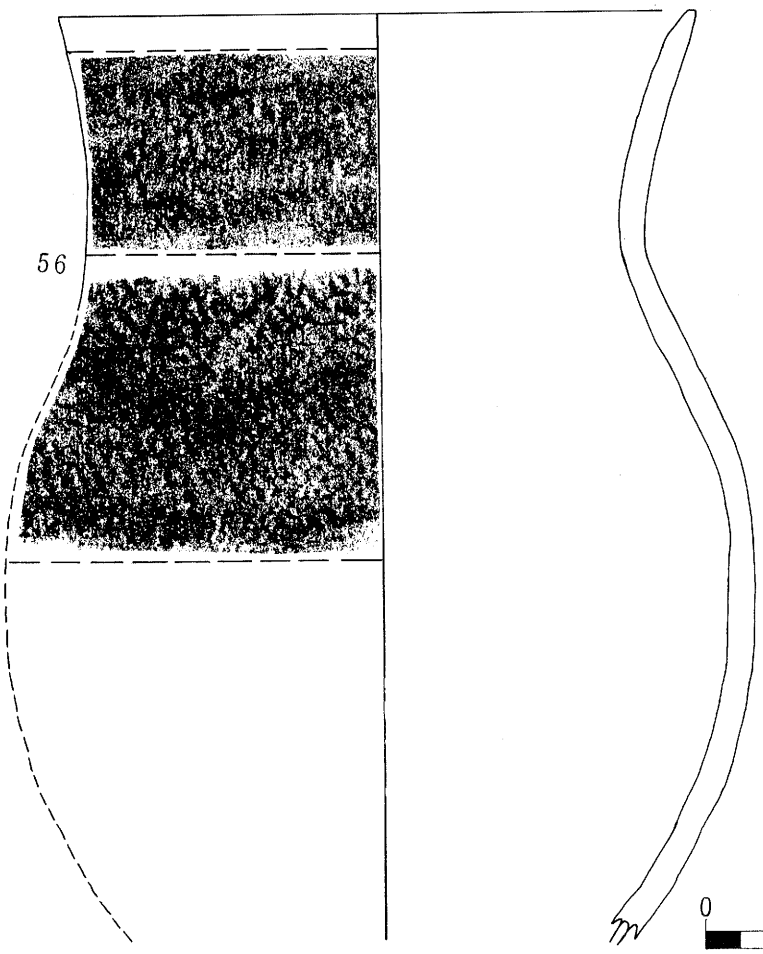
縄文土器

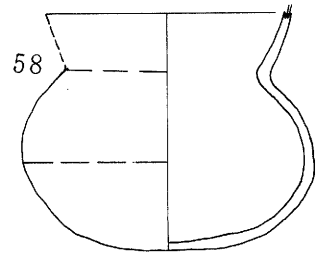


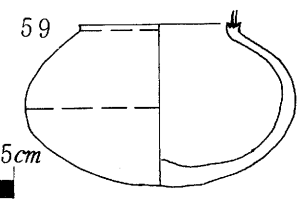


図番号２～７は土錘
図番号８～１１２は土師器

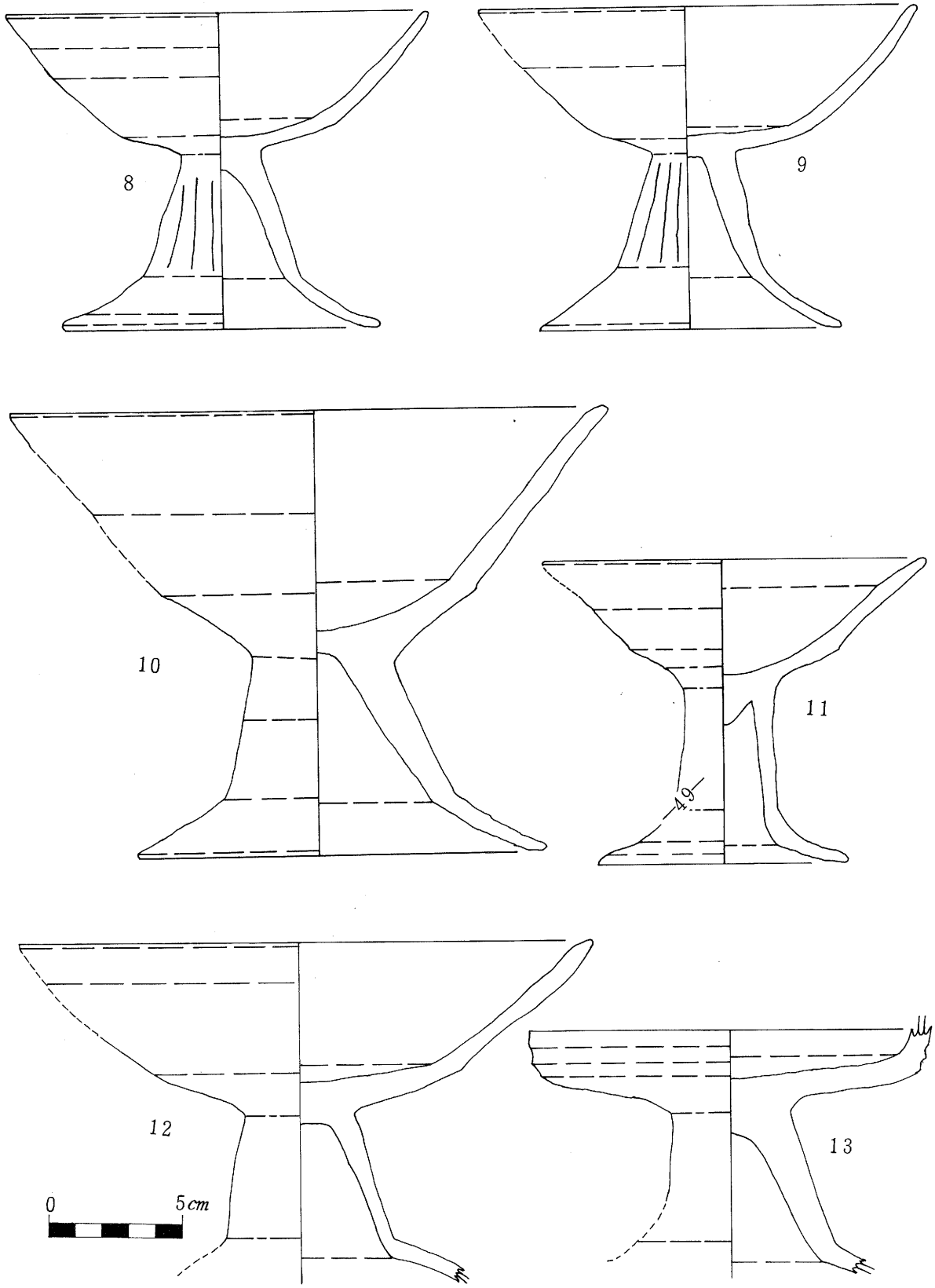




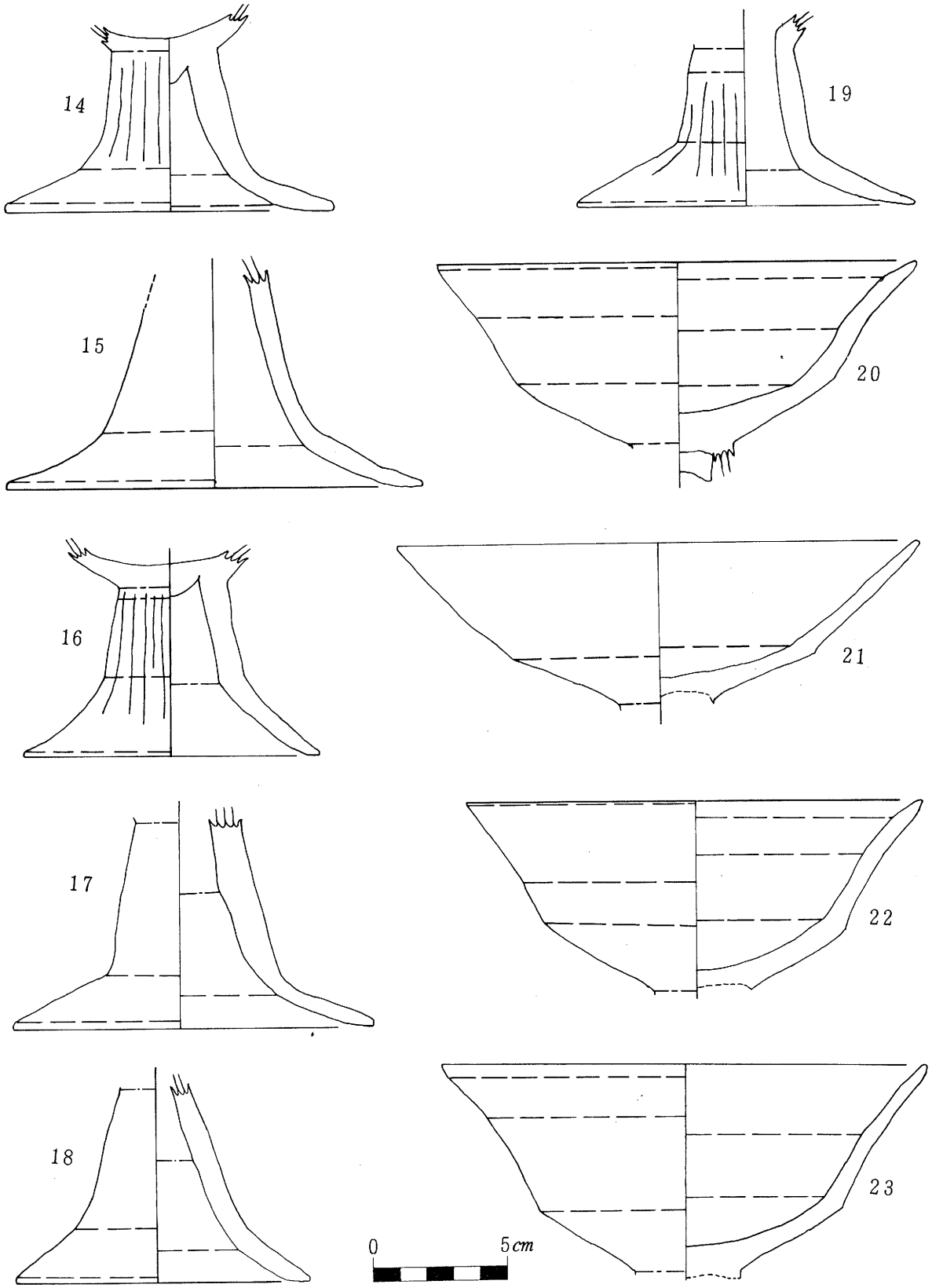




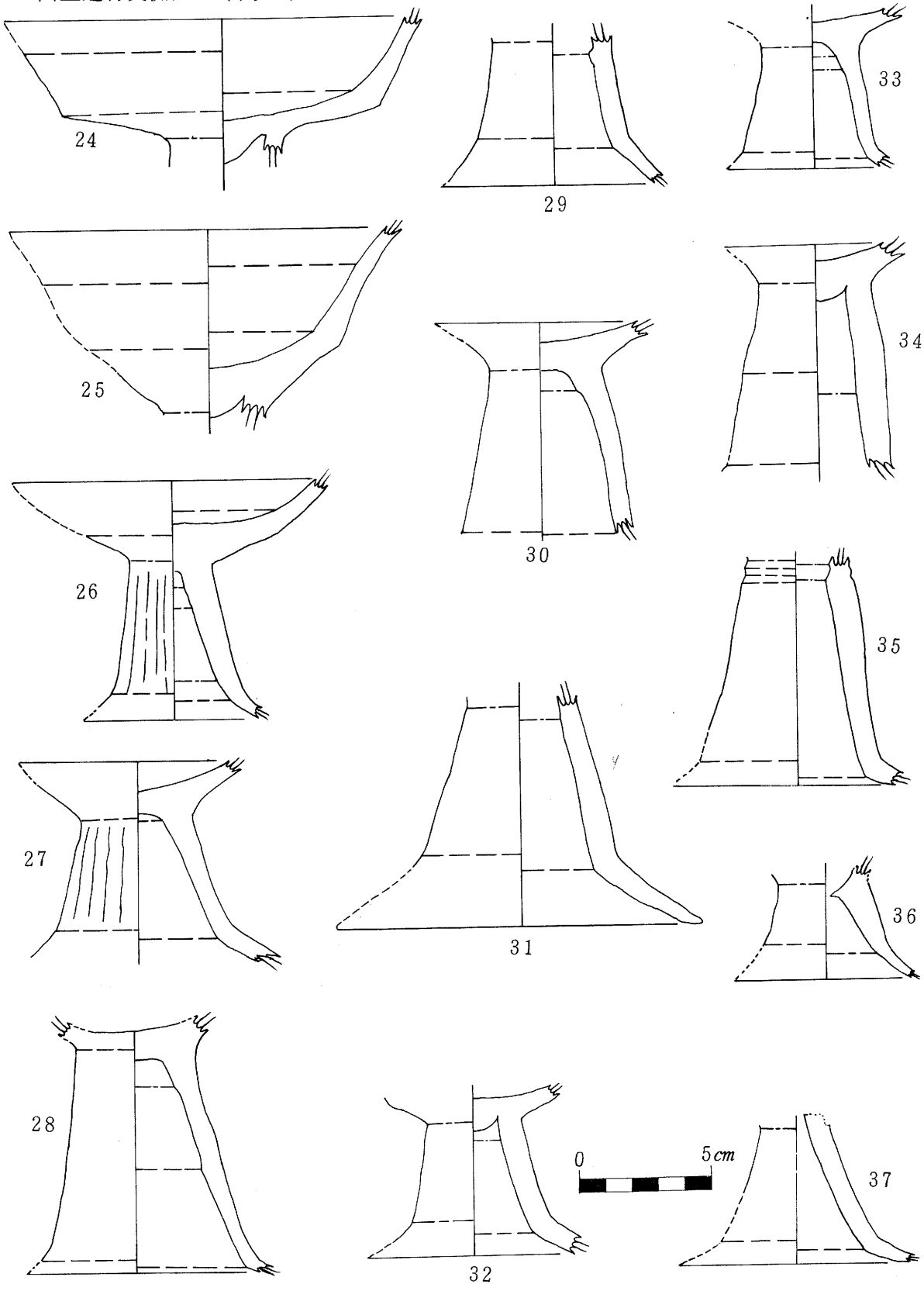
出土遺物実測図２（高杯）



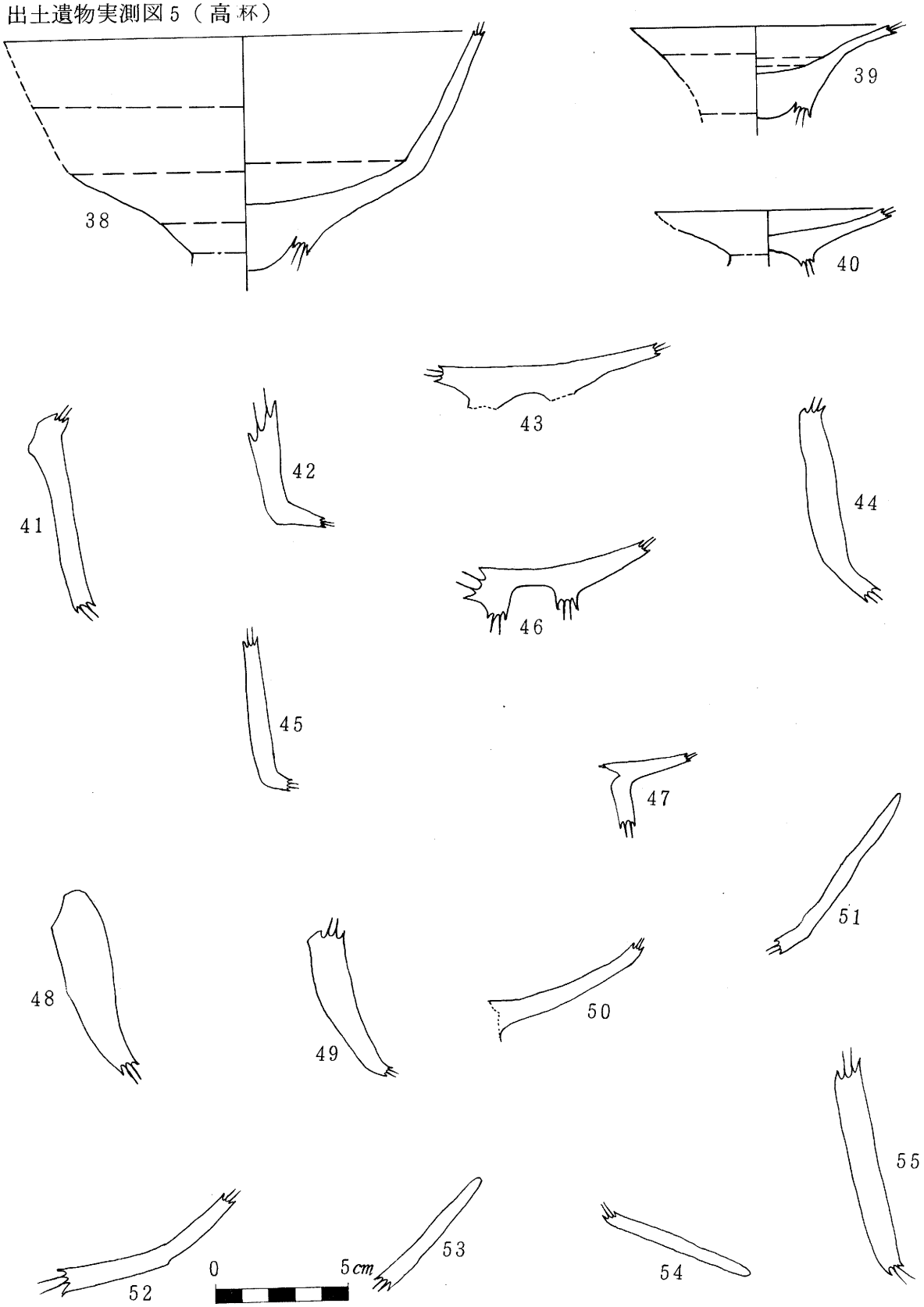
出土遺物実測図３（高杯）



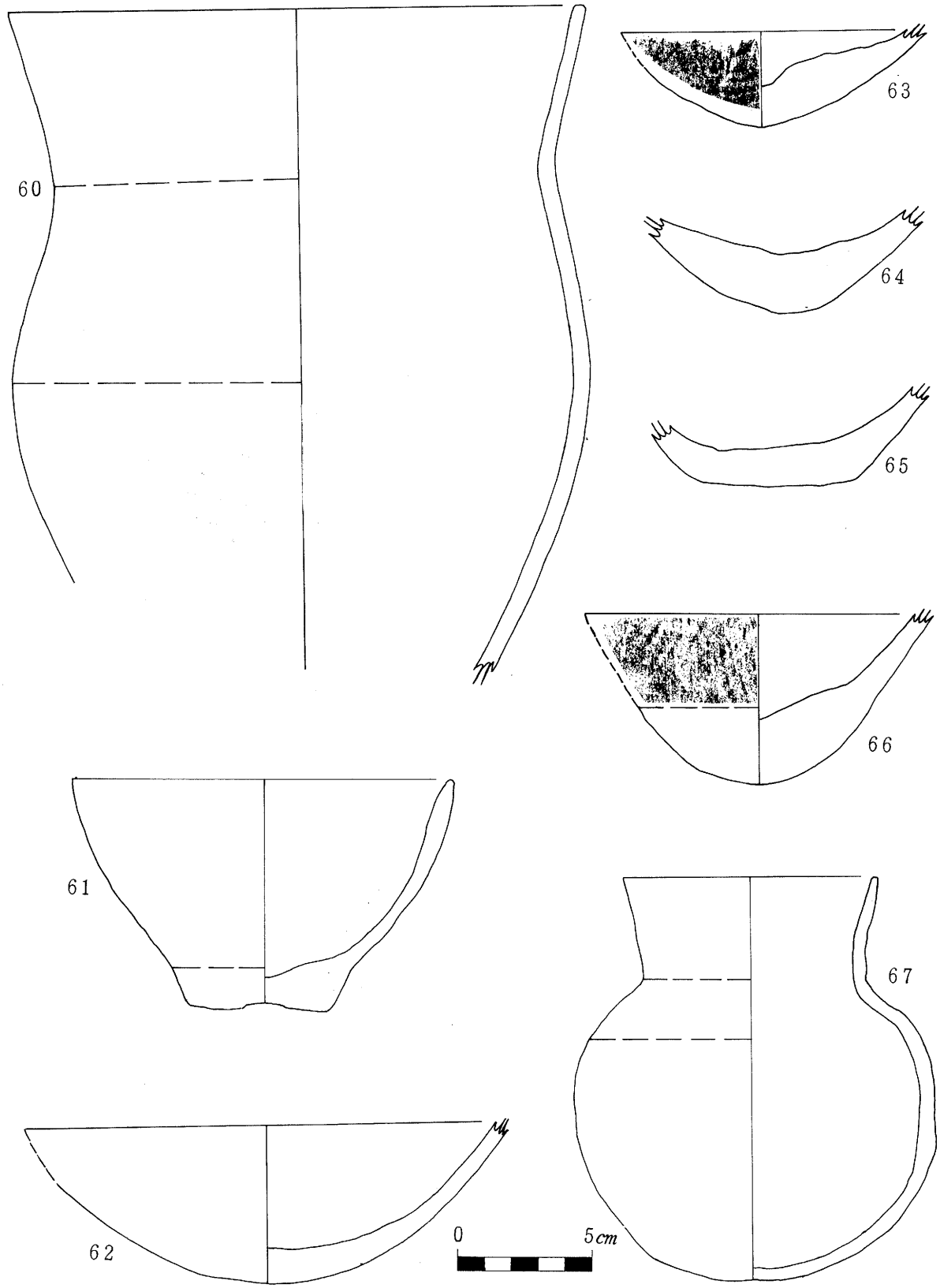
出土遺物実測図４（高杯）



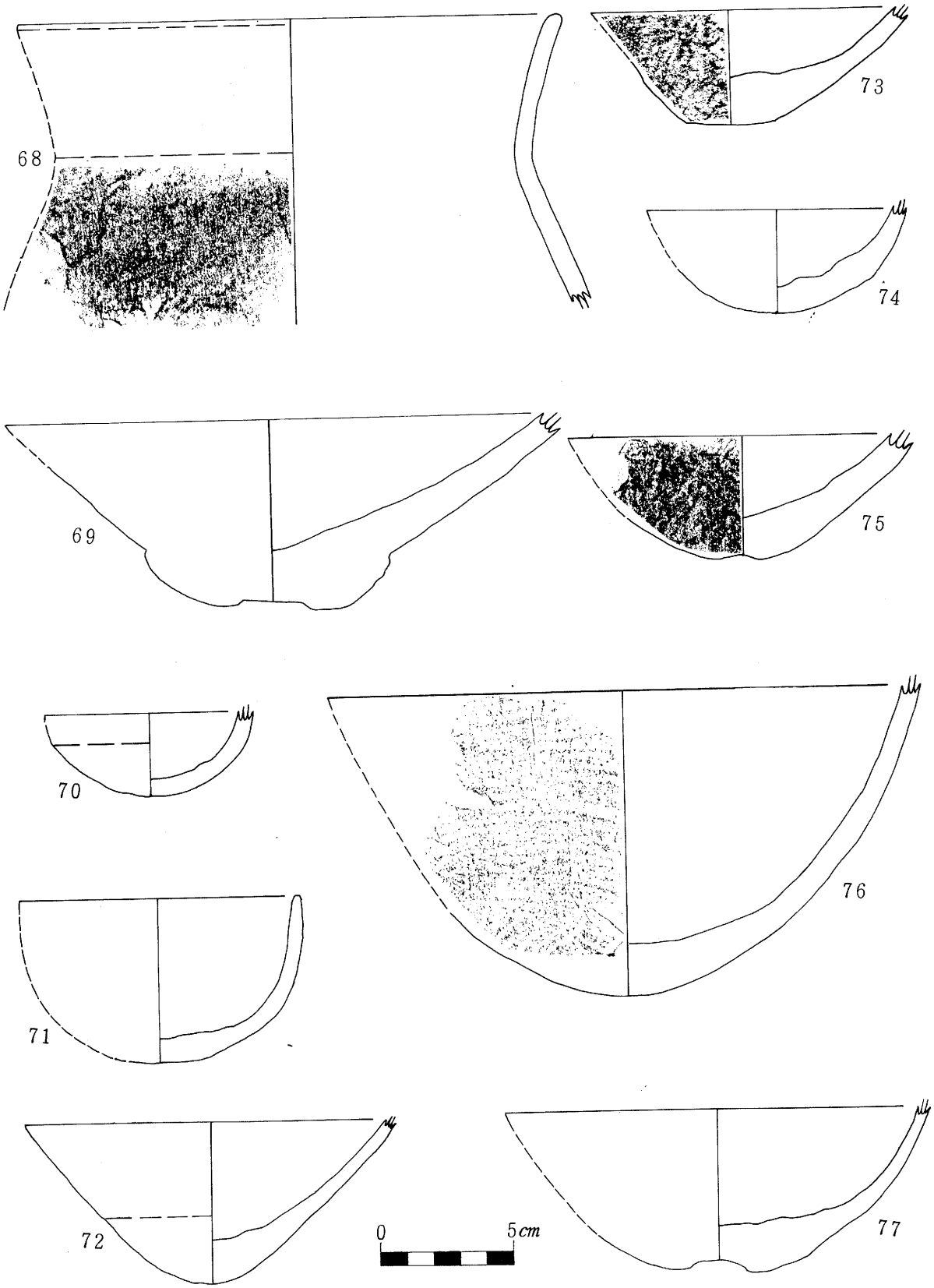
出土遺物実測図５（高杯）



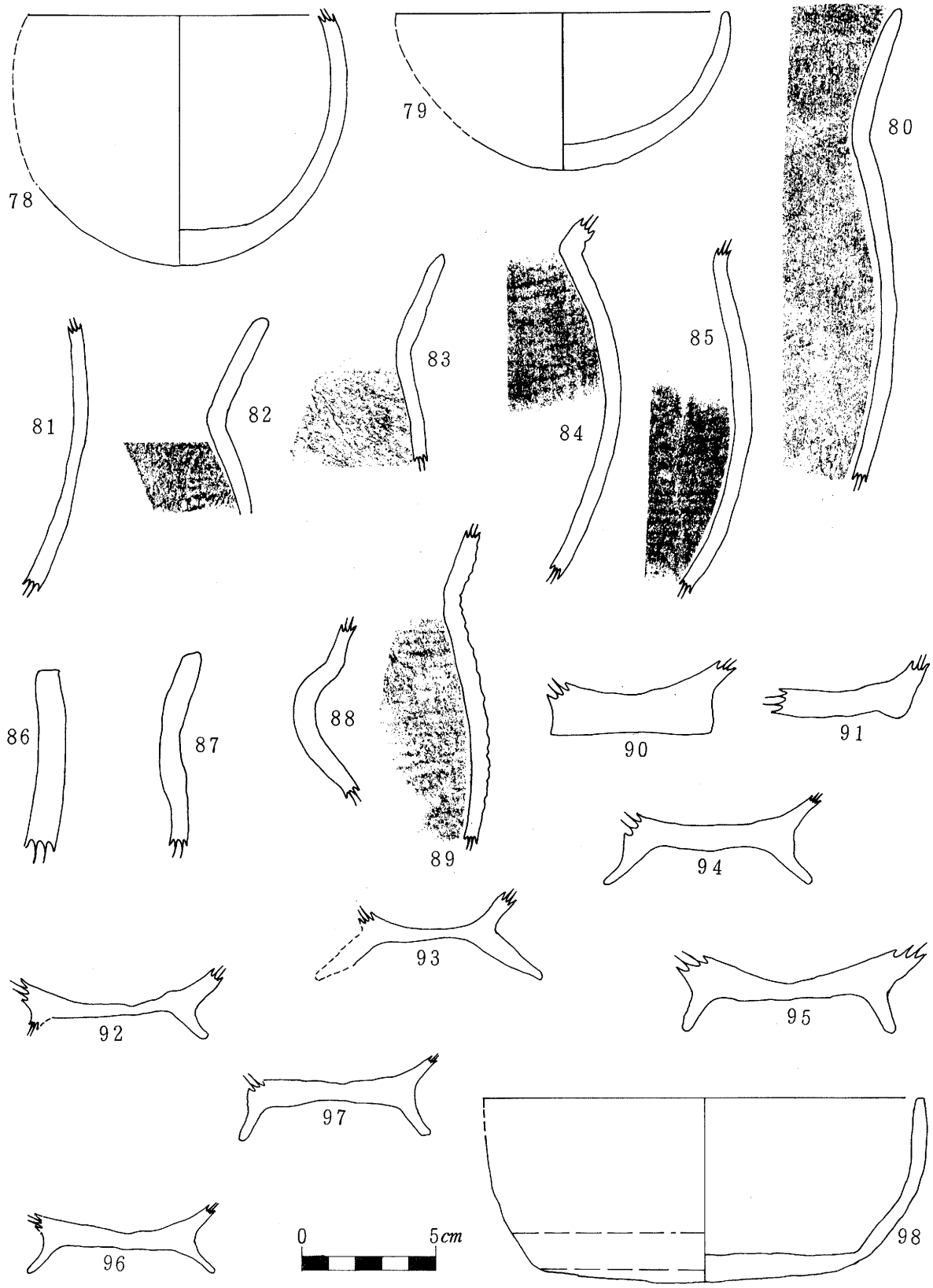
遺物実測図６（土師器）



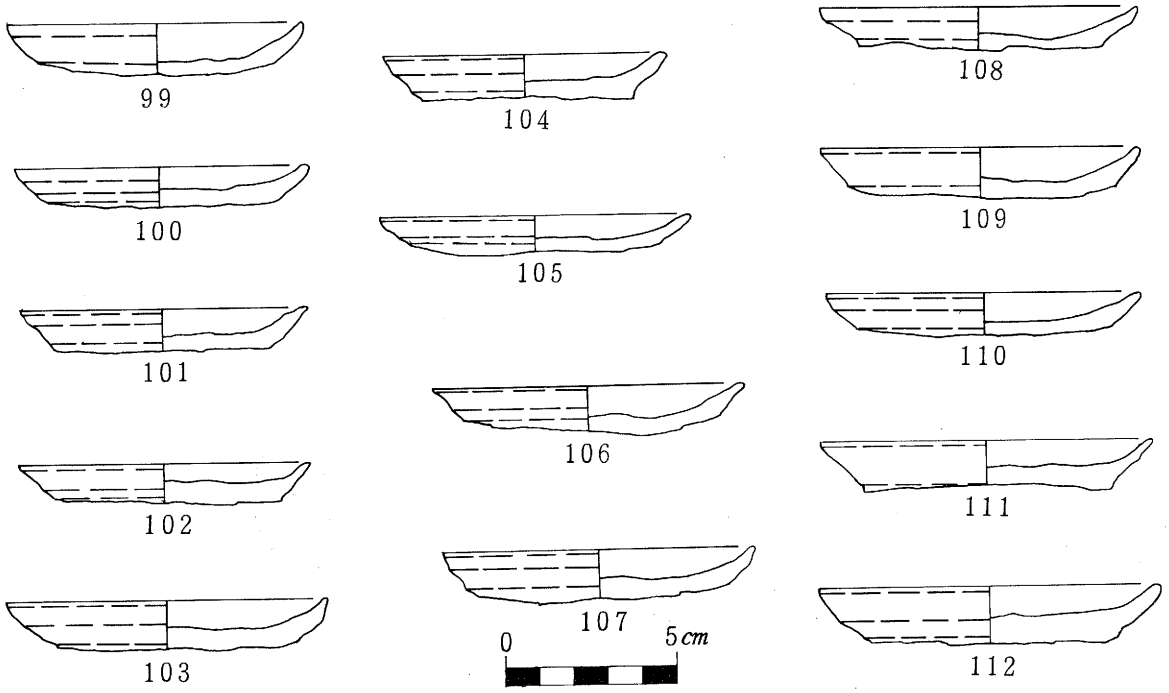
遺物実測図７（土師器）



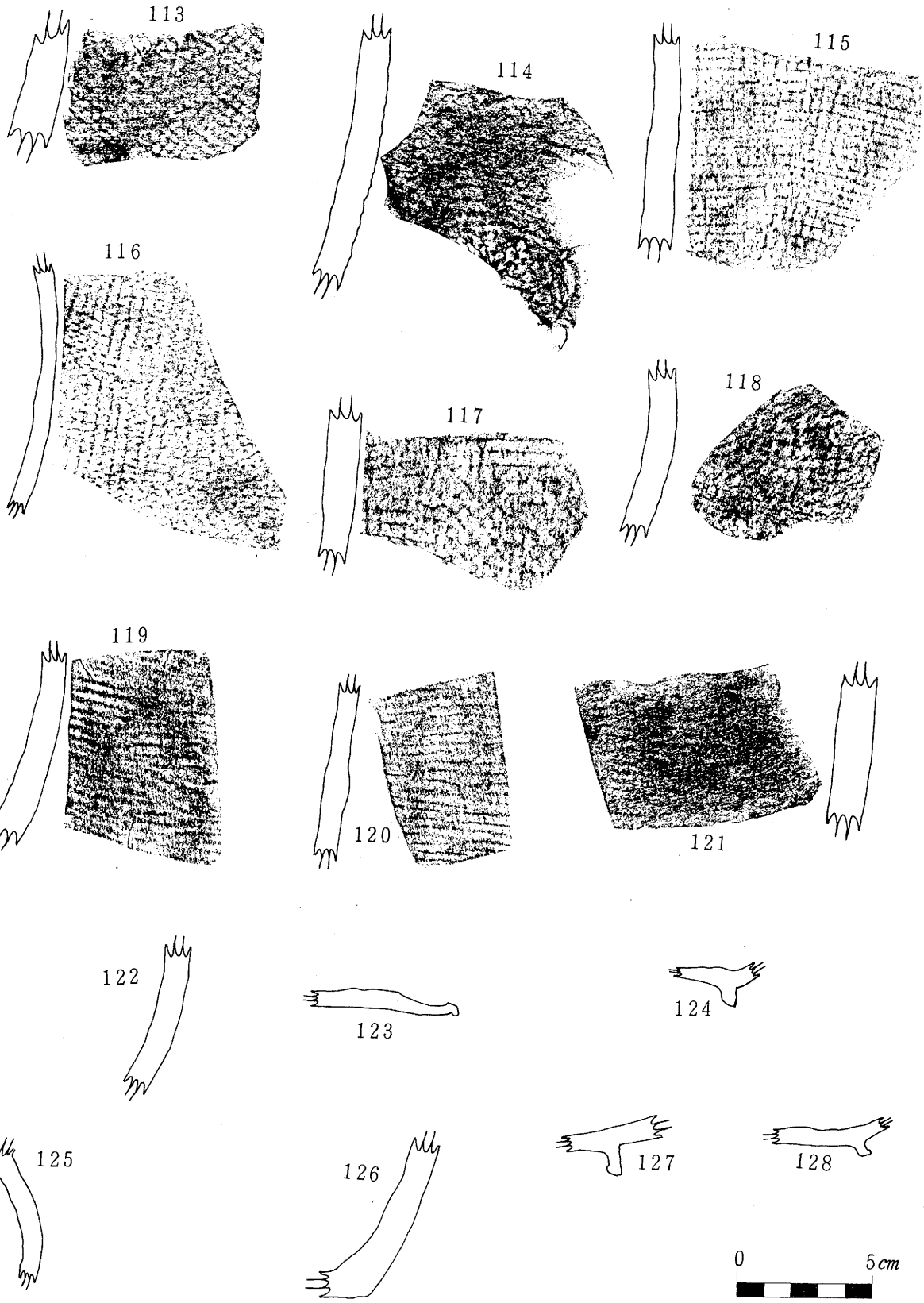
出土遺物実測図８（土師器）



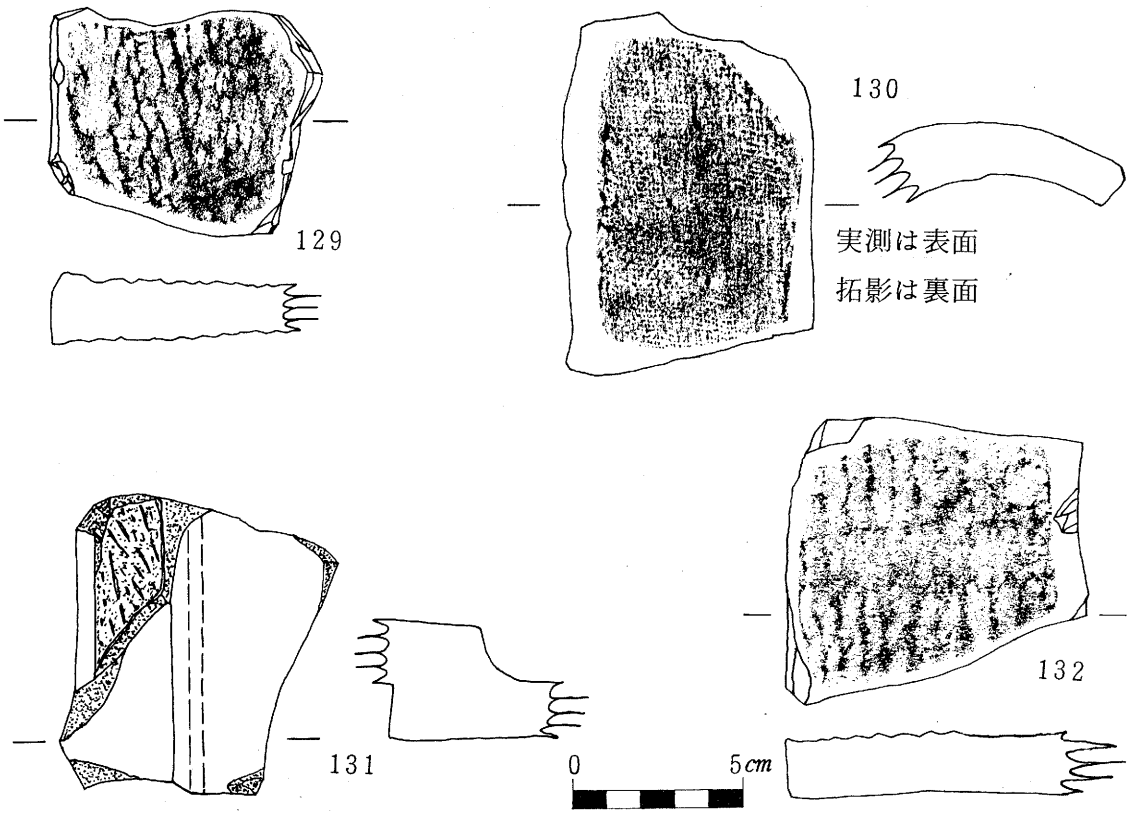
出土遺物実測図９（土師器）



第１９図　須恵器実測図

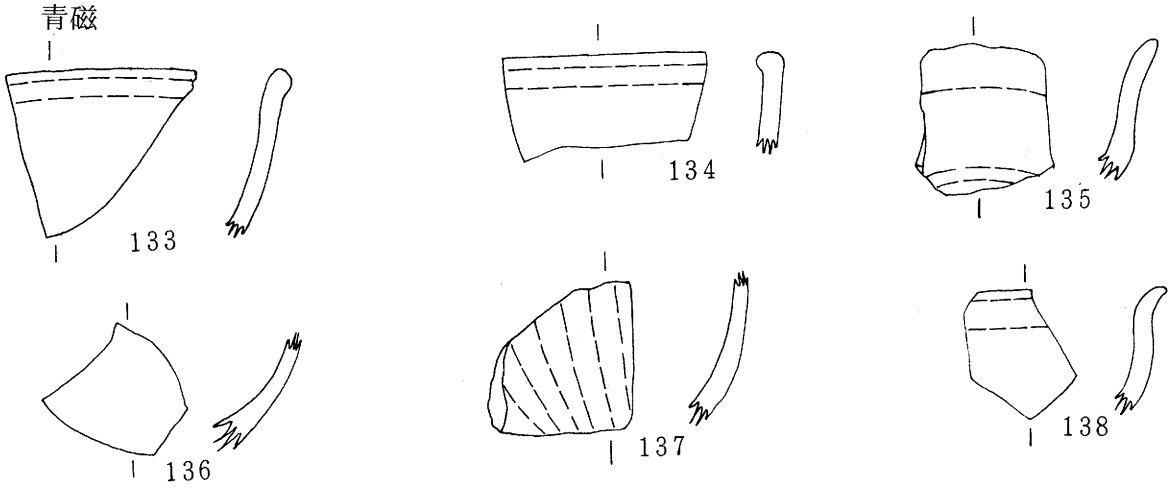

113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
0
5cm

第２０図　瓦実測図

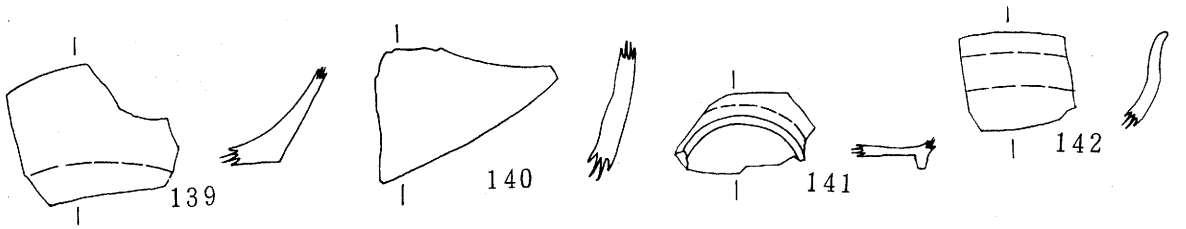


第２１図　青磁・白磁・陶器実測図

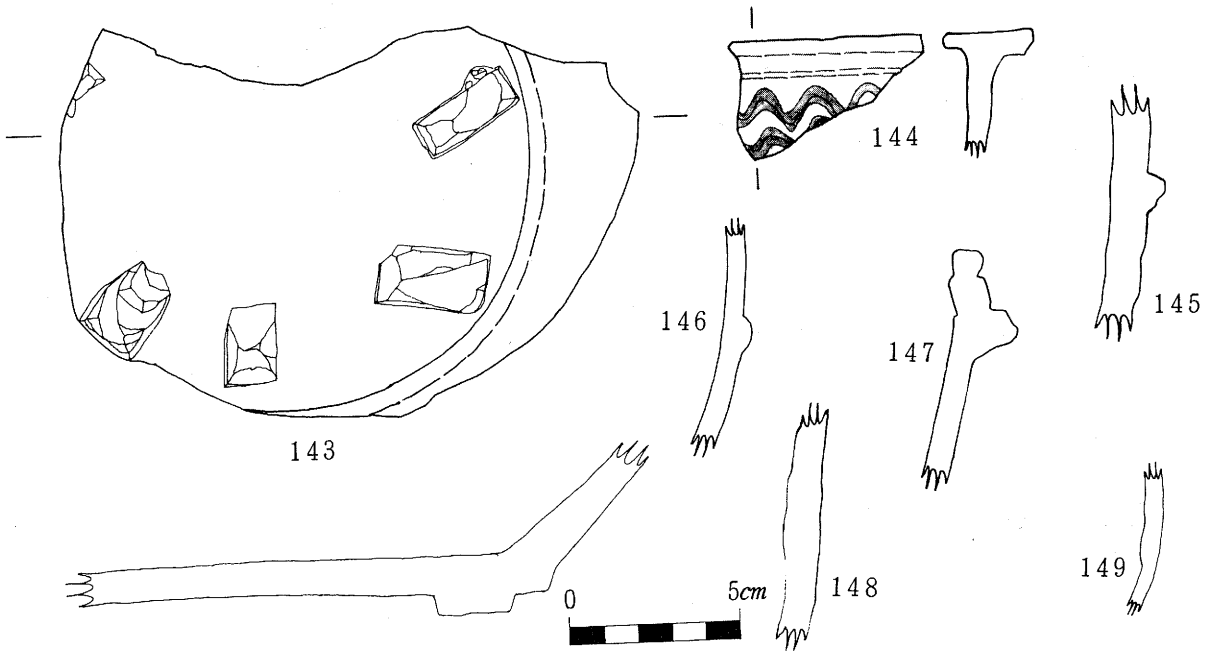
青磁



白磁

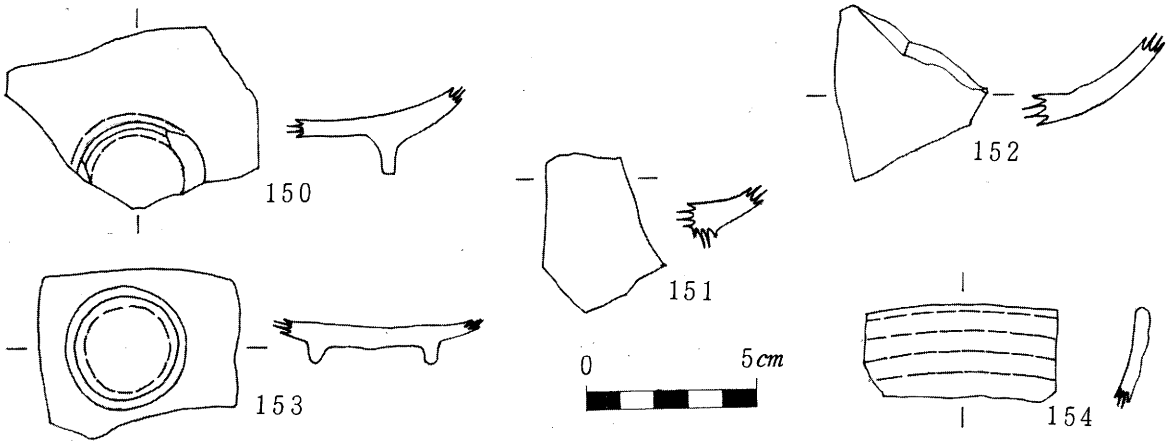


陶器



第２２図　磁器・染付実測図

磁器



染付

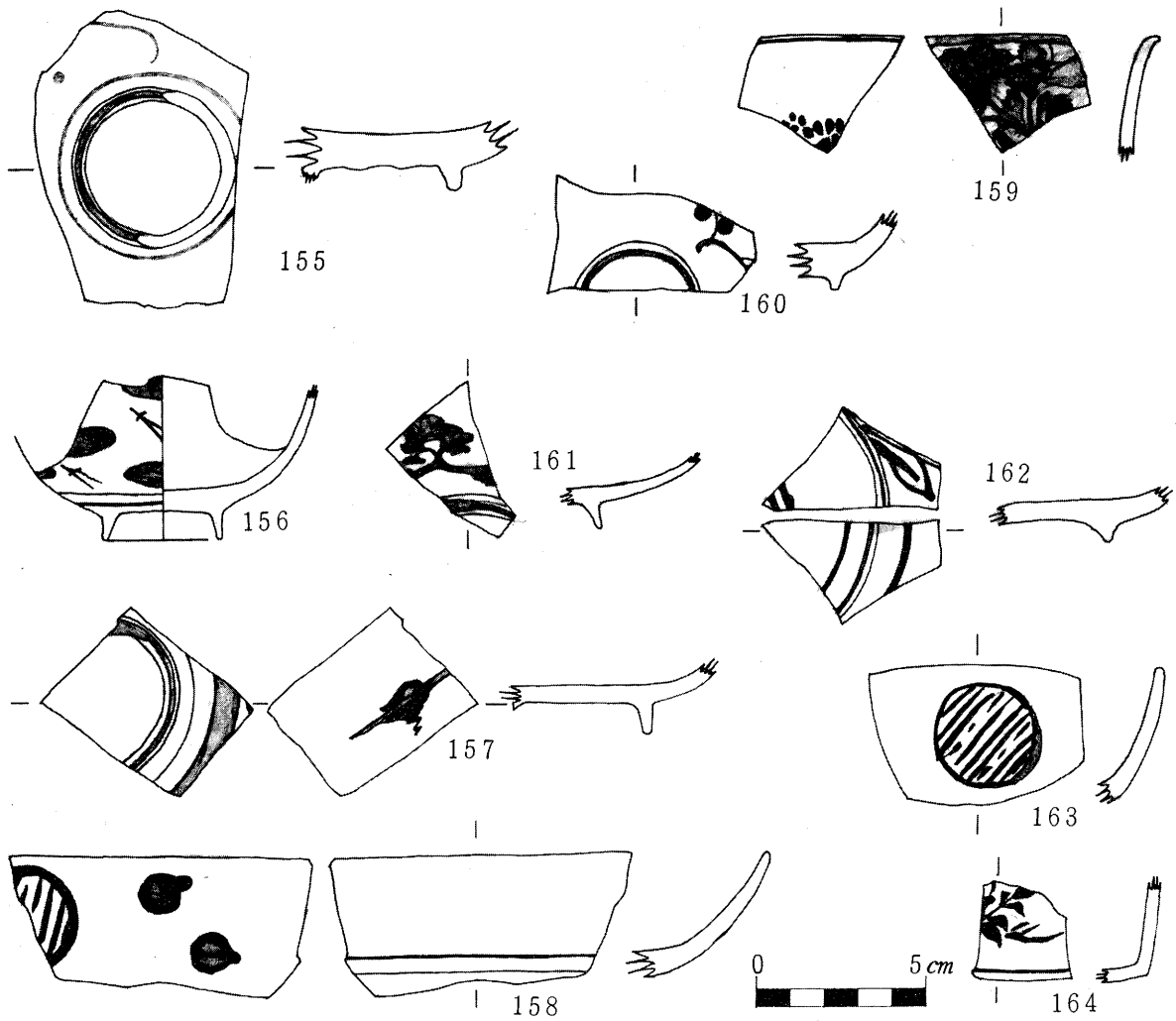


表 1

出 土 遺 物 一 覧 表

遺構名	土師器	須恵器	土錘	白磁	青磁	染付	磁器	陶器	その他	備　考
A　区	135	3				3	9	12	鉄片1	
B区一括	11	1		1		1				
C区一括	24	9				1	2			
1号住居跡	122	6	1	1		1		1		
2号　〃	430	4	3		1	1	3	3		
3号　〃	113	12			1	1			瓦2	
4号　〃	670			1			2	2		
5号　〃	1,002					3			縄文土器1	
6号　〃	331	1			1		1			
1号土坑	76	1						1		
2号　〃	79	3				1		2		
6号　〃	97	7							瓦1	
7号　〃	40	3			1	6	1			
溝状1号	6									
楕円形状	3				1	5		2		
C区・T1	36									
〃　T3	46					2	1	2		
〃　T4	13					1		1		
D区・T1	77			1		2		1		
〃　T5	66	4				1		1		
〃　T6	114	7				2	1		瓦1・鉄片1	
〃　T7	297	18	2			2	1			
E区・T1	159	5		2	1	1	1	4	鉄片1	
〃　T2	133	12				5	4	1		
〃　T3	9	3				2				
集石2号	19	4								

遺構名	土師器	須恵器	土錘	白磁	青磁	染付	磁器	陶器	その他	備　　考
P・1	6									A区内柱穴
〃　3	4									〃　（高杯）
〃　4	1									〃
〃　16	5									〃
〃　47	1									2号住居跡
〃　50	1									〃
〃　62	3									3号住居跡
〃　64	4									〃
〃　66	10									5号住居跡（高杯）
〃　67	7									〃
〃　69	10									〃
〃　75	2									〃
〃　76	1									〃
計	4,163	103	6	6	6	41	26	33	8	総合計　4,392点

土錘計測表（第１８図）

表　2.　　単位：センチメートル

図番号	長さ	径（最大径）	内径	色調	備考
2	6.00	1.80	0.50	明黄褐色	端一部欠損、わずかな反りがある
3	4.55	1.60	0.60	同上	端一部欠損、わずかな反りがある
4	5.80	1.60	0.60	浅黄橙色	完形、ほぼ直
5	4.50	1.55	0.55	同上	両端とも欠損、直
6	5.30	1.50	0.55	にぶい橙色 一部灰白色	端が一部欠損するもほぼ完形、ゆるい反り
7	5.60	1.45	0.55	にぶい橙色	完形であるが、胴の一部に焼成前の欠落あり

土師器（高杯）計測表（第１８図）

表　3.　　法量単位：*cm*

図番号	器種	法量	色調	胎土	出土地	備考
8	高杯	器高 11.8 口径 15.8 脚端径 11.9	外・橙 内・〃	少し荒い、雲母を含む １～２ミリ粒子	１号住居跡	杯部はヨコナデ、脚柱部にはタテのヘラ痕が見受けられる。 焼成良好
9	〃	器高 12.1 口径 16.3 脚端径 11.2	外・橙 内・〃	少し荒い １～２ミリ粒子	同上	杯胴部に鮮明な陵１本、沈線１本認められる。 焼成良好
１０	〃	器高 16.6 口径 22.3 脚端径 15.3	外・浅黄橙 内・橙	こまかい、長粒子を含む １～３ミリ粒子	１号土坑	杯胴部に陵２本、沈線１本、ヨコナデ、脚部に陵１本、沈線２本、ヘラ調整　焼成良好
１１	〃	器高 11.4 口径 14.3 脚端径 9.4	外・橙 内・〃	こまかい １～２ミリ粒子	２号住居跡	杯部、口縁部近くで大きく外反、１／３欠損、脚部、ヘラ調整痕を残す、ナデ　焼成良好
１２	〃	器高 口径（21.4） 脚端径	外・浅黄橙 内・〃	こまかい １ミリ粒子	５号住居跡	杯部、鮮明な陵線、ヘラ調整、ヨコ・タテナデ、脚部、ヘラタテナデ　焼成良好
１３	〃	器高 口径（15.0） 脚端径	外・にぶい橙 内・橙	こまかい １ミリ粒子	同上	口縁部欠損、杯部に陵線、沈線、ヨコナデ、脚部、ナデのあとヘラ仕上げ、タテ鮮明な沈線　焼成良好
１４	〃	器高 口径 脚端径 12.3	外・浅黄橙 内・〃	こまかい １～２ミリ粒子	２号住居跡	杯部欠損、脚部ヘラタテナデ、端部ヨコナデ 焼成良好
１５	〃	器高 口径 脚端径 15.5	外・浅黄橙 内・〃	こまかい １ミリ粒子	同上	杯部欠損、脚部ヘラタテナデ、端部ヨコナデ 焼成良好

図番号	器種	法量	色調	胎土	出土地	備考
16	高杯	器高 口径 脚端径 11.1	外・浅黄橙 内・〃	こまかい 1～2ミリ粒子	4号住居跡	杯部欠損、脚部ヘラタテナデ、端部ヨコナデ 焼成良好
17	〃	器高 口径 脚端径 13.4	外・にぶい橙 内・〃	こまかい 1ミリ粒子	同上	同上 焼成良好
18	〃	器高 口径 脚端径 10.9	外・にぶい橙 内・浅黄橙	こまかい 1～3ミリ粒子	同上	同上 焼成良好
19	〃	器高 口径 脚端径 12.6	外・にぶい橙 内・〃	こまかい 粒子少量	同上	杯部欠損、脚部に一部欠損個所 ヨコ・タテナデ、ヘラ痕あり 焼成良好
20	〃	器高 口径 17.9 脚端径	外・浅黄橙 内・〃	こまかい 1～3ミリ粒子	2号住居跡	脚部欠損、杯部2本の陵と1本の沈線、杯部陵から口縁部にかけて大きく外反、ヨコナデ　焼成良好
21	〃	器高 口径 19.5 脚端径	外・にぶい橙 内・〃	こまかい 1ミリ粒子	5号住居跡	柱穴内に出土、杯部のみ残存 鮮明な陵線、杯部1／3欠損 焼成良好
22	〃	器高 口径 17.0 脚端径	外・橙 内・〃	少し荒い 1～2ミリ粒子	2号住居跡	杯部のみ残存、内1／3欠損 鮮明な陵線、ナデ 焼成良好
23	〃	器高 口径 18.1 脚端径	外・黄橙 内・浅黄橙	少し荒い 1～2ミリ粒子	同上	脚部を欠損、杯部鮮明な陵線 陵より口縁にかけて大きく外反する、ヨコナデ　焼成良好
24	〃	器高 口径 脚端径	外・浅黄橙 内・〃	こまかい 1～2ミリ粒子	同上	脚部欠損、杯底部は横に開き陵より急角度に立ち上る。口縁部は欠損　焼成良好
25	〃	器高 口径（15.0） 脚端径	外・淡橙 内・にぶい橙	こまかい 1～2ミリ粒子少量	4号住居跡	杯部の片で鮮明な陵から急角度で立ち上り、口縁部にかけて大きく外反する。ヘラ痕底部にあり。焼成良好
26	〃	器高 口径 脚端径	外・橙 内・〃	こまかい 1～2ミリ粒子少量	2号住居跡	口縁部と脚端部を欠損する。杯部はゆるく外反して立ち上がる。脚部にタテヘラ痕。　焼成良好
27	〃	器高 口径 脚端径	外・浅黄橙 内・〃	こまかい 1～2ミリ粒子少量	1号住居跡	杯底部と体部のみの片、 ナデ調整、ヘラ痕あり 焼成良好
28	〃	器高 口径 脚端径	外・浅黄橙 内・〃	こまかい 1ミリ粒子少量	2号住居跡	脚柱部の片 内部に不整形ヘラ痕タテナデ 焼成良好
29	〃	器高 口径 脚端径	外・黄橙 内・〃	こまかい 1～2ミリ粒子	1号住居跡	脚部だけの片 タテナデ、ヘラ痕あり 焼成良好
30	〃	器高 口径 脚端径	外・浅黄橙 内・〃	こまかい 1～2ミリ粒子	5号住居跡	脚部だけの片 タテナデ、ヘラ痕あり 焼成良好

図番号	器種	法量	色調	胎土	出土地	備考
31	高杯	器高 口径 脚端径(13.8)	外・浅黄橙 内・〃	こまかい 1ミリ粒子	4号住居跡	杯部欠損、脚端部の一部を欠く。 脚柱部に仕上げ欠落部あり 焼成良好
32	〃	器高 口径 脚端径	外・にぶい橙 内・浅黄橙	こまかい 1ミリ粒子	5号住居跡	杯底部、脚柱部の片 ヘラ調整痕、タテ 焼成良好
33	〃	器高 口径 脚端径	外・にぶい橙 内・〃	こまかい 1～2ミリ粒子	(1号住) C区・T3	脚柱部片、ナデ調整、ヘラ 焼成良好
34	〃	器高 口径 脚端径	外・にぶい橙 内・〃	こまかい 1ミリ粒子	6号住居跡	脚柱部片、ヘラ調整タテ 焼成良好
35	〃	器高 口径 脚端径	外・橙 内・〃	少し荒い 1ミリ粒子少量	(1号住) C区・T4	同上 ヨコナデ 焼成良好
36	〃	器高 口径 脚端径	外・にぶい橙 内・〃	こまかい 1～3ミリ粒子少量	(5号住) E区・T2	同上 ヨコナデ 焼成良好
37	〃	器高 口径 脚端径	外・にぶい橙 内・暗褐	少し荒い 1ミリ粒子少量	5号住居跡	同上 ヨコナデ 焼成良好
38	〃	器高 口径(18.1) 脚端径	外・明褐色 内・にぶい橙	こまかい 1～3ミリ粒子	4号住居跡	杯部片、壁は急曲して内湾ぎみに立ち上る。 口縁部欠損 焼成良好
39	〃	器高 口径 脚端径	外・にぶい黄橙 内・淡橙	こまかい 1～3ミリ粒子少量	同上	杯底部片 ヨコナデ 焼成良好
40	〃	器高 口径 脚端径	外・浅黄橙 内・〃	少し荒い 1～3ミリ粒子	3号住居跡	同上 ヨコナデ 焼成良好
41	〃	器高 口径 脚端径	外・浅黄橙 内・〃	こまかい 1～2ミリ粒子	同上	脚柱部片、ヘラ調整痕タテ、一部ヨコ 焼成良好
42	〃	器高 口径 脚端径	外・浅黄橙 内・〃	こまかい 1～2ミリ粒子	同上	脚柱・端部片、ヘラ・ヨコ 焼成良好
43	〃	器高 口径 脚端径	外・にぶい橙 内・橙	こまかい 1ミリ粒子	5号住居跡	杯底部片 焼成良好
44	〃	器高 口径 脚端径	外・橙 内・にぶい橙	少し荒い 1ミリ粒子少量	4号住居跡	脚部片 焼成良好
45	〃	器高 口径 脚端径	外・にぶい橙 内・にぶい黄橙	こまかい 1～2ミリ粒子少量	5号住居跡	脚柱部片、ヘラ調整タテ・ヨコ 焼成良好

図番号	器種	法量	色調	胎土	出土地	備考
46	高杯	器高 口径 脚端径	外・浅黄橙 内・〃	こまかい 1～2ミリ粒子	4号住居跡	杯底部片、ヨコナデ 焼成良好
47	〃	器高 口径 脚端径	外・浅黄橙 内・〃	こまかい 1～2ミリ粒子少量	3号住居跡上	杯底部、脚柱部の片 焼成良好
48	〃	器高 口径 脚端径	外・にぶい橙 内・〃	少し荒い 1～3ミリ粒子	C区・一括	脚柱上部片、タテナデ 焼成良好
49	〃	器高 口径 脚端径	外・淡橙 内・にぶい橙	こまかい 1～3ミリ粒子	(5号住) E区・T2	脚柱部片　ヨコナデ 焼成良好
50	〃	器高 口径 脚端径	外・浅黄橙 内・にぶい黄橙	こまかい 1ミリ粒子少量	A区 3号柱穴	杯胴部片、口縁は欠損 ヨコナデ、ヘラ痕あり 焼成良好
51	〃	器高 口径 脚端径	外・にぶい橙 内・浅黄橙	こまかい 1ミリ粒子	2号住居跡	杯胴部片、内湾ぎみに立ち上り、さらに外反して口縁部へ 焼成良好
52	〃	器高 口径 脚端径	外・にぶい橙 内・〃	こまかい 1ミリ粒子	6号住居跡	杯胴部片、内湾ぎみに立ち上り鮮明な陵よりさらに内湾ぎみで口縁へ 焼成良好
53	〃	器高 口径 脚端径	外・にぶい橙 内・〃	こまかい 1ミリ粒子少量	2号住居跡	口縁を含む杯胴部片、ナデ後にヘラ調整内湾して立ち上る。ヘラ痕内外面に残される。焼成良好
54	〃	器高 口径 脚端径	外・浅黄橙 内・〃	こまかい 1～2ミリ粒子	5号住居跡	脚端部片、ヨコナデ 焼成良好
55	〃	器高 口径 脚端径	外・淡橙 内・〃	こまかい 1～3ミリ粒子	4号住居跡	脚柱部片、ヘラタテナデ ヘラ痕が残される。 焼成良好

(　)内は、復元による計測

土師器計測表（1）

表　4.

法量単位：cm

図番号	器種	法　量	色　調	胎　土	焼成	出土地	備　考
56	広口壺	器高（29.5） 口径　18.7	外・明褐色 内・明褐灰色	良好、長粒子を含む 1～4ミリの粒子	良　好	2号住居跡	胴体部の一部及び底部欠損 叩目文、内外に炭付着、内面ナデ
57	坩	器高　10.5 口径　8.4	外・橙　色 内・　〃	こまかい 良好、1～2ミリ粒子	〃	1号土坑	長目の口縁、回転ナデ
58	坩	器高（　7.0） 口径（　7.2）	外・にぶい橙 内・　〃	〃 0.5～2ミリ粒子	〃	5号住居跡	口縁一部欠損 回転ナデ、内面ナデ
59	坩	器高 口径	外・淡　橙 内・　〃	〃 1～2ミリ粒子	〃	4号住居跡	口縁部欠損、外面風化するも 回転ナデと思考、内面ナデ
60	広口壺	器高（27.0） 口径　21.2	外・明黄褐色 内・　〃	〃 2～3ミリ粒子	〃	同　上	底部を欠く、全面に炭付着 外面ヨコナデ、内面ナデ
61	浅　鉢	器高　8.6 口径　14.2	外・橙　色 内・　〃	〃　長粒子を含む 2～4ミリ粒子	やゝあまい	2号住居跡	体部の土、内湾ぎみに立ち上る ヨコナデ、内面ナデ
62	広口壺	器高 口径	外・浅黄橙色 内・灰白色	やゝ荒い 1～3ミリ粒子	良　好	4号住居跡	底部片、一部炭により黒褐色 に変色、ヨコナデ、内面ナデ
63		器高 口径	外・浅黄橙色 内・明褐灰色	荒い 2～3ミリ粒子	やゝ良好	6号住居跡	底部の片、叩目文 内面ナデ
64		器高 口径	外・灰褐色 内・灰白色	こまかい 2～3ミリ粒子	良　好	4号住居跡	底部片、内外面ナデ
65		器高 口径	外・灰白色 内・　〃	こまかい 1～4ミリ粒子	やゝ良好	同　上	底部片、深鉢と思考される 内外面ナデ
66	広口壺	器高 口径	外・浅黄橙色 内・にぶい橙色	良好 2～3ミリ粒子	良　好	同　上	底部片、外面叩目文 内面ナデ
67	壺	器高　15.0 口径　9.5	外・浅黄橙色 内・　〃	〃　長粒子を含む 1～4ミリ粒子	〃	同　上	胴体部の各所が欠損、ナデ
68	広口壺	器高 口径	外・浅黄橙色 内・灰白色	荒い 1～4ミリ粒子	やゝ良好	同　上	口縁部片、内外面ナデ
69	同　上	器高 口径	外・黄橙色 内・浅黄橙色	こまかい 1～3ミリ粒子	〃	5号住居跡	底部片、外面炭付着、叩目文 内面一部明褐灰色ナデ
70	坩	器高 口径	外・浅黄橙色 内・灰白色	少し荒い 1～2ミリ粒子	〃	6号住居跡	胴部上位欠損 風化して文様不明

図番号	品種	法　量	色　調	胎　土	焼成	出土地	備　考
71	碗	器高　6.2 口径（10.5）	外・にぶい橙色 内・浅黄橙色	少し荒い 1ミリ粒子	やゝ良好	4号住居跡	1／2欠損、内外ナデ
72	広口壺	器高 口径	外・浅黄橙色 内・　〃	こまかい 1～4ミリ粒子	〃	5号住居跡	底部片、内外ナデ
73	深　鉢	器高 口径	外・灰白色 内・　〃	良好 1～4ミリ粒子	〃	同　上	底部片、叩目文、内面ナデ 内外に一部炭付着
74	坩	器高 口径	外・浅黄橙色 内・　〃	こまかい 1～3ミリ粒子	〃	C区・T4	底部片、内外面ナデ
75	広口壺	器高 口径	外・灰白色 内・浅黄橙色	良好 1～4ミリ粒子	〃	5号住居跡	底部片、叩目文、内面ナデ
76	同　上	器高 口径	外・浅黄橙色 内・灰白色	やゝ荒い 1～2ミリ粒子	〃	同　上	底部片、叩目文、内面ナデ 内面一部褐灰色
77	壺	器高 口径	外・灰白色 内・明褐灰色	こまかい 1～3ミリ粒子	〃	4号住居跡	底部片、ナデ 内面ヘラナデ
78	同　上	器高 口径	外・にぶい橙色 内・明褐灰色	少し荒い 1～2ミリ粒子	〃	同　上	底部、胴部片 外面に炭付着
79	碗	器高　5.9 口径（12.4）	外・橙・淡橙色 内・灰白・浅黄橙色	こまかい 1～2ミリ粒子	〃	6号住居跡	一部欠損、内外面ナデ
80	広口壺	器高 口径	外・黄橙色 内・浅黄橙色	良好 1～3ミリ粒子	〃	4号住居跡	外面下半に炭付着 内外面ナデ
81	同　上	器高 口径	外・　橙 内・浅黄橙色	良好 1～2ミリ粒子	〃	同　上	胴部片、外面下半に炭付着 内面一部黒褐色、ヨコナデ
82	同　上	器高 口径	外・浅黄橙色 内・　〃	荒い 1～2ミリ粒子	〃	5号住居跡	口縁部片、ヨコナデ 内面ナデ
83	同　上	器高 口径	外・浅黄橙色 内・　〃	こまかい 1～3ミリ粒子	良　好	同　上	口縁部片、ヨコナデ 内面ナデ
84	壺	器高 口径	外・浅黄橙色 内・灰白色	こまかい 1～2ミリ粒子	〃	同　上	口縁、頸部、胴部片 叩目文、内面ナデ
85	同　上	器高 口径	外・浅黄橙色 内・灰白色	良好 2～4ミリ粒子	〃	6号住居跡	頸部、胴部片 叩目文、内面ナデ
86	甕	器高 口径	外・黄橙色 内・　〃	こまかい 1ミリ程度の粒子	〃	3号住居跡 上	口縁部片、外ヘラ、ヨコナデ 外面一部に炭付着、内ヨコナデ

図番号	器種	法　量	色　調	胎　土	焼成	出土地	備　考
87	甕	器高 口径	外・にぶい褐色 内・浅黄橙色	良好、長粒子を含む 1～4ミリ粒子	良　好	6号住居跡	口縁部片、ヨコナデ 内面1／2は褐灰に変色
88	壺	器高 口径	外・灰褐色 内・明褐灰色	良好 1～3ミリ粒子	〃	5号住居跡	外面一部黒褐色に変色、叩目文 内面下半褐灰色に変色
89	広口壺	器高 口径	外・浅黄橙色 内・　〃	こまかい 1～3ミリ粒子	〃	5号住居跡	頸部、胴部片、叩目文 内面ナデ
90	深　鉢	器高 口径	外・灰白色 内・にぶい橙色	荒い 1～4ミリ粒子	〃	1号土坑	底部片
91	不　明	器高 口径	外・にぶい橙色 内・浅黄橙色	荒い 1～3ミリ粒子	やゝあまい	4号住居跡	底部片、ヨコナデ 内面ナデ
92	〃	器高 口径	外・灰白色 内・　〃	良好 1～3ミリ粒子	良　好	D区・T5	高台付土器 底部片、回転ヨコナデ
93	〃	器高 口径	外・浅黄橙色 内・灰白色	荒い 1～4ミリ粒子	〃	2号住居跡	同上　回転ヨコナデ
94	〃	器高 口径	外・浅黄橙色 内・　〃	荒い 1～2ミリ粒子	〃	同　上	同上　回転ヨコナデ
95	〃	器高 口径	外・にぶい橙色 内・橙　色	良好 1～2ミリ粒子	〃	D区・T7	同上　回転ヨコナデ
96	〃	器高 口径	外・浅黄橙色 内・　〃	良好 1～2ミリ粒子	〃	2号住居跡	同上　回転ヨコナデ
97	〃	器高 口径	外・橙　色 内・　〃	少し荒い 1～2ミリ粒子	あまい	D区・T6	同上　回転ヨコナデ
98	浅　鉢	器高　6.9 口径　16.3	外・橙　色 内・　〃	少し荒い 1～2ミリ粒子少量	〃	A区	口縁一部を欠損、ナデ
99	皿	器高　1.6 口径　8.7	外・浅黄橙色 内・　〃	良好 1ミリ程度粒子少量	良　好	6号土坑	回転ナデ、底部ヘラ切り、ナデ 底部内外にうず巻きヘラ痕
100	〃	器高　1.3 口径　8.5	外・浅黄橙色 内・　〃	同上 同　上	〃	同　上	口縁部の一部欠損 他は同上、回転ナデ
101	〃	器高　1.2 口径　8.4	外・浅黄橙色 内・　〃	同上 同　上	〃	〃	同上　回転ナデ
102	〃	器高　1.2 口径　8.5	外・暗灰黄色 内・浅黄橙色	同上 同　上	〃	〃	同上　回転ナデ

図番号	器種	法　量	色　調	胎　土	焼成	出土地	備　考
103	皿	器高　1.4 口径　9.2	外・にぶい黄橙色 内・　〃	良好 1ミリ程度粒子少量	良　好	6号土坑	口縁部の一部欠損 他は同上、回転ナデ
104	〃	器高　1.3 口径　8.3	外・にぶい橙色 内・浅黄橙色	同上 同　上	〃	〃	口縁・胴部の一部欠損、ナデ 底部内外うず巻ヘラ痕
105	〃	器高　1.1 口径　9.1	外・橙　色 内・　〃	同上 同　上	やゝ良好	〃	1／3欠損 底部は同上、回転ナデ
106	〃	器高　1.4 口径　9.1	外・にぶい橙色 内・　〃	同上 同　上	良　好	〃	口縁一部欠損 底部は同上、回転ナデ
107	〃	器高　1.5 口径　9.1	外・橙　色 内・　〃	同上 同　上	〃	〃	同　上　回転ナデ
108	〃	器高　1.3 口径　9.3	外・にぶい橙色 内・橙　色	同上 同　上	〃	〃	口縁、胴部の一部欠損 底部同上、回転ナデ
109	〃	器高　1.5 口径　9.3	外・橙　色 内・　〃	同上 1～2ミリ粒子	〃	〃	完形、回転ナデ 底部内外面にうず巻ヘラ痕
110	〃	器高　1.3 口径　9.2	外・にぶい橙色 内・　〃	同上 1～2ミリ粒子	やゝ良好	〃	同　上　回転ナデ
111	〃	器高　1.4 口径　9.7	外・橙　色 内・　〃	良好 1～2ミリ粒子少量	良　好	〃	同　上　回転ナデ
112	〃	器高　1.7 口径　10.0	外・橙　色 内・にぶい橙色	良好 1～2ミリ粒子少量	〃	〃	同　上　回転ナデ

（　）内は、復元計測

須恵器計測表（第１９図）

表　5.

法量単位：*cm*

図番号	器種	法　量	色　調	胎　土	焼成	出土地	備　考
113	甕		外・青灰色 内・灰白色	良質	良　好	D区・T7	胴部片、叩目文 内面ヘラ調整痕
114	〃		外・青灰色 内・灰白色	〃	〃	2号住居跡	胴部片、叩目文 内面ヘラ調整痕
115	〃		外・灰　色 内・　〃	〃	〃	D区・T5	胴部片、格子目文 内面ヘラ調整痕
116	〃		外・灰白色 内・　〃	〃	〃	D区・T6	胴部片、格子目文 内面同上
117	〃		外・灰　色 内・灰白色	〃	〃	7号土坑	胴部片、格子目文 内面同上
118	〃		外・明黄褐色 内・灰黄褐色	〃	やゝ良好	D区・T7	胴部片、叩目文 内面同上
119	〃		外・灰　色 内・　〃	〃	良　好	6号土坑	胴部片、叩目文 内面青海波文
120	〃		外・黄灰色 内・灰白色	〃	〃	C区・一括	胴部片 外面叩目文、内面青海波文
121	〃		外・浅黄色 内・灰　色	〃	〃	2号集石遺構	胴部片、外面格子目文 内面青海波文
122	壺		外・灰白色 内・灰　色	〃	〃	C区・一括	胴部片、外面無文ナデ 内面回転ヨコナデ
123	蓋		外・灰　色 内・　〃	〃	〃	6号土坑	壺蓋片、陵2条端部は外反し急角に下向する。
124			外・灰　色 内・　〃	〃	〃	1号住居跡	底部片 高台付土器の片
125	壺		外・灰黄色 内・灰　色	〃	〃	D区・T7	胴部片、頸部を含む片 陵外面1、内面3条
126	〃		外・灰白色 内・　〃	〃	〃	2号集石遺構	胴部片、外面無文、内面に回転仕上げの陵4条、底部も含む片
127	不明		外・灰白色 内・　〃	〃	あまい	2号土坑	高台付土器底部片 内面に一部炭付着
128			外・灰　色 内・　〃	〃	良　好	1号住居跡	底部片、高台の座付は急に外反する。内面ヘラ調整痕

瓦　（第２０図）

表　6.

図番号	器　種	出　土　地	備　　考
１２９	平　瓦	D区・一括	平瓦片 表裏に布目文　　焼成あまい
１３０	のし瓦	3号住居跡上	外面無文、内面は細目の布地目文 のし瓦片　　焼成良好
１３１	棟　瓦	D区・T 6	無文、棟瓦片 焼成良好
１３２	のし瓦	6号土坑	のし瓦片、外面布目文 内面は細目の布地目文　　焼成良好

青　磁　（第２１図）

表　7.

図番号	器　種	出　土　地	備　　考
１３３	碗	2号住居跡	口縁部片 内湾して胴部が立ち上がる。口縁部は急に外反する。
１３４	鉢	楕円形状遺構	口縁部片、胴は外反ぎみに立ち上がる。 口縁部は内側に向ってふくらむ。
１３５	同　上	3号住居跡	胴部片、胴に１条の陵をもち外反して立ち上がる。 稜花を呈した口縁である。
１３６	同　上	7号土坑	胴部片、胴は内湾して立ち上がり縦縞の凹凸で施紋される。
１３７	碗	6号住居跡	底部近くの胴部片、内面にかすかな草花紋が認められる。
１３８	鉢	E区・T 1	口縁部を含む胴部片、内湾して立ち上がり口縁近くで大きく外反して開く。

白　磁（第２１図）

表　8.

図番号	器　種	出土地	備　　考
１３９	鉢	４号住居跡	平底の底部を含む胴部片
１４０	碗	D区・T１	胴部片、わずかに茶系色を帯びている。内面は回転調整痕の数条を残す。
１４１	同　上	B区・一括	高台を含む底部片、わずかに青色を帯びる。内面には縦縞の凹凸が施紋される。
１４２	鉢	E区・T１	高台際から口縁までの片、胴部に陵をもち内湾して立ち上がる。口縁近くで外反する。

陶　器（第２１図）

表　9.

図番号	器　種	出土地	備　　考
１４３	盤（推）	A区・１０	底部片、底面に約1.5×3センチの４個の座付をもつ。外面黒色、内面オリーブ黒の釉をかけている。
１４４	甕	E区・T１	口縁部片、口縁部は外に１センチ、内に0.5センチ張り出す。外面は緑灰色の釉をかけ波型の施紋。
１４５	同　上	A区・一括	胴部片、胴は内湾して立ち上がり、一条の三角突帯タガがめぐらされる。
１４６	同　上	A区・５	胴部片、胴は内湾して立ち上がり半円突帯タガの一条が施こされる。外面黒色内面オリーブ黒の釉をかける。
１４７	鉢	A区・一括	口縁の外側に三角突帯を有する　鉢の口縁部片
１４８	甕	２号住居跡	内外とも凹凸の多い不整形な胴部片
１４９	壺	C区・T３	胴部片、胴は内湾して立ち上がる。回転による調整痕が内外面ともに多い。

磁　器（第２２図）

表１０.

図番号	器　種	出　土　地	備　　考
１５０	碗	A区・T５	高台の一部を残す底部片、高台内は深い。
１５１	〃	同　上	上記１５０番と接着する遺物片、高台は開き気味
１５２	〃	C区・一括	高台際の一部を含む胴部片、やゝ肉厚
１５３	皿	A区・６	高台を含む底部片、回転調整の陵２条が外面にある。
１５４	碗	７号土坑	高台際から口縁までの胴部片 高台の外壁は直下、内面は開き気味、内部は浅い。

染　付（第２２図）

表１１.

図番号	器　種	出　土　地	備　　考
１５５	皿	７号土坑	高台付の底部片、底部は厚手胴部はやゝ薄手となる。
１５６	碗	C区・T３	口縁部と胴部の一部を欠く。底部から口縁にかけて徐々に薄手となる。
１５７	同　上	D区・T６	高台１／２を残す底部片、高台はわずかに外に開く。
１５８	皿	７号土坑	口縁から高台際までの胴部片、胴は内湾して立ち上がる。口縁は丸くおさめている。
１５９	鉢	同　上	口縁部片、胴は内湾気味に立ち上がり口縁部は大きく外反して開く。
１６０	碗	楕円形状遺構	高台１／３を残す片、三角状の高台で先端部は欠けている。
１６１	皿	A区・一括	高台の一部を残す胴部片。高台はやや外に開き高台内は浅い。
１６２	同　上	B区・一括	高台の一部を残す底部片、三角状の高台で底部は薄いが胴部はやゝ厚手となる。
１６３	鉢	D区・T６	口縁から高台際までの片、胴は内湾して立ち上がり厚味も徐々に薄くなる。
１６４	同　上	D区・T１	底部の一部と胴部片、平底の底部から急角に立ち上がる。

ま　と　め

日高正晴

西都原古墳群台地と西都市の中心市街地との間に、東に広がる中間台地が存在するが、この一帯は、古代西都原地方の集落が形成された地域であり、今でも遺物の散布地帯になっている。このたび、道路新設のための事前発掘調査が行われた地点も、その中間台地の南端から東の方に突出した山王前畑台地上にある。ところで、この山王前畑の台地中央部を幅18mで南北に道路を通すということで、まず、想起されたことは、その予定道路敷の西側に接して、重要文化財指定の「児湯郡印」（銅印）が古くから伝世された旧家の河野家が存在していることである。また、この約3ヘクタールにおよぶ台地の大部分は、古来、同家の所有地であり、そしてこの台地の東側には、現在でも、古い建造物の礎石と推定される比較的大きい石が10数個散在している。郡印で伝世品というのは日本でもほかに例証がないが、このようなことで、もしかするとこの一帯には律令時代の官衙の遺構なども存在するかもしれないと考えていた。しかしながら、発掘調査を行ってみたところ、この約130mにおよぶ道路敷内から、古墳時代の方形状竪穴住居址が6ヶ所発見され、その他土坑なども確認された。そして住居址内からはかなりな量の土師器も出土したが、特に、各住居址全面に高杯が数多く認められたのは特徴的であった。また、その規模であるが、最小のものは第3号住居址の3.5m×3.02m、最大のものは5.35m×5.67mで、そのほかは径が4m代である。そして竪穴の深さは5号住居址が浅いだけで、その他は約30cmの落ち込みになっていた。それから竪穴住居における柱穴配置の状況であるが、興味あるのは1号および3号住居址は柱穴がそれぞれ竪穴の外側に設けられていることである。しかも両住居址では、大体、南北にそって柱穴が配列されているので、建築様式としては切妻形式になっていたようであり、東側からの採光に意を用いたのであろう。それに、この両住居址だけが径3m余の小住居址であった。次に、各住居址内から出土した遺物について述べてみることにするが、その中でも主として土師器について考えてみたい。まず、住居址から出土した土師器であるが、形式的には高杯、広口壺、坩、鉢などである。そしてそれらの土師器の焼成、色調は弥生時代終末期前後頃以降の土器の伝統を継承しているよ

うに思えた。最初に高杯について考察してみたい。各住居址から確認された高杯の脚部だけ数えてみても２０個近くはあるが、そのことから考えてみても、この住居址に住んだ人びとは極めて信仰儀礼的な生活を営んでいたことが推察される。そしてその土器形式は杯部に稜をもち、脚部の下方は少し開いて裾部がラッパ状に広がっており、ここから出土の高杯はほとんどこの様式になっていた。また、関心がもたれたのは、１号土坑・４号・５号住居址からそれぞれ小形丸底壺が出土したことである。この坩形土器は古式土師器の布留式土器系統の流れをひくものであり、その意味でもこの山王遺跡は興味深い、また広口壺もかなり出土しているが、胎土は細粒子混じりで、口縁部の外反りも余り深くなく立ち上っており、そしてその底部は細丸底を呈している。それから特徴的なのは１号・５号住居址出土の広口壺胴部外面には明確な叩き文が認められることである。この紋様なども古式土師器の伝統を引くものといえよう。以上、竪穴住居址出土の土師器の形式的考察を行ってみたが、本遺跡に見られる土師器は、玉口時雄氏の土師器編年(註)によると、第Ⅱ型式の前半頃に比定できると思われる。それで編年的には、５世紀前半から中葉後半頃にかけての時期に推定される。特に、この住居址からは須恵器が全く出土しなかったということを考慮に入れるとこの地域に須恵器が導入される以前の遺跡ということになる。ちょうど、その頃、西都原古墳群形成の最盛期の時期にあたり、女狭穂塚および４６号墳など畿内型中期前方後円墳が築造された年代に相当する。このほか出土品としては６号土坑から布目瓦片など数個の平瓦片と皿形の土師器が確認されており．本遺跡の出土遺物としてはわずかではあるが、律令時代の出土品として注目しておかなければならない。当初に述べたように、このたびの事前調査地域は山王前畑台地全域の中では、わずかの面積にしかあたらない。平安中期頃の郡司が使用した児湯郡印がいつの時代からこの河野家に伝わったのか明確ではないが、古くから家宝として伝世した旧家が、現在もこの山王台地の中央部に存在していることは、今後ともこの遺跡周辺に対して探究を進めなければならないと思う。それにしても、この山王遺跡の発掘調査において、律令期の解明はできなかったにしても、五世紀代における西都原周辺の集落形成の究明に大きく貢献したことになる。

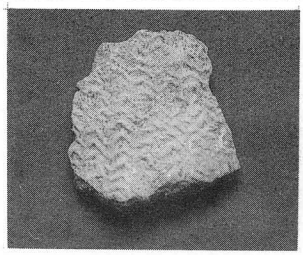
註　玉口時雄「土師器」『新版考古学講座』原史文化下　昭和４５年

図　版

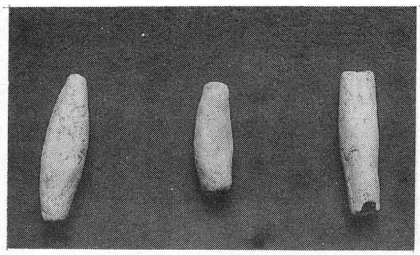
うに思えた。最初に高杯について考察してみたい。各住居址から確認された高杯の脚部だけ数えてみても２０個近くはあるが、そのことから考えてみても、この住居址に住んだ人びとは極めて伝統意識的な生活を営んでいたことが推察される。そしてその土器形式は坂東に除をもち、脚裾のすぼまりから開いて底部がラッパ状に広がっており、ごく一般的な高杯はほとんどこの様式にあてはまった。また、関心がもたれたのは、１号土坑と４号・５号住居址からそれぞれ小型丸底壺が出土したことである。この壺形土器は古式土師器の布留式土器系統の流れをひくものであり、その意味でもこの山王遺跡は興味深い。また広口壺もかなり出土しているが、器形は細かく手法にりで、口縁部の外反りも余り強くなく立ち上っており、そしてその底部は細九底を呈している。それから特徴的なのは１号・５号住居址出土の広口壺胴部外面には明確な刷毛目が認められることである。この技法なども古式土師器の伝統を引くものといえよう。以上、竪穴住居址出土の土師器の形式的考察を行ってみたが、本遺跡に見られる土師器は、玉口時雄氏の土師器編年によると、第Ⅱ型式の前半頃に比定できると思われる。それで暦年的には、５世紀前半から中葉頃までにかけての時期に推定される。尚に、この住居址からは須恵器が全く出土しなかったということを考慮に入れるとこの地域に須恵器が導入される以前の遺跡ということになる。ちょうど、その頃、西部関東古墳群後成の最盛期の時期にあたり、大塚初山および４号墳など墳内型中期前方後円墳が築造された年代に相当する。このほか出土品としては６号土坑から砥石片など数個の平滑片と磨製の土師器が確認されており、本遺跡の出土遺物としてはわずかではあるが、律令時代の出土品として注目しておかなければならない。当初に述べたように、このたびの発掘調査地域は山王前畑台地全域の中で極、ほ少の面積にしかあたらない。平安中期頃の墨書が使用した児湯郡印がいつの時代からこの周辺地域に広まったのか明確ではないが、古くから家宝として伝世した印章が、現在もこの山王前地域の各家に存在していることは、今後ともこの遺跡周辺に対して発掘を進めなければならないと思う。それにしても、この山王遺跡の発掘調査において、律令期の解明はできなかったにしても、元禄年代における西都原周辺の集落形成の究明に大きく貢献したことになる。

註、玉口時雄「土師器」『新版考古学講座』原史文化下、昭和４３年

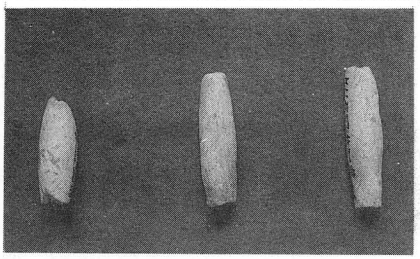
図版 1　（縄文土器・土錘・土師器）



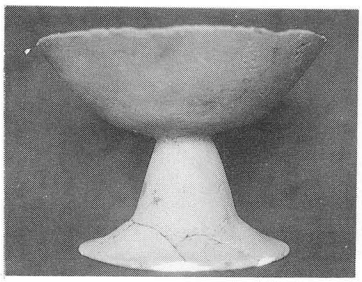
1. 縄文土器



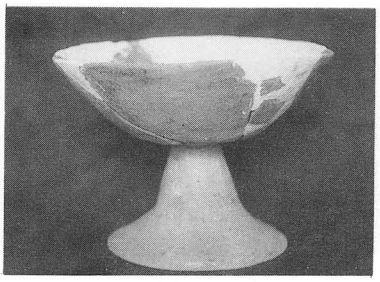
2　3　4



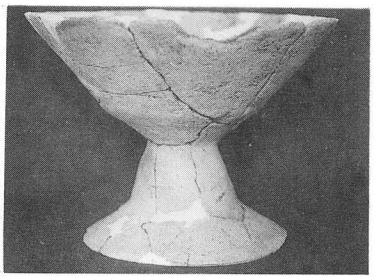
5　6　7



8



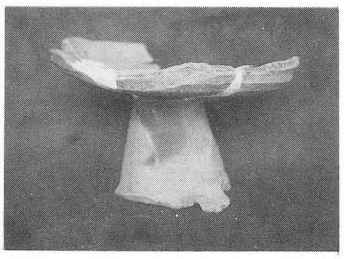
9



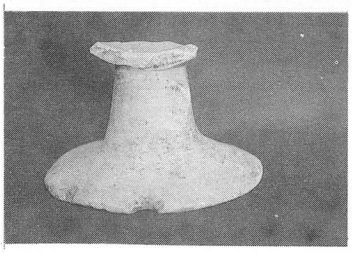
10

11

12

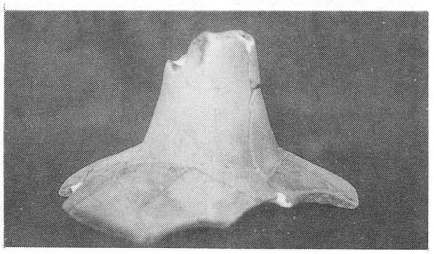


13

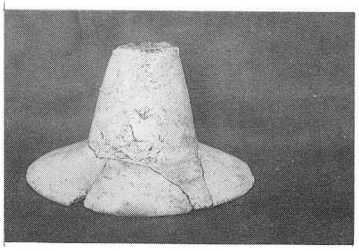


14

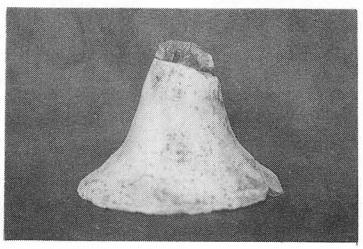
15



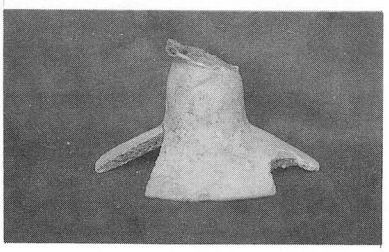
16



17



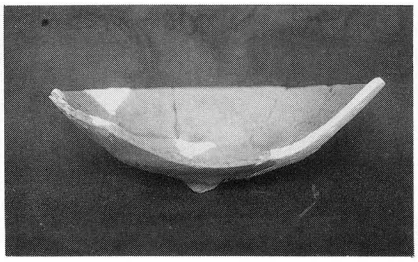
18



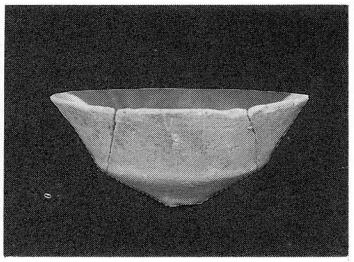
19

土師器

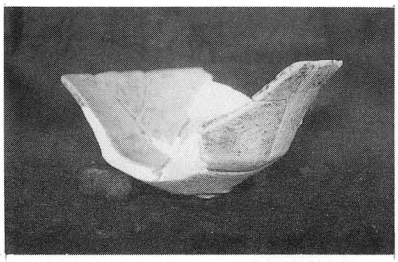
20



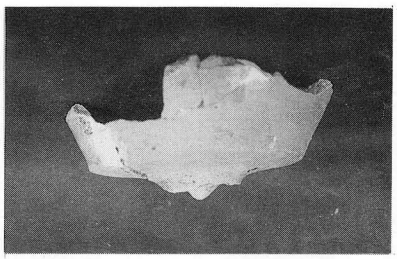
21



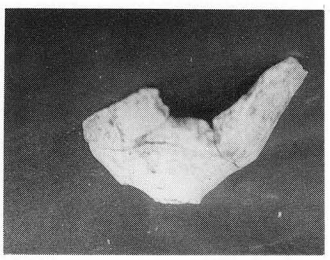
22



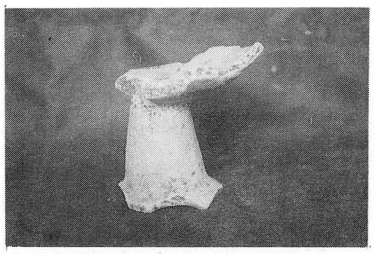
23



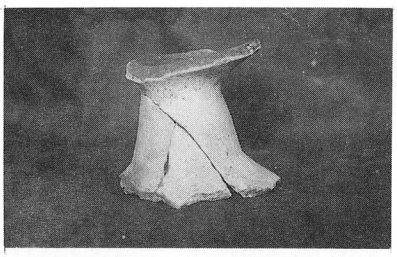
24



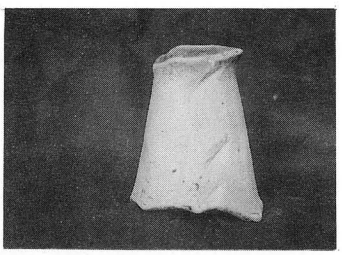
25



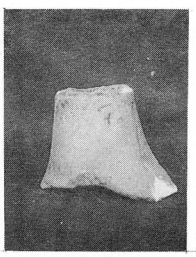
26



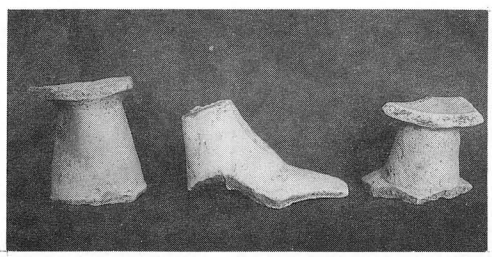
27



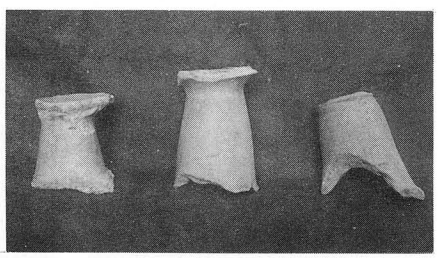
28



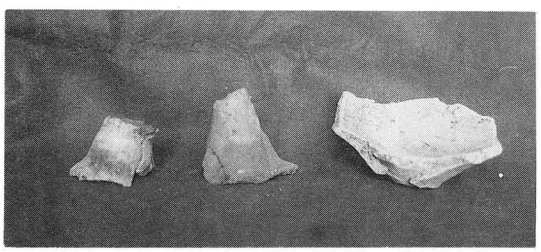
29



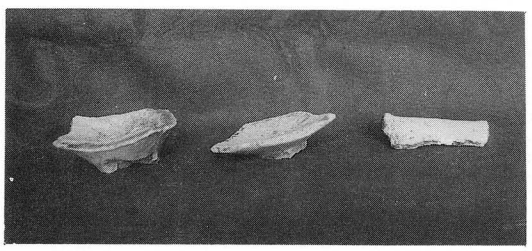
30 31 32



33 34 35

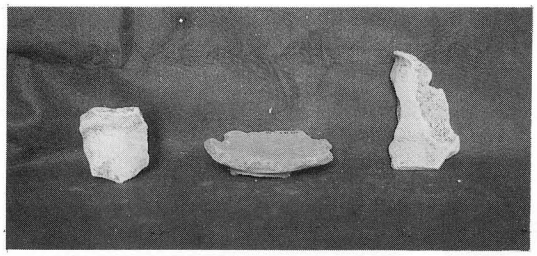


36 37 38

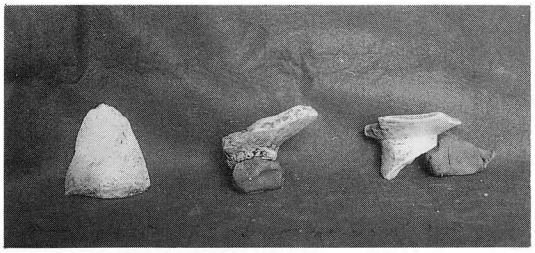


39 40 41

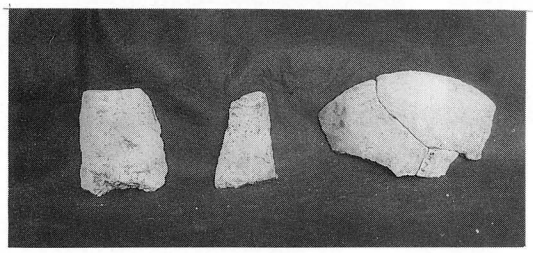
土師器



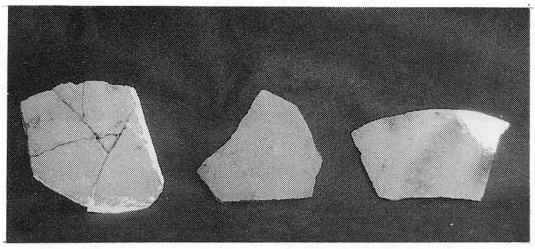
42 43 44



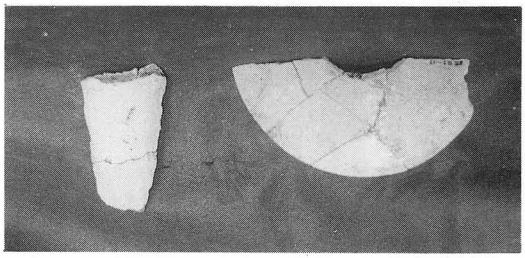
45 46 47



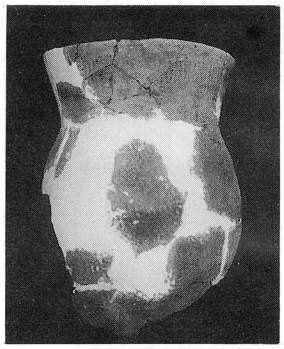
48 49 50



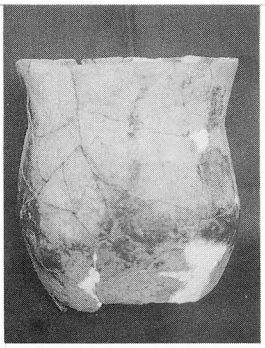
51 52 53



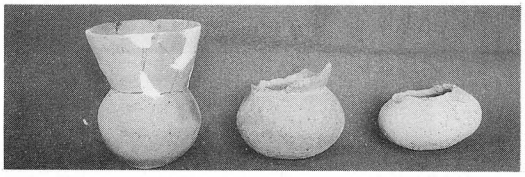
54 55



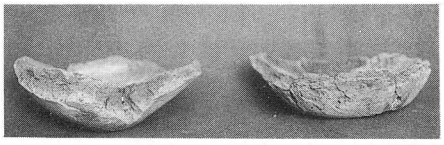
56



60

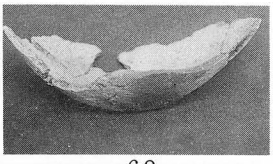


57 58 59



64 65

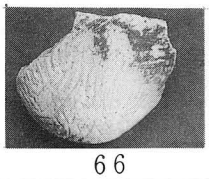
61



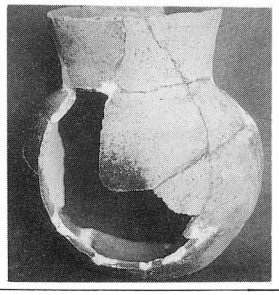
62

63

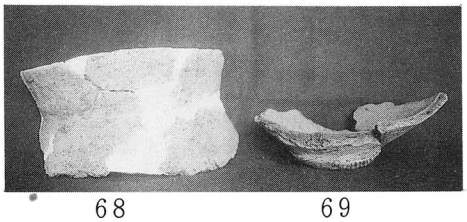
70 71



66

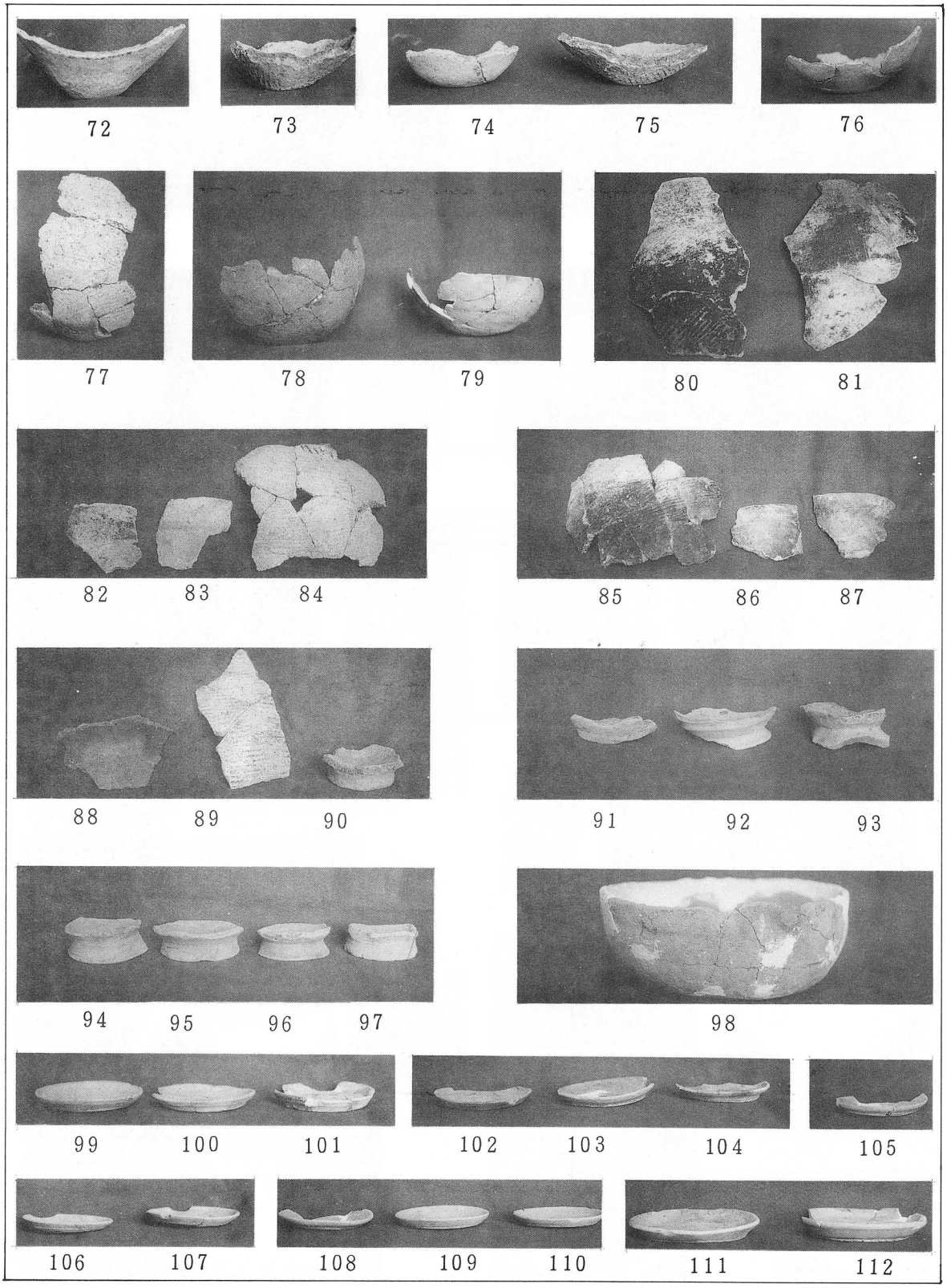


67

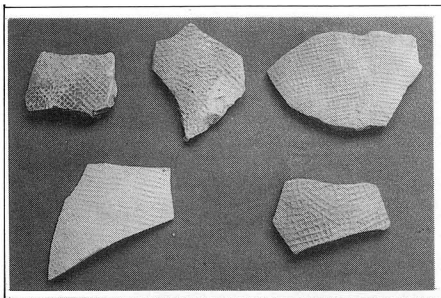


68 69

土師器

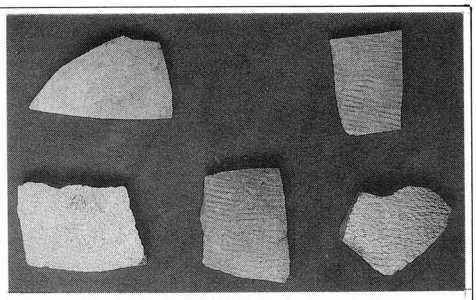

72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112

図版 2　（須恵器・瓦・陶磁器）

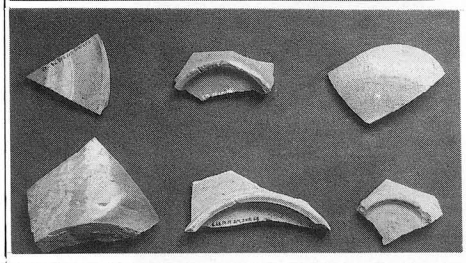


113　・　114

115 ・ 116 ・ 117

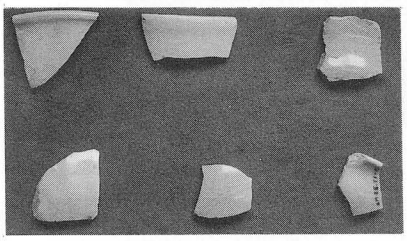


118　・　119
120 ・ 121 ・ 122

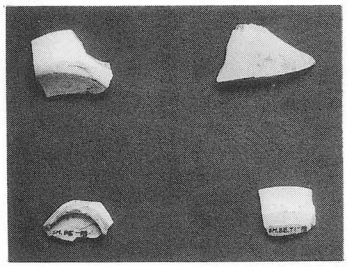


123・124・125

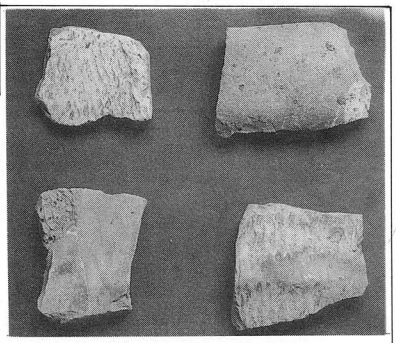
126・127・128



青磁　133 ・ 134 ・ 135
136 ・ 137 ・ 138

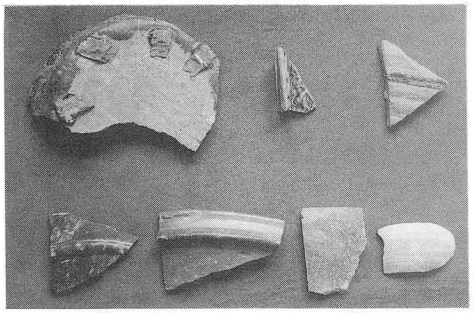


白磁　139 ・ 140
141 ・ 142



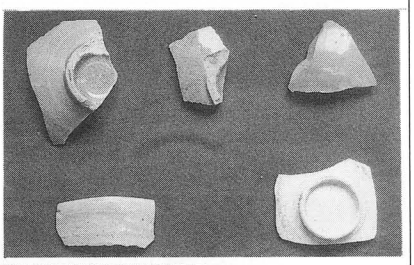
瓦 129 ～ 132

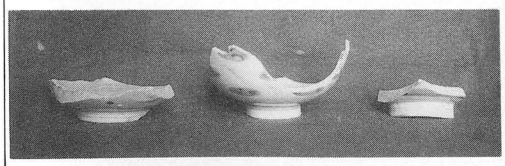
磁器　150 ～ 154



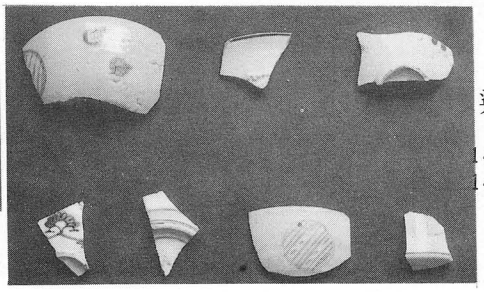
陶器

143 ・ 144 ・ 145
146・147・148・149





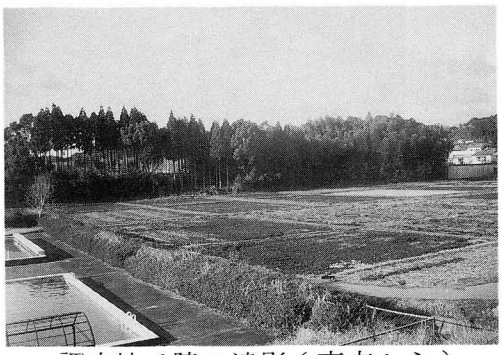
染付　155 156 157



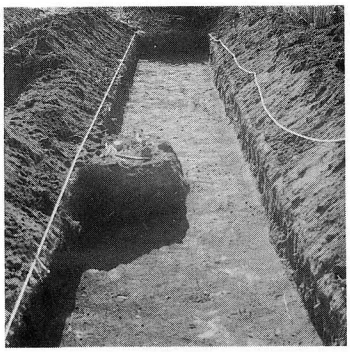
染付

143 ・ 144 ・ 145
146・147・148・149

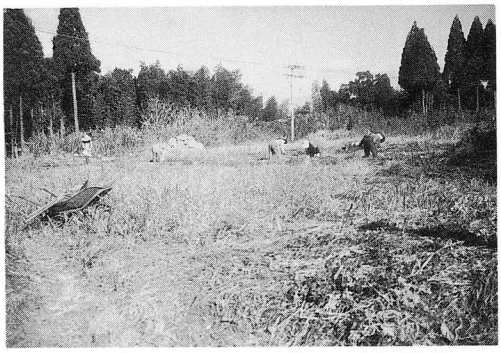
図版 3.



調査地丘陵の遠影（東方から）



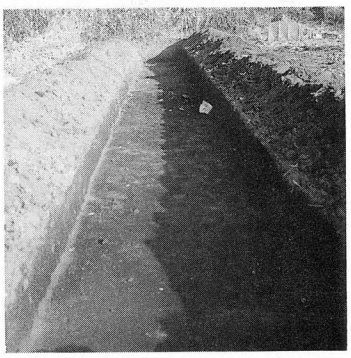
トレンチ



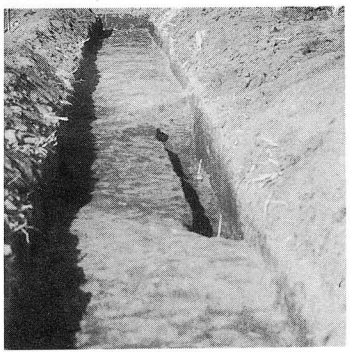
A区から見た調査地

トレンチ

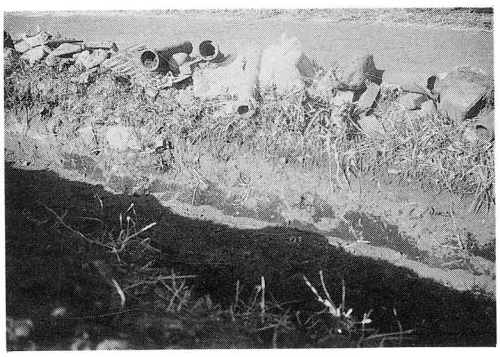
調査地北辺の隣接地



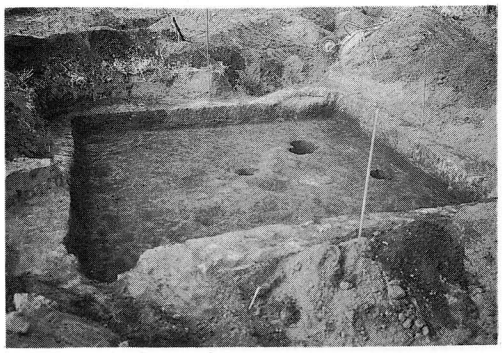
トレンチ



トレンチ

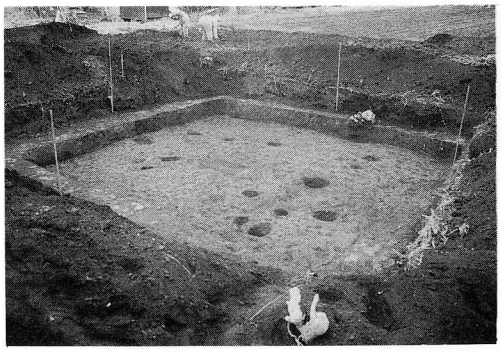


掘り出されたガレキ



1 号住居跡

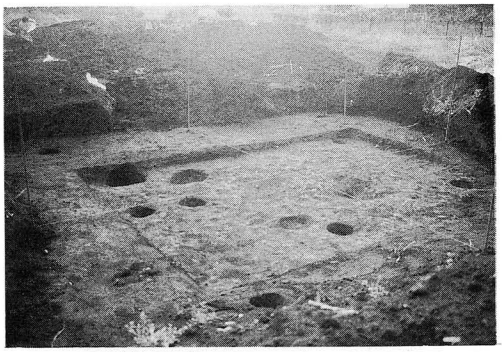
4 号住居跡



2 号住居跡

4 号住居跡の炉跡

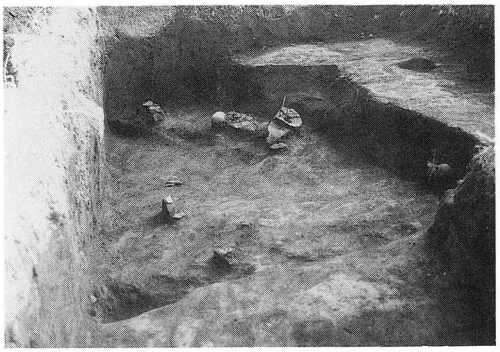
2 号住居の炉跡



5 号住居跡

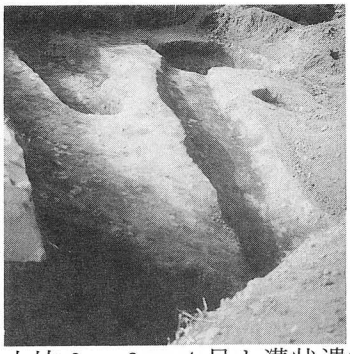
3 号住居跡

6 号住居跡の検出作業

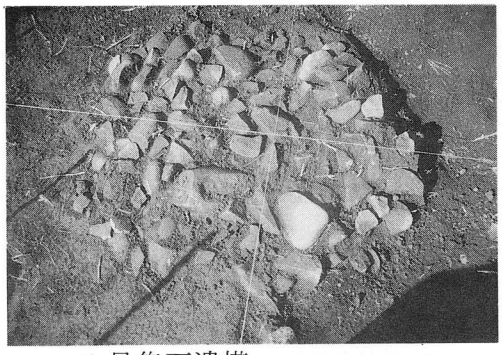


1号土坑

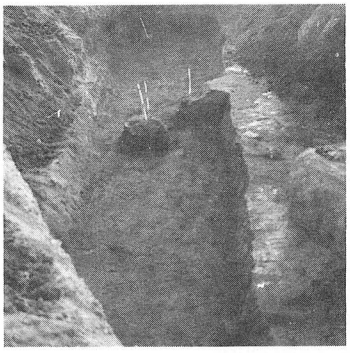
楕円形状遺構とトレンチ



土坑2～3～4号と溝状遺構

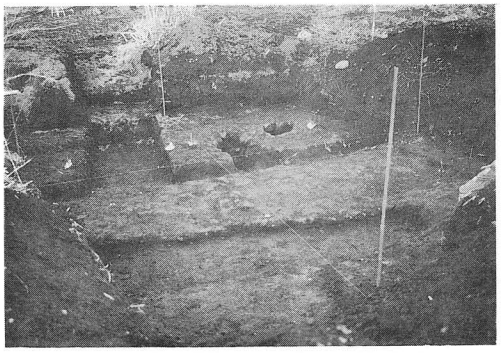


1号集石遺構

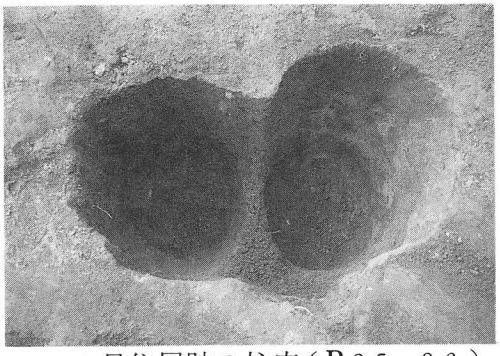


6号土坑

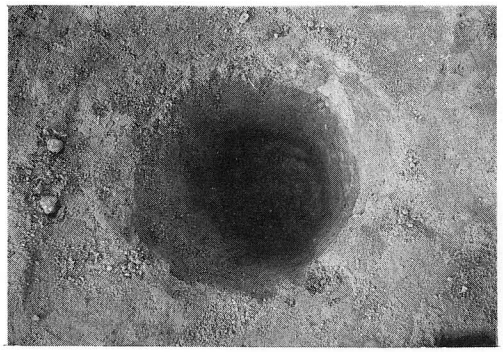
2号集石遺構



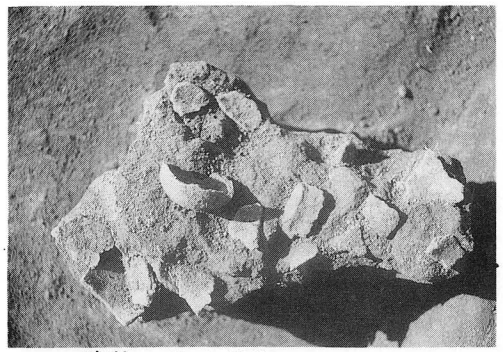
7号土坑



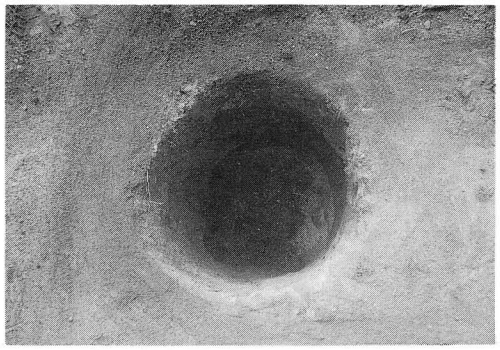
1号住居跡の柱穴（P35～36）



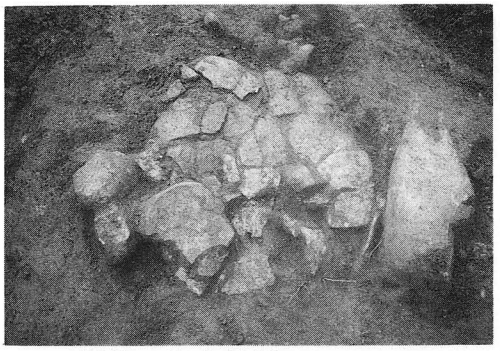
1号住居跡の柱穴（P—34）



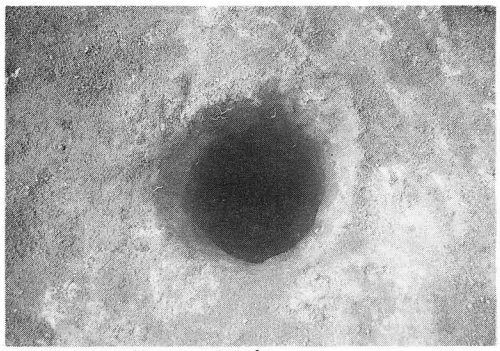
遺物の出土状況



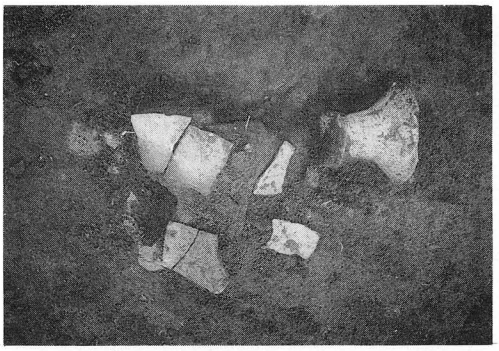
A区検出の柱穴



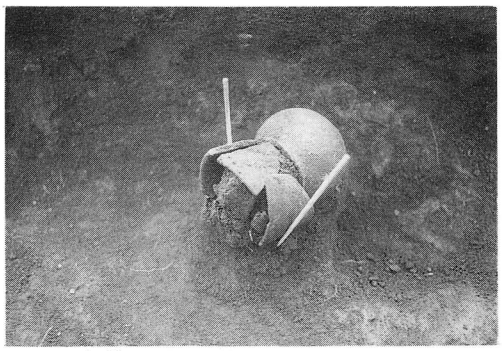
遺物の出土状況



A区検出の柱穴



遺物の出土状況



遺物の出土状況

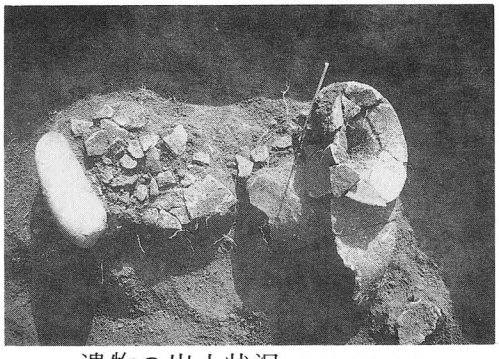
遺物の出土状況

遺物の出土状況

C区の土層確認坑

遺物の出土状況

A区の土層



遺物の出土状況

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書　第８集

平成元年３月３０日　発行

編集者　西都原古墳研究所
電話（0983）43―1111内線610

発行者　西都市教育委員会

印刷所　ふくしげ印刷所